

JP1 Version 9

JP1/ServerConductor/Deployment Manager 構築ガイド

手引・操作書

3020-3-T68-70

■ 対象製品

R-15181-95V JP1/ServerConductor/Deployment Manager 09-70

■ 輸出時の注意

本製品を輸出される場合には、外国為替及び外国貿易法の規制並びに米国輸出管理規則など外国の輸出関連法規をご確認の上、必要な手続きをお取りください。

なお、不明な場合は、弊社担当営業にお問い合わせください。

■ 商標類

- ・ Linux は、Linus Torvalds 氏の日本およびその他の国における登録商標または商標です。
- ・ Microsoft, Hyper-V, Windows, Windows Vista, Internet Explorer は米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。
- ・ Microsoft .NET は、お客様、情報、システムおよびデバイスを繋ぐソフトウェアです。
- ・ Microsoft および SQL Server は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。
- ・ Oracle と Java は、Oracle Corporation 及びその子会社、関連会社の米国及びその他の国における登録商標です。
- ・ Red Hat は、米国およびその他の国で Red Hat, Inc. の登録商標もしくは商標です。
- ・ VMware は、米国およびその他の地域における VMware, Inc. の登録商標または商標です。
- ・ VMware vSphere ESX は、米国およびその他の地域における VMware, Inc. の登録商標または商標です。
- ・ 本製品には The Apache Software Foundation より開発したソフトウェア (Apache Ant) が含まれています。
Apache Ant is made available under the Apache Software License, Version 2.0.
<http://www.apache.org/licenses/LICENSE-2.0.html>
- ・ Tomcat は、Apache Software Foundation の商標または登録商標です。
- ・ 7zip は Igor Pavlov の登録商標です。
- ・ Portions of this software were originally based on the following:
 - software copyright (c) 1999, IBM Corporation., <http://www.ibm.com>.
- ・ PXE Software Copyright (C) 1997 - 2000 Intel Corporation
- ・ 本製品には、Pocket Zip (Info-Zip) を改変した Zip を含んでいます。
- ・ 本製品には、Apache Software Foundation が無償で配布しているソフトウェア (Xerces-C++ Version 3.1.1) を含んでいます。この製品については、使用許諾に同意したうえで利用してください。著作権、所有権の詳細につきましては以下の LICENSE ファイルを参照してください。

Xerces-C++ Version 3.1.1 : The Xerces-C++ Version 3.1.1 is available in both source distribution and binary distribution. Xerces-C++ is made available under the Apache Software License, Version 2.0.

<http://www.apache.org/licenses/LICENSE-2.0.html>

- ・ 本製品には、Apache Software Foundation が無償で配布しているソフトウェア (log4net for .NET Framework 2.0 Version 1.2.10.0) を含んでいます。

著作権、所有権の詳細については以下のファイルを参照してください。

<インストール媒体> : ¥License¥log4net for .NET Framework 2.0¥

- ・ 本製品には、SpringSource が無償で配布しているソフトウェア (Spring.Net Core functionality Version 1.2.0.20313) を含んでいます。

著作権、所有権の詳細については以下のファイルを参照してください。

<インストール媒体> : ¥License¥Spring.Net Core functionality¥

- ・ 本製品には、Prototype Core Team が無償で配布しているソフトウェア (Prototype JavaScript framework, version 1.6.0.3) を含んでいます。

著作権、所有権の詳細については以下を参照してください。

=====

Prototype is freely distributable under the terms of an MIT-style license.

For details, see the Prototype web site: <http://www.prototypejs.org/>

=====

・本製品には、Datasoft Solutions が無償で配布しているソフトウェア (Tree Container Library(TCL) Version 5.0.6) を含んでいます。

・ Some icons used in this program are based on Silk Icons released by Mark James under a Creative Commons Attribution 2.5 License. Visit <http://www.famfamfam.com/lab/icons/silk/> for more details.

・ The Cygwin DLL and utilities are Copyright (C) 2000, 2001, 2002, 2003, 2004, 2005, 2006, 2007, 2008, 2009, 2010, 2011 Red Hat, Inc. Other packages have other copyrights.

UNIX(R) is a registered trademark of the Open Group in the United States and other countries.

・ Copyright (C) 2001-2003 Hewlett-Packard Co. Contributed by Stephane Eranian eranian@hpl.hp.com

・ Copyright 1994-2008 H. Peter Anvin - All Rights Reserved

・ その他記載の会社名、製品名は、それぞれの会社の商標もしくは登録商標です。

・ インストール媒体に格納されているソース、バイナリファイルは、各ソース、バイナリファイルのライセンスに帰属します。

■ マイクロソフト製品のスクリーンショットの使用について

マイクロソフトの許可を得て使用しています。

■ マイクロソフト製品の表記について

このマニュアルでは、マイクロソフト製品の名称を次のように表記しています。

表記	製品名
Internet Explorer	Windows(R) Internet Explorer(R)
.NET Framework	Microsoft .NET Framework 4.6
	Microsoft .NET Framework 4.5
	Microsoft .NET Framework 4
	Microsoft .NET Framework 3.5 SP1
	Microsoft .NET Framework 3.0 SP2
	Microsoft .NET Framework 2.0 SP2
	Microsoft .NET Framework 4.5 日本語 Language Pack
	Microsoft .NET Framework 4 日本語 Language Pack
	Microsoft .NET Framework 3.5 SP1 日本語 Language Pack
	Microsoft .NET Framework 3.0 SP2 日本語 Language Pack
Microsoft .NET Framework 2.0 SP2 日本語 Language Pack	
Microsoft SQL Server	Microsoft SQL Server 2005 Express Edition x86
	Microsoft SQL Server 2008 R2 Express x64
	Microsoft SQL Server 2008 R2 Express x86
	Microsoft SQL Server 2012 Express x64

表記		製品名
Microsoft SQL Server		Microsoft SQL Server 2012 Express x86
		Microsoft SQL Server 2014 Express x64
		Microsoft SQL Server 2014 Express x86
		Microsoft SQL Server 2016 Express x64
Windows Server 2008 R2	Windows Server 2008 R2	Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 R2 Datacenter 日本語版
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 R2 Enterprise 日本語版
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 R2 Standard 日本語版
Windows Server 2012	Windows Server 2012	Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Standard 日本語版
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Datacenter 日本語版
	Windows Server 2012 R2	Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Standard 日本語版
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Datacenter 日本語版
Windows Server 2016	Windows Server 2016	Microsoft(R) Windows Server(R) 2016 Datacenter 日本語版
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2016 Standard 日本語版
Windows Vista		Microsoft(R) Windows Vista(R) Business 日本語版
		Microsoft(R) Windows Vista(R) Enterprise 日本語版
		Microsoft(R) Windows Vista(R) Ultimate 日本語版
Windows 7	Windows 7	Microsoft(R) Windows(R) 7 Professional 日本語版
		Microsoft(R) Windows(R) 7 Enterprise 日本語版
		Microsoft(R) Windows(R) 7 Ultimate 日本語版
	Windows 7 x86	Microsoft(R) Windows(R) 7 Professional 日本語版(32ビット版)
		Microsoft(R) Windows(R) 7 Enterprise 日本語版(32ビット版)
		Microsoft(R) Windows(R) 7 Ultimate 日本語版(32ビット版)
	Windows 7 x64	Microsoft(R) Windows(R) 7 Professional 日本語版(64ビット版)
		Microsoft(R) Windows(R) 7 Enterprise 日本語版(64ビット版)

表記		製品名
Windows 7	Windows 7 x64	Microsoft(R) Windows(R) 7 Ultimate 日本語版(64 ビット版)
Windows 8	Windows 8	Windows(R) 8 Pro 日本語版
		Windows(R) 8 Enterprise 日本語版
	Windows 8 x86	Windows(R) 8 Pro 日本語版(32 ビット版)
		Windows(R) 8 Enterprise 日本語版(32 ビット版)
	Windows 8 x64	Windows(R) 8 Pro 日本語版(64 ビット版)
		Windows(R) 8 Enterprise 日本語版(64 ビット版)
Windows 8.1	Windows 8.1	Windows(R) 8.1 Pro 日本語版
		Windows(R) 8.1 Enterprise 日本語版
	Windows 8.1 x86	Windows(R) 8.1 Pro 日本語版(32 ビット版)
		Windows(R) 8.1 Enterprise 日本語版(32 ビット版)
	Windows 8.1 x64	Windows(R) 8.1 Pro 日本語版(64 ビット版)
		Windows(R) 8.1 Enterprise 日本語版(64 ビット版)

■ 発行

2017 年 9 月 3020-3-T68-70

■ 著作権

All Rights Reserved. Copyright (C) 2012, 2017, Hitachi, Ltd.

Copyright (C) NEC Corporation 2003-2017. All rights reserved.

変更内容

変更内容 (3020-3-T68-70) JP1/ServerConductor/Deployment Manager 09-703

追加・変更内容	変更箇所
DPM の DVD 構成を変更した。	1.1
インストールを始める前の確認項目に対する説明を変更した。	1.2
IIS のインストール手順に対する説明を削除, 追加した。 (IIS7.0, IIS10.0)	1.2.1
DPM サーバの設定に対する説明を変更した。	1.2.2
.NETFramework のインストールに対する説明を追加, 削除した。 (.NET Framework 3.5.1 SP1, .NET Framework 4.6.2)	1.2.4
共通コンポーネントに対する注意事項を追加した。	1.3
DPM サーバのインストールに対する説明を追加, 変更した。	2.1
DPM クライアント (Linux (x86/x64) 版) のインストールに対する説明を変更した。	2.2.2
イメージビルダ (リモートコンソール) のインストール手順を削除した。	
DPM サーバのアップグレードインストールに対する説明を変更した。	3.2
DPM クライアントのアップグレードインストールに対する説明を変更した。	3.3
DPM クライアントの自動アップグレードインストールに対する説明を変更した。	3.3.1
自動アップグレード可能な DPM クライアントバージョンを変更した	表 3-1
DPM クライアントの手動アップグレードインストールに対する説明を変更した。	3.3.2
DPM サーバのアンインストールに対する説明を変更した。	4.2
DPM クライアント (Windows (x86/x64)) のアンインストールに対する説明を変更した。	4.3.1
イメージビルダ (リモートコンソール) のアンインストール手順を削除した。	
Web コンソールの起動に対する説明を変更した。	5.1.1
ネットワークポートとプロトコル一覧を変更した。	付録 B.1
Microsoft SQL Server の SP インストール手順を追加した。 (Microsoft SQL Server 2008 R2 Express, Microsoft SQL Server 2012, Microsoft SQL Server 2014 Express)	付録 D.2
Microsoft SQL Server 2014 Express へのアップグレード手順を追加した。	付録 D.3

単なる誤字・脱字などはお断りなく訂正しました。

はじめに

■ 対象読者

「構築ガイド」は、JP1/ServerConductor/Deployment Manager (以下、DPM) DPMのインストール、アップグレードインストール、アンインストール、および初期設定を行うシステム管理者を対象読者とし、それぞれの方法について説明します。

■ マニュアル体系

DPMのマニュアルは、「導入・設計ガイド」「構築ガイド」「運用ガイド」「リファレンスガイド」があります。詳細は、このマニュアルの「付録 F.1 関連マニュアル」を参照してください。

■ マニュアルの構成

このマニュアルは、次に示す編、章と付録から構成されています。

第1編 DPMのインストール操作

この編では、DPMのインストール、アップグレードインストール、アンインストール方法について説明します。

第1章 インストールを始める前に

インストールを始める前に、よく読んでください。

第2章 インストールを実行する

インストール手順を説明します。

第3章 アップグレードインストールを実行する

ご使用のバージョンからのアップグレード手順を説明します。

第4章 アンインストールを実行する

アンインストール手順を説明します。

第2編 環境構築

この編では、DPMのインストール後、運用開始までに行うべき環境構築について記載します。

第5章 DPM運用前の準備を行う

DPMの初期設定について説明します。

付録 A サービスおよびプロセス一覧

DPMのサービスおよびプロセスについて説明します。

付録 B ネットワークポートとプロトコル一覧

DPMで使用するネットワークポートとプロトコルについて説明します。

付録 C DPMクライアントのサイレントインストール

DPMクライアント (Windows(x86/x64)) のサイレントインストール手順を説明します。

付録 D データベースのアップグレード手順

DPMで使用するデータベースのアップグレード手順を説明します。

付録 E 各バージョンの変更内容

各版での変更内容を説明します。

付録 F このマニュアルの参考情報

このマニュアルを読むに当たっての参考情報を示します。

■ このマニュアルの表記規則

このマニュアルの表記についての注意点を記載します。

- バージョンを示す際に、VV-RR-SS (VV：バージョン番号，RR：リビジョン番号，SS：限定コード，例：09-51-/A) と明記しないかぎり，VV-RR と表記した場合は VV-RR-SS を含みます。
- このマニュアルでは DPM 製品に添付されているインストール媒体を「インストール媒体」と表記します。
- このマニュアルでは IPv4 アドレスを「IP アドレス」、IPv6 アドレスを「IPv6 アドレス」と表記します。
- このマニュアルでは 32bit 版 OS を「x86」、64bit 版 OS を「x64」と表記します。
- DPM のインストール画面や，Web コンソールなどで IP アドレスを指定する説明については，原則として 10 進数で表記します。ただし，実際の指定の際に各オクテットの先頭に 0 を指定すると，8 進数で処理される場合があります。

(例)

「192.168.1.024」と指定した場合，第 4 オクテットの「024」は 8 進数とみなされ，10 進数で「20」となるため，「192.168.1.20」として処理されます。

- Windows Server 2012/2012 R2/2016 の場合，「スタート」メニューをスタート画面に読み替えてください。
- 注：は，機能，操作，および設定に関する注意事項，警告事項，および補足事項です。
- DPM を使用するにあたって，OS によって表示/手順が異なる場合があります。このマニュアルでは原則として，Windows Server 2008 R2 に基づいて記載しています。Windows Server 2008 R2 以外の OS で DPM を使用する場合は，適時読み替えてください（一部，Windows Server 2008 R2 以外の OS に基づいて記載している場合もあります）。

(例)

DPM のバージョンを確認する手順が以下のように異なります。

- Windows Server 2012/Windows Server 2016 の場合

(1) Windows デスクトップから，画面右上隅（または右下隅）にマウスポインタを合わせて，表示されたチャームから「設定」を選択します。

(2) 「設定」画面が表示されますので，「コントロールパネル」→「プログラム」→「プログラムと機能」を選択します。

- Windows Server 2008 R2 の場合

(1) 「スタート」メニュー→「コントロールパネル」→「プログラムと機能」を開きます。

※ 「バージョン」欄が表示されていない場合は，以下の(2)(3)の手順を行ってください。

(2) 「表示」→「詳細表示の設定」を選択します。

(3) 「詳細表示の設定」画面で，「バージョン」チェックボックスにチェックを入れ，「OK」ボタンをクリックします。

- 上記以外の OS の場合

(1) 「スタート」メニュー→「コントロールパネル」→「プログラムの追加と削除」（もしくは「アプリケーションの追加と削除」）を開きます。

(2) 該当するコンポーネントを選択して，「サポート情報を参照するには，ここをクリックしてください」をクリックします。

- Windows Server 2012 R2 については，明記していないかぎり，Windows Server 2012 の説明を適宜読み替えてください。

- 画面操作手順の説明でユーザが設定する任意の名称（データベースのインスタンス名）については、「**インスタンス名**」のように太字/斜体文字で表記します。

(例)

- 以下のサービスを再起動します。

SQL Server (**インスタンス名**)

- ツリービュー上で、「リソース」アイコン→「シナリオ」アイコン→「シナリオグループ」アイコンをクリックします。

- このマニュアルではデータベースについてはインストール媒体に同梱している Microsoft SQL Server 2016 SP1 Express に基づいて記載していますので、適宜読み替えてください。

(例)

DPM のデータベースのパス

- Microsoft SQL Server 2016 SP1 Express x64 の場合：

C:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL13.**インスタンス名**\MSSQL\Binn

- Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express x86/x64 の場合：

C:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL12.**インスタンス名**\MSSQL\Binn

- Microsoft SQL Server 2012 Express x86/x64 の場合：

C:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL11.**インスタンス名**\MSSQL\Binn

- Microsoft SQL Server 2008 R2 SP1 Express x86/x64 の場合：

C:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL10_50.DPMDBI\MSSQL\Binn

- Microsoft SQL Server 2005 Express Edition x86 の場合：

C:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL.**x**\MSSQL\Binn

※x には、インスタンス数の数値が入ります。

- 画面上の JRE のバージョンの表示は、DPM で使用できる最新のバージョンのものではない場合があります。適宜読み替えてください。
- このマニュアル中で「DPM に関する処理を終了してください。」と記載がある場合は、以下の対処を行ってください。
 - シナリオを実行中の場合はシナリオが完了するまで待ってください。
 - 自動更新中の場合は自動更新が完了するまで待ってください。
 - Web コンソール、DPM の各種ツール類を起動している場合はそれらを終了してください。

目次

第 1 編 DPM のインストール操作

1	インストールを始める前に	1
1.1	DPM の DVD 構成	2
1.2	インストールを始める前に	3
1.2.1	インターネットインフォメーションサービス(IIS)を設定する	3
1.2.2	DHCP サーバの設定をする	16
1.2.3	JRE をインストールする	19
1.2.4	Windows Server 2012/Windows Server 2016 に.NET Framework 4.6.2 をインストールする	20
1.3	DPM コンポーネント共通の注意事項	22
2	インストールを実行する	23
2.1	DPM サーバをインストールする	24
2.2	DPM クライアントをインストールする	39
2.2.1	Windows (x86/x64) 版をインストールする	39
2.2.2	Linux (x86/x64) 版をインストールする	43
2.3	DPM コマンドラインをインストールする	48
3	アップグレードインストールを実行する	53
3.1	アップグレードインストールを始める前に	54
3.1.1	アップグレードインストール実行前の注意	54
3.2	DPM サーバをアップグレードインストールする	56
3.3	DPM クライアントをアップグレードインストールする	64
3.3.1	DPM クライアントを自動アップグレードインストールする	64
3.3.2	DPM クライアントを手動アップグレードインストールする	67
3.4	DPM コマンドラインをアップグレードインストールする	72
4	アンインストールを実行する	75
4.1	アンインストールを始める前に	76
4.1.1	アンインストール実行前の注意	76
4.2	DPM サーバをアンインストールする	77
4.3	DPM クライアントをアンインストールする	80
4.3.1	Windows (x86/x64) 版をアンインストールする	80
4.3.2	Linux (x86/x64) 版をアンインストールする	82
4.4	DPM コマンドラインをアンインストールする	83

第 2 編 環境構築

5	DPM 運用前の準備を行う	85
5.1	DPM 運用前の準備を行う	86
5.1.1	Web コンソールを起動する	86
5.1.2	ログインする	88
5.1.3	ログインユーザの設定を行う	90
5.1.4	ライセンスキーを登録する	91

付録		93
付録 A	サービスおよびプロセス一覧	94
付録 A.1	サービスおよびプロセス一覧	94
付録 A.2	サービスの開始, 停止方法と順序	98
付録 B	ネットワークポートとプロトコル一覧	100
付録 B.1	ネットワークポートとプロトコル一覧	100
付録 B.2	DPM のネットワークポート変更	111
付録 C	DPM クライアントのサイレントインストール	113
付録 D	データベースのアップグレード手順	115
付録 D.1	Microsoft SQL Server 2005 Express Edition SP3/SP4 のインストール	115
付録 D.2	Microsoft SQL Server 2008 R2/2012/2014 Express の SP インストール	127
付録 D.3	Microsoft SQL Server 2014 Express へのアップグレード	128
付録 E	各バージョンの変更内容	130
付録 F	このマニュアルの参考情報	134
付録 F.1	関連マニュアル	134
付録 F.2	このマニュアルでの表記	134
付録 F.3	KB (キロバイト) などの単位表記について	135

索引		137
----	--	-----

1

インストールを始める前に

この章では、このマニュアルの読み方、およびインストールを始める前の注意事項について説明します。

このマニュアルで説明する項目は以下のとおりです。

1.1 DPM の DVD 構成

DPM のインストーラ、および各ソフトウェアコンポーネントは、次のとおり DPM インストール媒体 (DVD-ROM1 枚組) に収録されています。

インストール媒体	
└ dotNet Framework462	.NET Framework 4.6.2 再頒布可能パッケージ
└ ja¥	.NET Framework 4.6.2 日本語 Language Pack
└ GPL	GPL 関連モジュール
└ License	製品に同梱している OSS モジュールの製品ライセンス
└ Linux	Linux 関連モジュール
└ MANUAL	マニュアル
└ OpenSource	OSS モジュール
└ Setup	セットアップモジュール
└ TOOLS	ツール類
└ zip	圧縮/解凍モジュール
Autorun.inf autorun.exe Launch.exe	ランチャの実行モジュール
Readme.txt	Readme

1.2 インストールを始める前に

インストールを始める前に以下の確認、および設定を行ってください。

注：

一連のインストール作業は、必ずローカルのビルトイン Administrator アカウント (OS インストール時に自動的に作成される管理者アカウント) で行ってください。

項目	どのような場合に確認が必要か	参照先
システムの構成/動作環境の確認をする	DPM のインストールを始める前	マニュアル「導入・設計ガイド 2.1 DPM のシステム構成の検討」
ネットワーク環境の設定をする	DPM をインストールする場合	マニュアル「導入・設計ガイド 2.2.1 ネットワーク環境について」
インターネットインフォメーションサービス(IIS)を設定する	DPM サーバをインストールする場合	このマニュアルの「1.2.1 インターネットインフォメーションサービス(IIS)を設定する」
DHCP サーバの設定をする	DPM サーバをインストールする	このマニュアルの「1.2.2 DHCP サーバの設定をする」
JRE をインストールする	DPM サーバまたはイメージビルダ (リモートコンソール) をインストールするマシンに、サポート対象の JRE がインストールされていない場合	このマニュアルの「1.2.3 JRE をインストールする」
.NET Framework 4.6.2 をインストールする	DPM サーバをインストールするマシンが Windows Server 2012/Windows Server 2016 であり、.NET Framework 4.6.2 がインストールされていない場合	このマニュアルの「1.2.4 Windows Server 2012/Windows Server 2016 に .NET Framework 4.6.2 をインストールする」
マルチキャストプロトコルルーティングの設定をする	以下の場合 <ul style="list-style-type: none"> マルチキャストプロトコルを使用する場合 かつ、 <ul style="list-style-type: none"> ルータを越えた複数のサブネットの管理対象マシンを DPM で管理し、ルーティングを行う場合 (※1) 	ルータ/ネットワークスイッチによりルーティングを行う場合の設定については、各製品のマニュアルを参照してください。
DHCP リレーエージェントの設定をする	以下の場合 <ul style="list-style-type: none"> 管理サーバと管理対象マシンが別のネットワークセグメントの場合 	ルータ/ネットワークスイッチによりルーティングを行う場合の設定については、各製品のマニュアルを参照してください。

※1

HW 機器 (ルータ/スイッチ) によりルーティングを行う場合の設定については、各機器のマニュアルを参照してください。

1.2.1 インターネットインフォメーションサービス(IIS)を設定する

DPM サーバをインストールするマシンには、事前に IIS のインストールと設定の確認をしてください。

1 インストールを始める前に

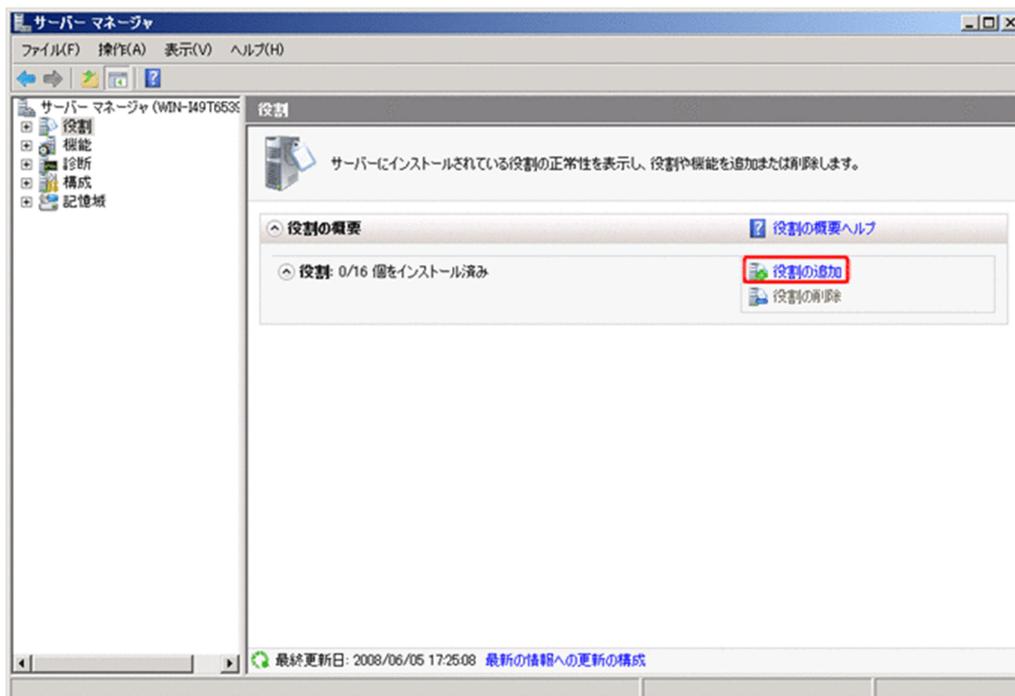
以下では、IIS のインストール手順を説明します。

(1) IIS7.5 (Windows Server 2008 R2) の場合

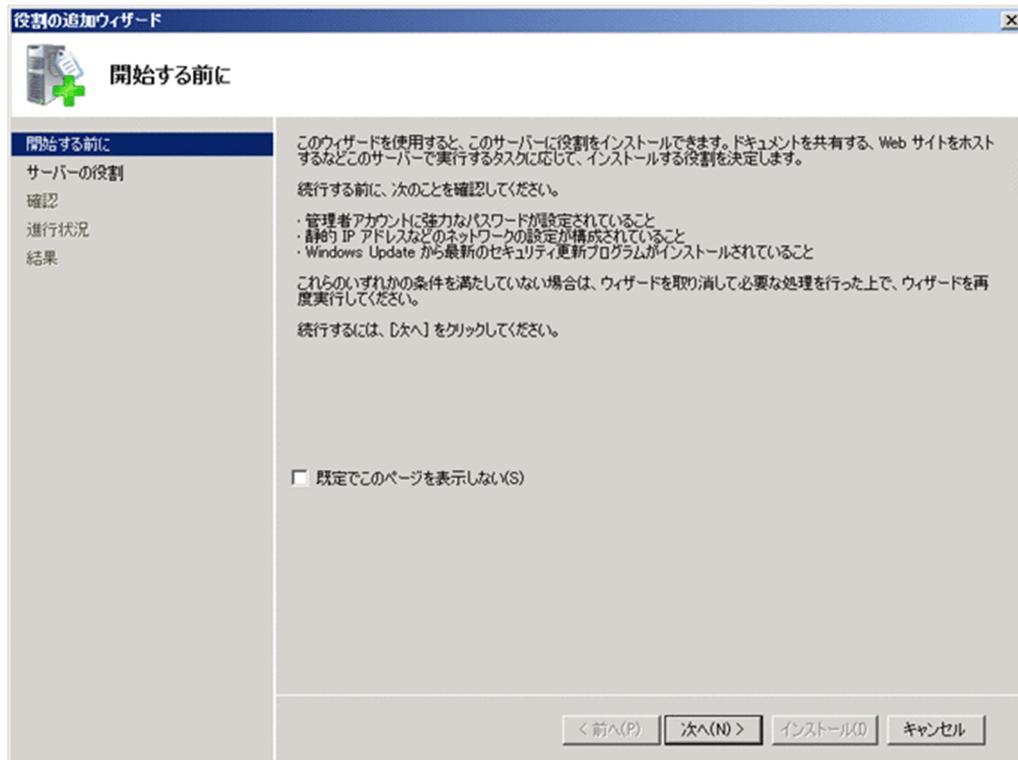
すでに「Web サーバー (IIS)」がインストールされている場合は、OS の「サーバー マネージャ」から、「Web サーバー (IIS)」の「役割サービスの選択」画面で、「静的なコンテンツ」、「ASP.NET」、「IIS 管理コンソール」、および「IIS 6 メタベース互換」がインストール済みとなっていることを確認してください。一つでもインストールされていない場合は、インストールされていないコンポーネントをインストールしてください。

< IIS7.5 のインストール手順 >

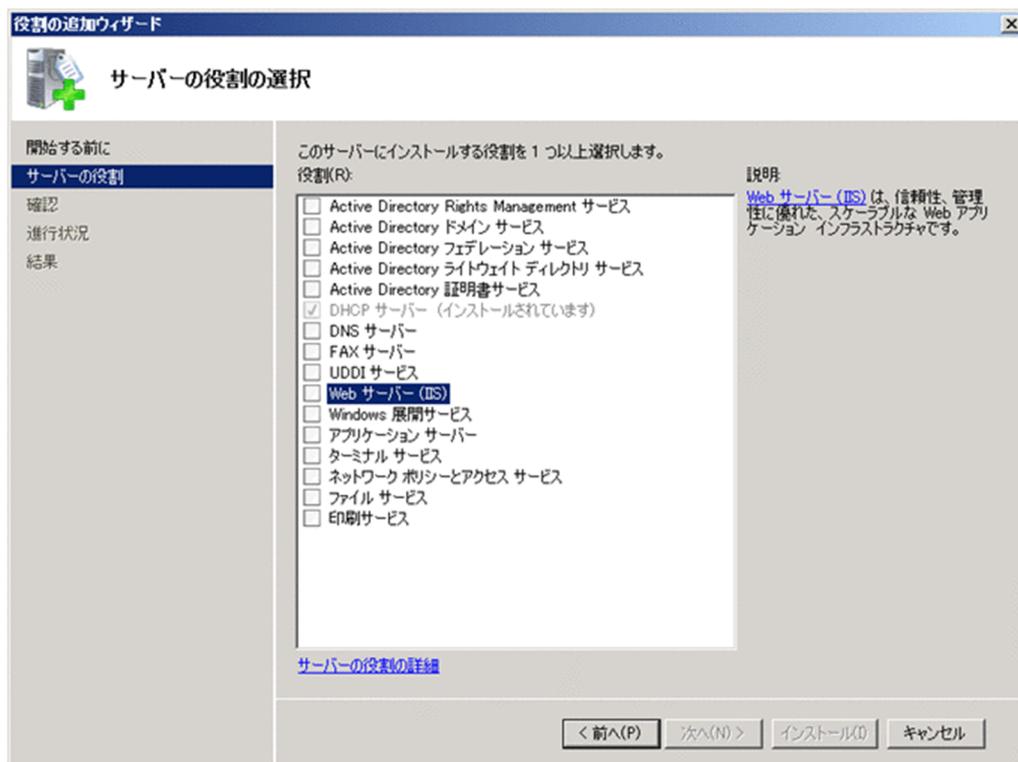
1. 「スタート」メニューから「管理ツール」→「サーバー マネージャ」を選択します。
2. 「サーバー マネージャ」画面が表示されますので、画面左側で「役割」を選択して、画面右側の「役割の追加」をクリックします。



3. 「役割の追加ウィザード」が表示されますので、「次へ」ボタンをクリックします。

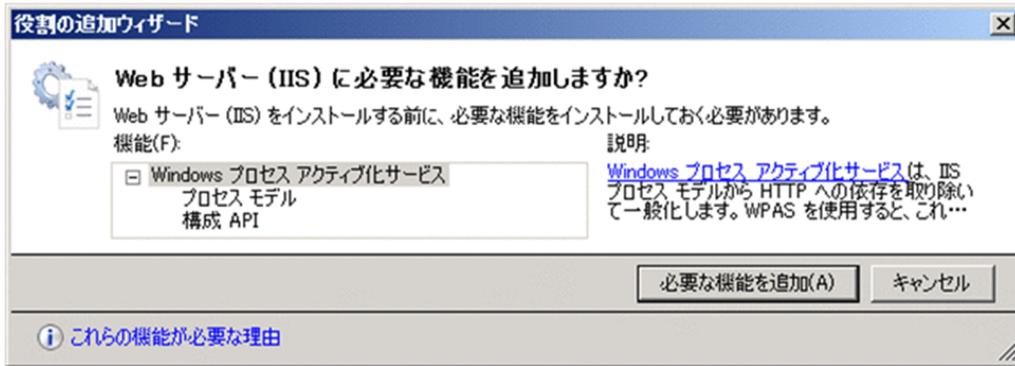


4. 「サーバーの役割の選択」画面で、「Web サーバ(IIS)」を選択してください。



5. 以下の画面が表示されますので、「次へ」ボタンをクリックします。

1 インストールを始める前に



注：

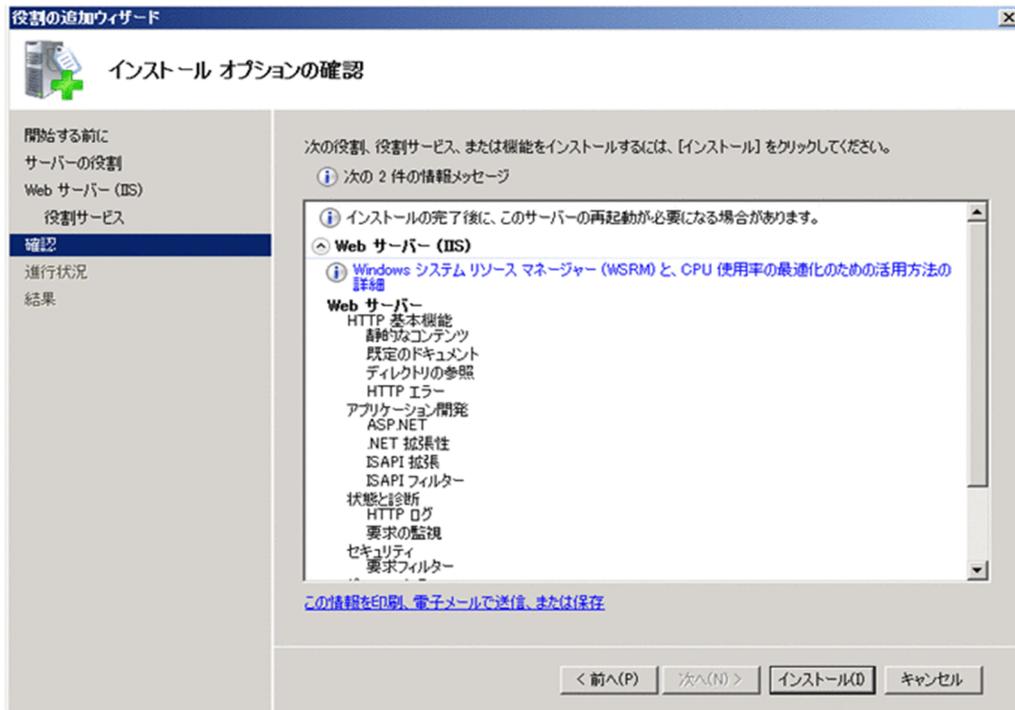
「Windows プロセス アクティブ化サービス」の機能がすでにインストール済みの環境では、本画面は表示しませんので、手順 6.へ進んでください。

6.「役割サービスの選択」で、「静的なコンテンツ」、「ASP.NET」、「IIS 管理コンソール」、「IIS6 メタベース互換」にチェックを入れ、「次へ」ボタンをクリックします。

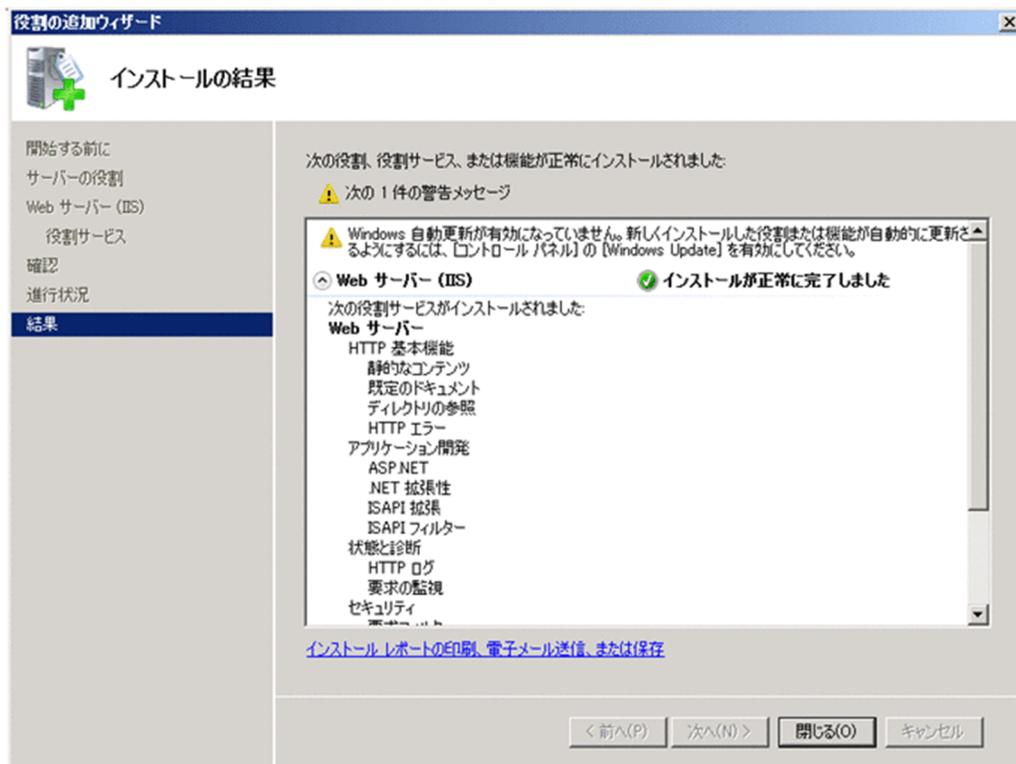
注：

- ・これらを選択する上で必要となる役割サービスや機能が不足している場合は、追加を確認するダイアログが表示されますので、追加するようにしてください。
- ・そのほかのデフォルトで選択されている役割サービスのチェックは外さないでください。

7.「インストール オプションの確認」画面で、「インストール」ボタンをクリックします。



8.「インストールの結果」画面でインストール内容を確認して、「閉じる」ボタンをクリックします。



以上で、IIS7.5 のインストールは完了です。

(2) IIS 8.0 (Windows Server 2012) /IIS 8.5 (Windows Server 2012 R2) /IIS 10.0 (Windows Server 2016) の場合

Windows Server 2016 の場合は、「ASP.NET 4.5」を「ASP.NET 4.6」に読み替えてください。

すでに「Web サーバー (IIS)」がインストールされている場合は、OS の「サーバ マネージャ」から、「管理」メニューの「役割と機能の追加」をクリックし、「サーバーの役割の選択」画面で、「Web サーバー (IIS)(インストール済み)」配下の「静的なコンテンツ」、「ASP.NET 4.5」、「IIS 管理コンソール」、および「IIS 6 メタベース互換」がインストール済みとなっていることを確認してください。

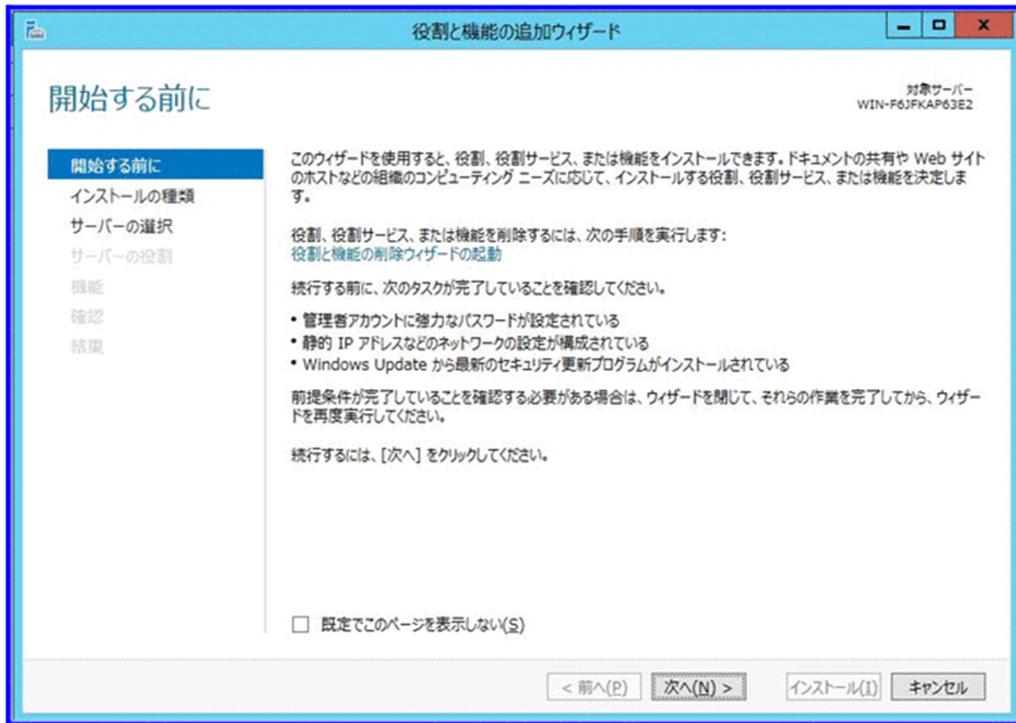
< IIS 8.0/IIS 8.5/IIS 10.0 のインストール手順 >

1. Windows デスクトップで、Windows タスクバーの「サーバ マネージャ」をクリックします。
2. 「サーバ マネージャー」画面が表示されますので、「管理」メニュー→「役割と機能の追加」をクリックします。

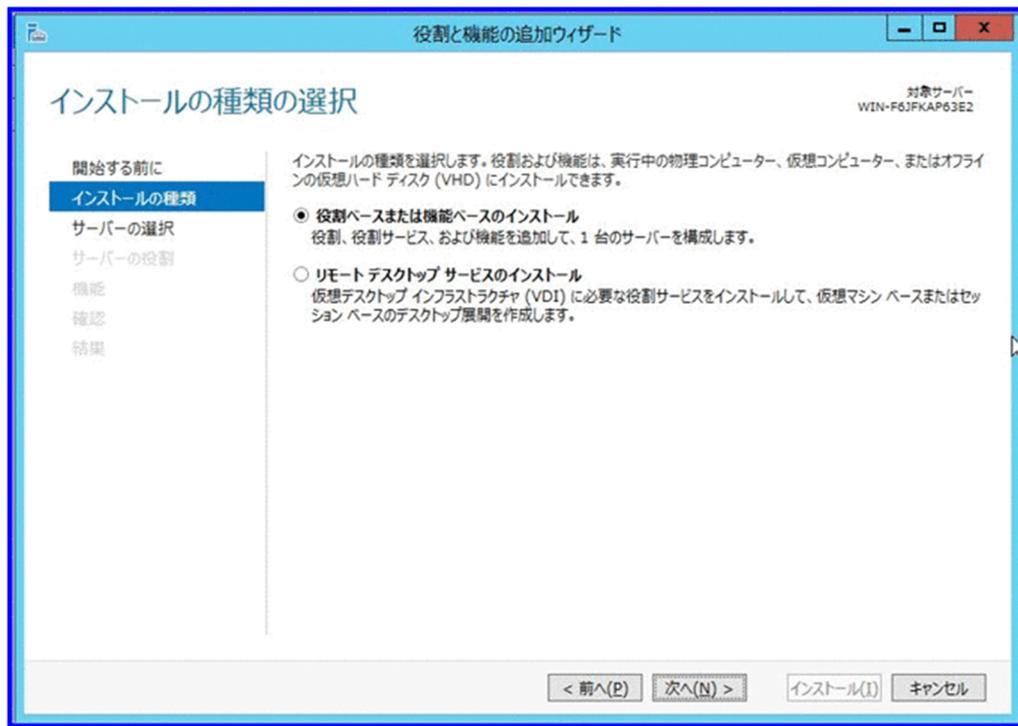
1 インストールを始める前に



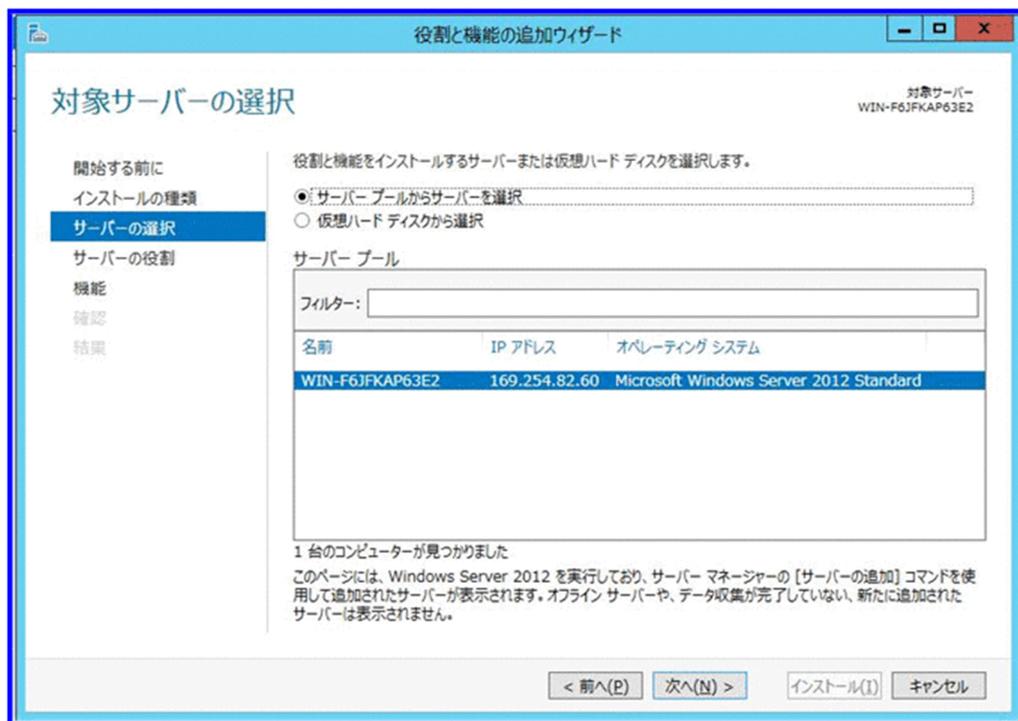
3.以下の画面が表示されますので、「次へ」ボタンをクリックします。



4.「インストールの種類の選択」画面が表示されますので、「役割ベースまたは機能ベースのインストール」を選択し、「次へ」ボタンをクリックします。

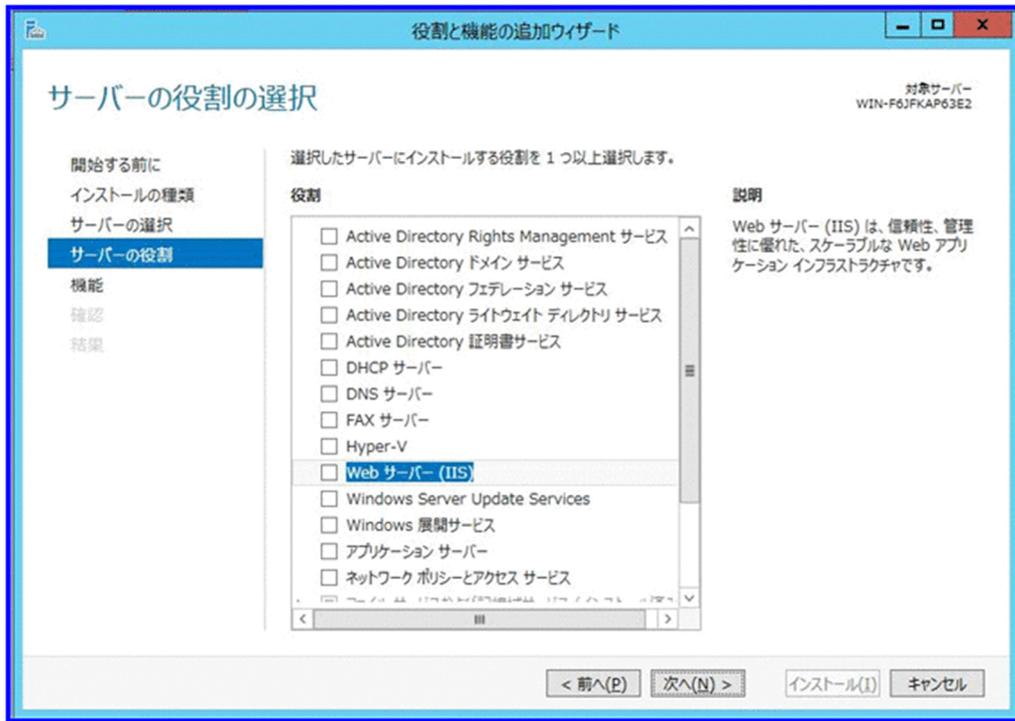


5. 「対象サーバーの選択」画面が表示されますので、該当マシンを選択し、「次へ」ボタンをクリックします。

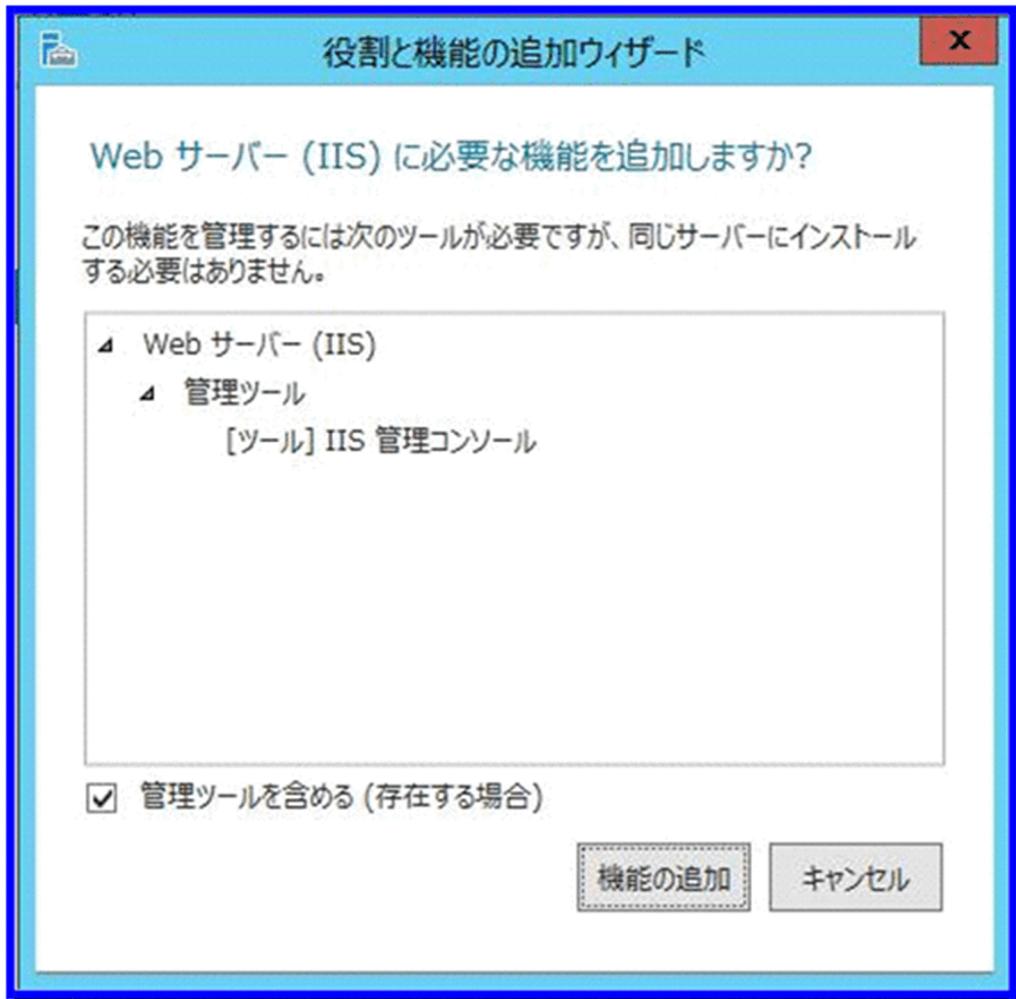


6. 「サーバーの役割の選択」画面が表示されますので、「Web サーバー (IIS)」にチェックを入れます。

1 インストールを始める前に

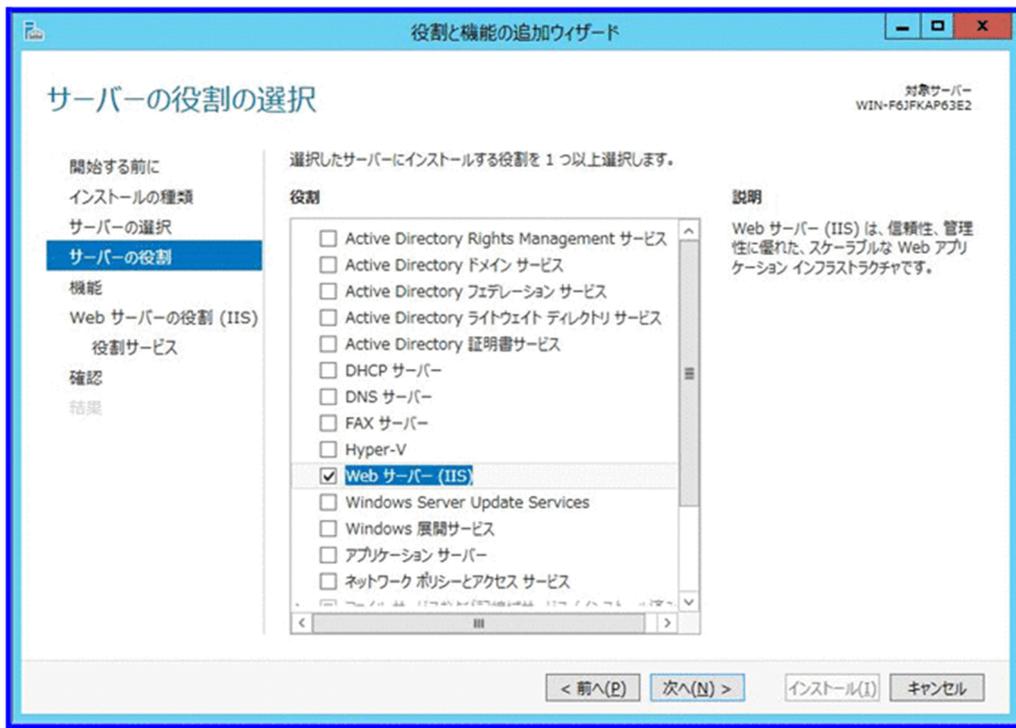


7. 以下の画面が表示されますので、「機能の追加」ボタンをクリックします。

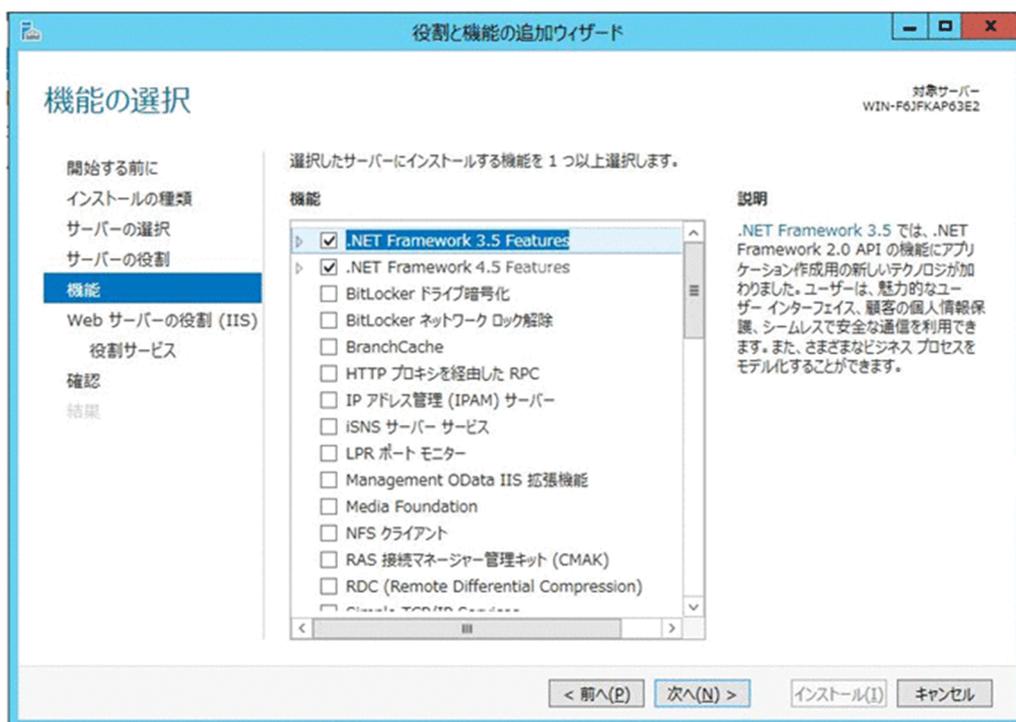


8.「サーバーの役割の選択」画面に戻りますので、「次へ」ボタンをクリックします。

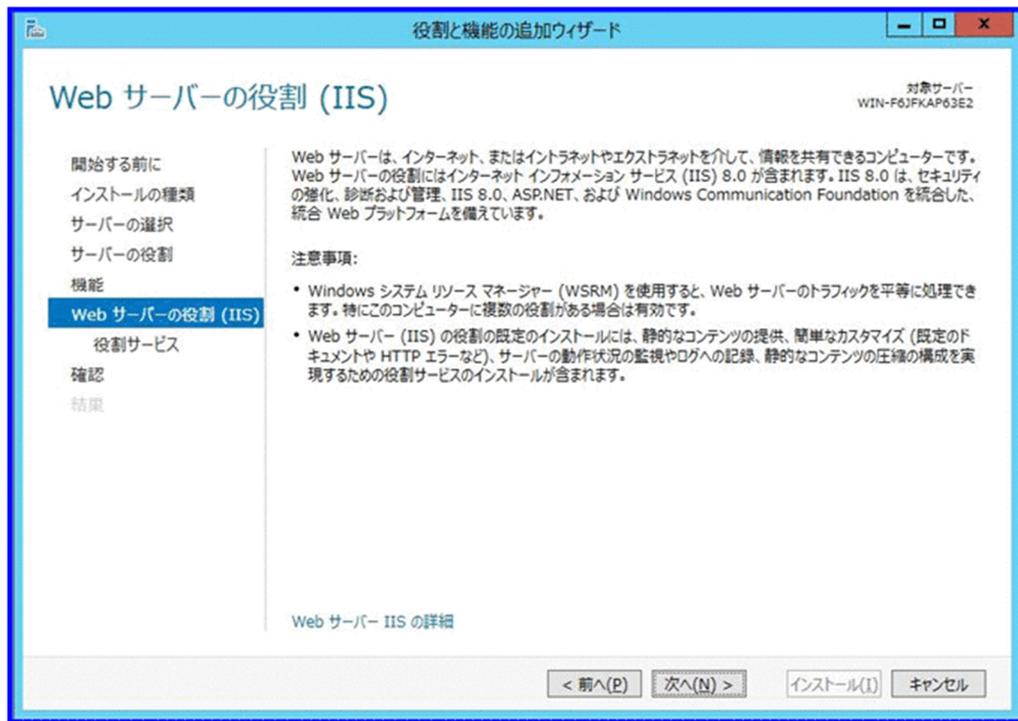
1 インストールを始める前に



9.「機能の選択」画面が表示されますので、「.NET Framework 3.5 Features」と「.NET Framework 4.5 Features」にチェックを入れて、「次へ」ボタンをクリックします。



10.「Web サーバーの役割 (IIS)」画面が表示されますので、「次へ」ボタンをクリックします。



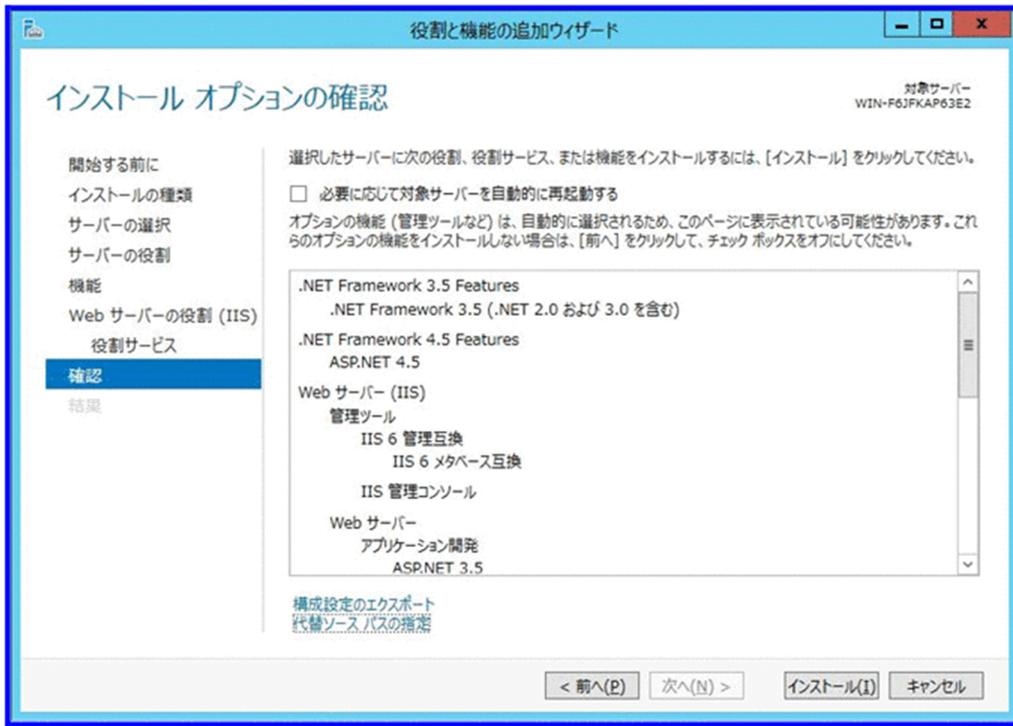
11. 「役割サービスの選択」画面で、以下のチェックボックスにチェックを入れ、「次へ」ボタンをクリックします。

- 「Web サーバー」 - 「HTTP 共通機能」 - 「静的なコンテンツ」
- 「Web サーバー」 - 「アプリケーション開発」 - 「ASP.NET 4.5」
- 「管理ツール」 - 「IIS6 管理互換」 - 「IIS 6 メタベース互換」

注：

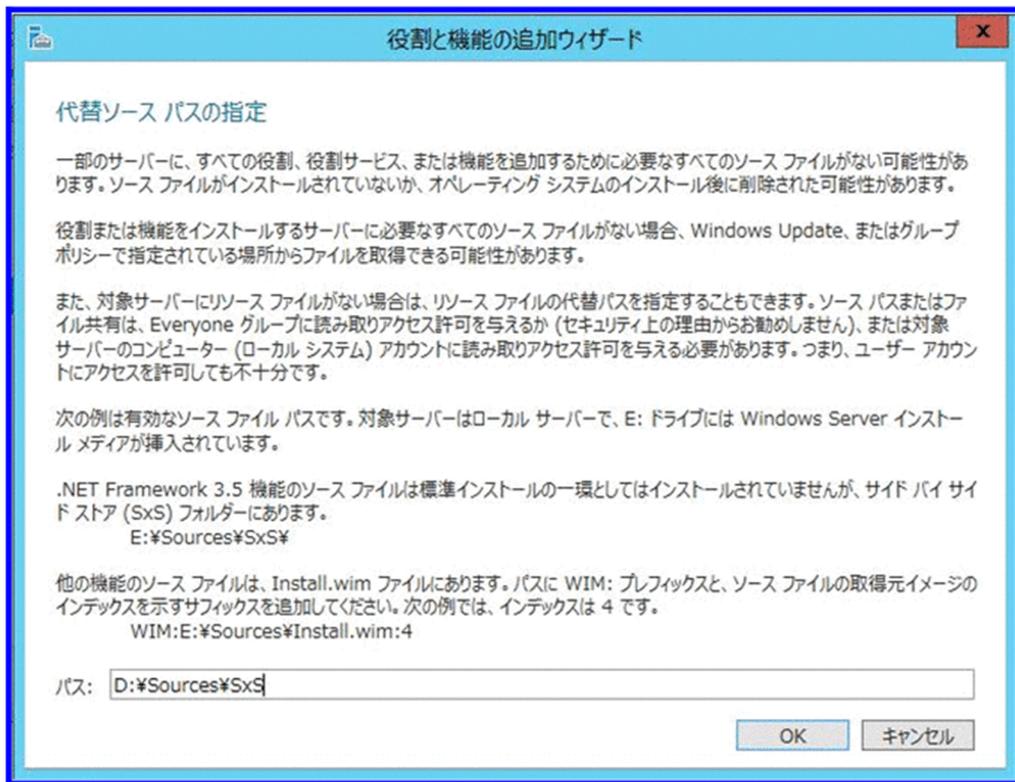
- これらを選択する上で必要となる役割サービスや機能が不足している場合は、追加を確認するダイアログが表示されますので、追加するようにしてください。
- そのほかのデフォルトで選択されている役割サービスのチェックは外さないでください。

1 インストールを始める前に

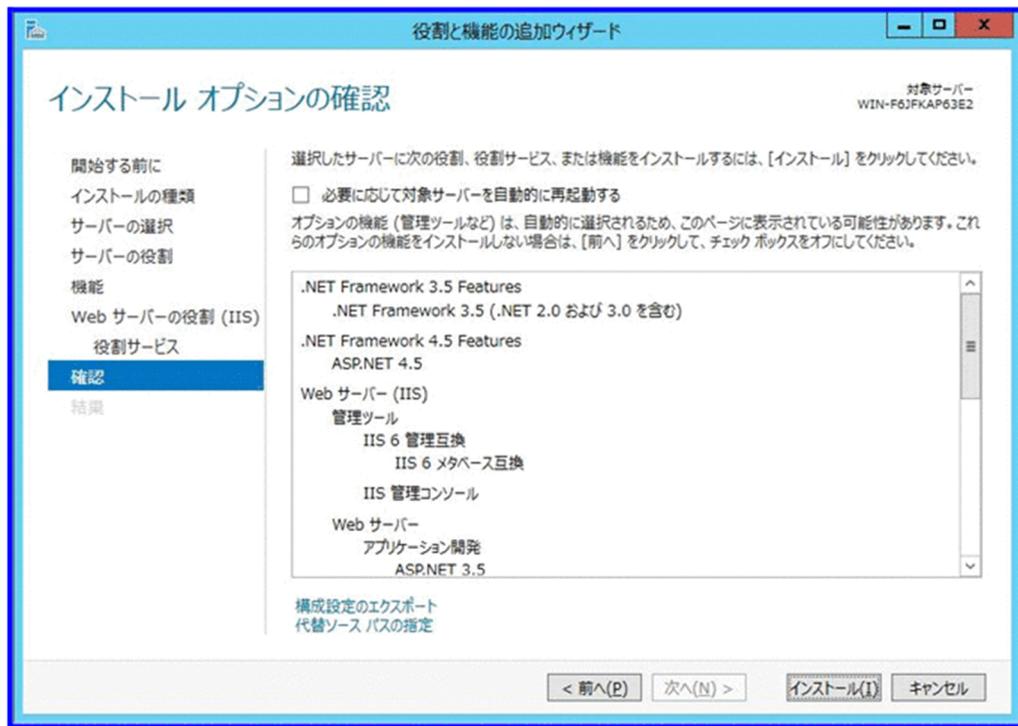


12.「代替ソース パスの指定」画面が表示されますので、「パス」に Windows Server 2012/Windows Server 2016 インストール メディアの「サイド バイ サイド ストア (SxS) フォルダー」を指定して、「OK」ボタンをクリックします。

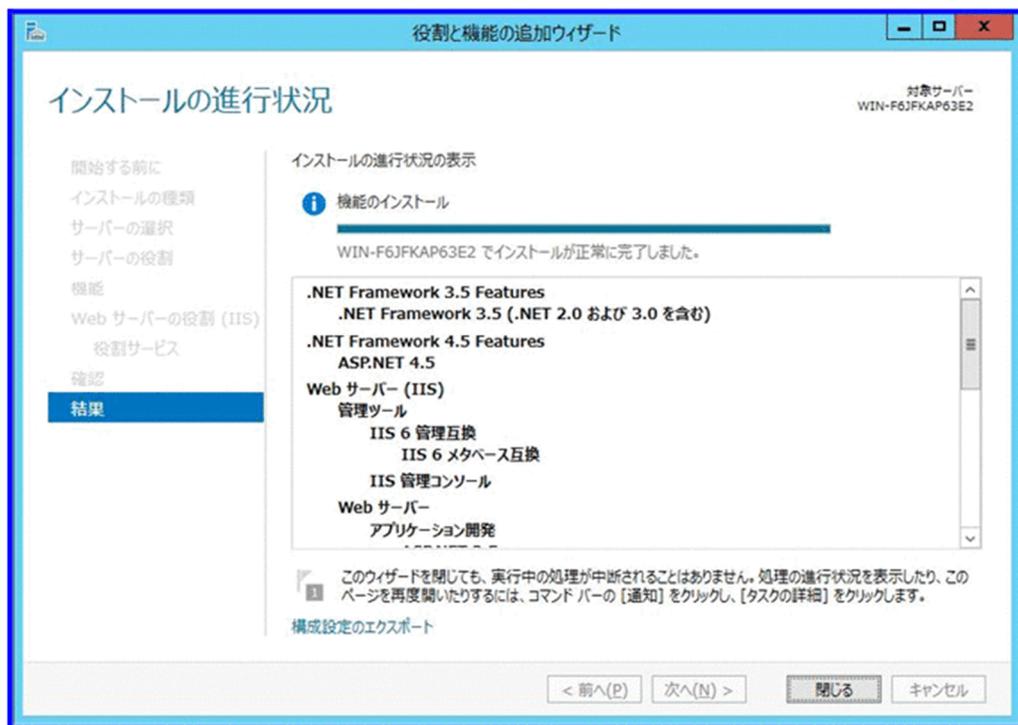
(例) <DVDドライブ>:%Sources%SxS



13.「インストール オプションの確認」画面に戻りますので、「インストール」ボタンをクリックします。



14. 「インストールの進行状況」画面が表示されますので、インストールが完了したことを確認して、「閉じる」ボタンをクリックします。



以上で、IIS 8.0/IIS 8.5/IIS 10.0 のインストールは完了です。

1.2.2 DHCP サーバの設定をする

DHCP サーバを使用した運用を行う場合の DHCP サーバのインストールと設定の手順について説明します。

DHCP サーバのインストールは DPM サーバをインストールする前に行うことを推奨します。DPM サーバを先にインストールした場合は、DHCP サーバをインストールした後に、DPM サーバの設定を変更する必要があります。

DHCP サーバの設定は、DPM サーバのインストール後でも構いません。

(1) Windows Server 2008 R2 の場合

< DHCP サーバのインストール手順 >

DHCP サーバがインストールされていない場合は、以下の手順で、DHCP サービスをインストールしてください。

1. 「スタート」メニュー → 「管理ツール」 → 「サーバマネージャ」を選択します。
2. 画面左側の「役割」をクリックし、画面右側で「役割の追加」をクリックします。
3. 「役割の追加ウィザード」が表示します。「開始する前に」の画面では「次へ」ボタンをクリックします。
4. 「サーバの役割の選択」画面では「DHCP サーバー」にチェックを入れ、「次へ」ボタンをクリックします。

注：

「DHCP サーバー」にチェックが入っている場合は、DHCP サーバをインストール済みです。「キャンセル」ボタンをクリックして、インストールを終了してください。

5. 「DHCP サーバー」の画面では、「次へ」ボタンをクリックします。
6. 「ネットワーク接続バインディングの選択」画面では、DHCP サーバを提供するネットワークアダプタにチェックを入れます。
7. 「IPv4 DNS サーバー設定の指定」の画面では、必要に応じて各項目を設定し、「次へ」ボタンをクリックします。
8. 「IPv4 WINS サーバー設定の指定」の画面では、必要に応じて各項目を設定し、「次へ」ボタンをクリックします。
9. 「DHCP スコープの追加または編集」の画面では、「追加」ボタンをクリックし、「スコープの追加」画面を表示します。
10. 「スコープの追加」画面では、各項目を設定し、「OK」ボタンをクリックします。

注：

・ IP アドレスは DPM で管理するマシンの台数分用意してください。DPM で管理するマシン以外にも DHCP から IP を取得する場合は、IP アドレスのリース数は十分に確保してください。IP アドレスが不足すると、正常にシナリオを実行できない場合があります。

・ リース期間がシナリオ実行時間より短く設定されている場合は、シナリオ実行に失敗する可能性があります。「サブネットの種類」は、「ワイヤード（有線ーリース期間は 6 日）」または「ワイヤード（有線ーリース期間は 8 日）」を選択することを推奨します。

DHCP サーバインストール後にリース期間を変更することは可能です。

・ 「このスコープをアクティブ化する」にチェックを入れた場合、DHCP サーバインストール完了後に設定したスコープが有効になります。

「このスコープをアクティブ化する」のチェックを外した場合、DHCP サーバインストール後にスコープを有効にしてください。

11. 「DHCP スコープの追加または編集」の画面に戻りますので、「次へ」ボタンをクリックします。
12. 「DHCPv6 ステートレスモードの構成」の画面では、環境に応じて項目を設定し、「次へ」ボタンをクリックします。
「このサーバーに対する DHCPv6 ステートレスモードを無効にする」を選択した場合は、手順 13 へ進みます。
「このサーバーに対する DHCPv6 ステートレスモードを有効にする」を選択した場合は、「IPv6 DNS サーバー設定の指定」画面が表示されます。必要に応じて各項目を設定して「次へ」ボタンをクリックし、手順 13 へ進みます。

注：

- ・ネットワーク内のルータが DHCPv6 をサポートするように構成されていない場合は、「このサーバーに対する DHCPv6 ステートレスモードを無効にする」を選択してください。
- ・ネットワーク内のルータが DHCPv6 をサポートするように構成されている場合は、ルータの構成に合った選択をしてください。

13. 「インストール オプションの確認」の画面で、「インストール」ボタンをクリックします。
14. 「インストールの進行状況」の画面が表示され、インストールが開始されます。インストールが完了すると「インストールの結果」の画面が表示するので、内容を確認して「閉じる」ボタンをクリックします。

注：

- ・インストール完了後にスコープの設定を変更する場合は、「サーバ マネージャー」の左側画面で「役割」→「DHCP サーバー」以下で追加したスコープを右クリックし、「プロパティ」を選択してください。
- ・インストール完了後にスコープを有効にする場合は、「サーバ マネージャー」の左側画面で「役割」→「DHCP サーバー」以下で追加したスコープを右クリックし、「アクティブ化」を選択してください。

以上で、Windows Server 2008/Windows Server 2008 R2 上での DHCP のインストールおよび設定は完了です。

設定後に DHCP サーバから実際に IP アドレスがリースされることを確認してください。

(2) Windows Server 2012/Windows Server 2012 R2/Windows Server 2016 の場合

1. Windows デスクトップで、Windows タスクバーの「サーバー マネージャ」をクリックします。
2. 「サーバー マネージャ」画面が表示されますので、「管理」メニュー→「役割と機能の追加」をクリックします。
3. 「開始する前に」画面が表示されますので、「次へ」ボタンをクリックします。
4. 「インストールの種類の選択」画面が表示されますので、「役割ベースまたは機能ベースのインストール」を選択し、「次へ」ボタンをクリックします。
5. 「対象サーバーの選択」画面が表示されますので、該当マシンを選択し、「次へ」ボタンをクリックします。
6. 「サーバーの役割の選択」画面が表示されますので、「DHCP サーバー」にチェックを入れます。
7. 「DHCP サーバーに必要な機能を追加しますか?」画面が表示されますので、「機能の追加」ボタンをクリックします。

1 インストールを始める前に

- 8.「サーバーの役割の選択」画面に戻りますので、「次へ」ボタンをクリックします。
 - 9.「機能の選択」画面が表示されますので、「次へ」ボタンをクリックします。
 - 10.「DHCP サーバー」画面が表示されますので、「次へ」ボタンをクリックします。
 - 11.「インストール オプションの確認」画面が表示されますので、「インストール」ボタンをクリックします。
 - 12.「インストールの進行状況」画面が表示されますので、インストールが完了したことを確認して、「閉じる」ボタンをクリックします。
 - 13.「サーバー マネージャ」画面に戻りますので、「ツール」メニュー→「DHCP」を選択します。
 - 14.「DHCP」画面が表示されますので、画面左側のツリーから該当マシン配下の「IPv4」を右クリックし、メニューバーにて「操作」→「プロパティ」を選択します。
 - 15.「IPv4 のプロパティ」画面が表示されますので、「詳細設定」タブを選択し、「結合」ボタンをクリックします。
 - 16.「結合」画面が表示されますので、「接続とサーバーの結合」で DPM で使用する NIC に設定されている IP アドレスのチェックボックスにのみチェックが設定されていることを確認してください。
DPM で使用しない IP アドレスのチェックボックスにチェックが設定されている場合は、チェックを解除してください。
 - 17.設定が完了したら、「OK」ボタンをクリックしてください。
 - 18.「IPv4 のプロパティ」画面に戻るので、「OK」ボタンをクリックしてください。
 - 19.「DHCP」画面が表示されますので、画面左側のツリーから該当マシン配下の「IPv4」を右クリックして、「新しいスコープ」を選択します。
 - 20.「新しいスコープ ウィザードの開始」画面が表示されますので、使用している環境に合わせて設定してください。
- 注：
- IP アドレスは DPM で管理するマシンの台数分用意してください。DPM で管理するマシン以外にも DHCP から IP を取得する場合、IP アドレスのリース数は十分に確保してください。IP アドレスが不足すると、正常にシナリオを実行できない場合があります。- 21.「新しいスコープ ウィザードの完了」画面が表示されたら、「完了」ボタンをクリックします。

以上で、Windows Server 2012/Windows Server 2012 R2/Windows Server 2016 上での DHCP サーバのインストールは完了です。

(3) DHCP サーバ構築時の注意

- 1.管理サーバ上に構築した DHCP サービスを使用する場合は、同一ネットワークにほかの DHCP サーバを設置しないでください。管理サーバと別のマシン上に構築した DHCP サーバを使用する場合は、同一ネットワーク内に DHCP サーバが何台存在していても問題ありません。
- 2.Windows OS に標準添付の DHCP サーバ以外を使用する場合は、次の点に注意してください。

固定アドレスの使用

例えば、Linux を使って DHCP サーバを構築する場合は、`/etc/dhcpd.conf` に固定アドレスの指定が必要になる場合があります。

固定アドレスとは、管理対象マシンの MAC アドレスと、リース予定の IP アドレスの組をあらかじめ DHCP サーバに登録しておくことにより、管理対象マシンからのアドレス要求に対して DHCP サーバが固定の IP アドレスをリースする仕組みのことです。

固定アドレスの記述がない場合は、DHCP サーバからの応答遅延が発生する場合があります。その場合、PXE ブート（ネットワークブート）が失敗し、その影響で DPM が正常に動作できません。Linux 以外の UNIX 系 OS についても、同様に固定アドレスが必要になる場合があります。

以下は、MAC アドレス (12:34:56:78:9A:BC) のホストに固定アドレス (192.168.0.32) を指定した場合の /etc/dhcpd.conf の例です。

```
subnet 192.168.0.0 netmask 255.255.255.0 {
    ...
    ...
    host computer-name {
        hardware ethernet 12:34:56:78:9A:BC;
        fixed-address 192.168.0.32;
    }
}
```

3. DHCP サーバに NIC が 2 個以上搭載されている場合、DPM で使用するネットワークに接続されている NIC だけを DHCP サーバにバインドするようにしてください。異なるネットワークに接続されている複数の NIC を DHCP サーバにバインドすると、DPM のシナリオ実行が正常に動作しない場合があります。
4. サードパーティ製 DHCP サーバソフトを管理サーバと同じ装置にインストールして使用できません。別々の装置で使用する場合は、お使いになる DHCP サーバソフトがネットワークブート (PXE ブート) に対して IP アドレスを正しくリースすることが可能か事前に十分な確認を行ってください。
5. DPM は IPv6 を未サポートですので、DPM 以外で使用しないのであれば、DHCPv6 の設定は不要です。
6. DHCP サーバに NIC が 2 個以上搭載されている場合、DPM で使用するネットワークに接続されている NIC だけを DHCP サーバにバインドするようにしてください。異なるネットワークに接続されている複数の NIC を DHCP サーバにバインドすると、DPM のシナリオ実行が正常に動作しない場合があります。
DHCP サーバがドメインに参加している場合は、DHCP サーバを Active Directory で承認し、IP アドレスをリース可能な状態にしてください。

1.2.3 JRE をインストールする

DPM サーバおよびイメージビルダ (リモートコンソール) をインストールするマシンには、事前にサポート対象の JRE をインストールしてください。サポート対象の JRE はマニュアル「導入・設計ガイド 3.3.1 システム要件」またはマニュアル「導入・設計ガイド 3.5.1 システム要件」を参照してください。

以下では、JRE のインストール手順を説明します。

1. Oracle 社の Java の Web サイトからサポート対象の JRE のインストーラを入手します。

注：

- ・ 32bit の JRE をインストール入手してください。
64bit OS に DPM サーバやイメージビルダ (リモートコンソール) をインストールする場合も 32bit の JRE が必要となります。
- ・ 32bit の JRE と 64bit の JRE を共にインストールした場合、以下に注意してください。
DPM サーバ/イメージビルダ (リモートコンソール) をインストール前の場合：
64bit JRE が不要であれば、32bit と 64bit の JRE を両方アンインストールし、32bit JRE だけ再インストールしてください。
DPM サーバ/イメージビルダ (リモートコンソール) をインストール済みの場合：
32bit の JRE だけではなく、64bit の JRE もアンインストールしないでください。

1 インストールを始める前に

なお、32bit の JRE と 64bit の JRE は、Update 番号を一致させる必要はありません。

2. JRE をインストールするマシンに管理者権限のあるユーザでログインします。

注：

- ・DPM サーバ (DPM09-10 より前は管理サーバ for DPM) がインストール済みの環境で、JRE を上書きインストールする場合は、DPM に関する処理を終了してください。
- ・次のマシン上で JRE を上書きインストールする場合、Apache Tomcat サービスを停止してください。サービスを停止しない場合、JRE インストール完了時にマシンの再起動を要求される場合があります。
- ・DPM09-10 より前の Web サーバ for DPM インストールマシン

3. 入手した JRE のインストーラを実行して、JRE をインストールします。

以上で、JRE のインストールは完了です。

1.2.4 Windows Server 2012/Windows Server 2016 に .NET Framework 4.6.2 をインストールする

DPM サーバをインストールするマシンが Windows Server 2012/Windows Server 2016 の場合は、事前に .NET Framework 4.6.2 がインストールされている必要があります。

注：

- ・Windows Server 2012/Windows Server 2012 R2/Windows Server 2016 以外の OS では、本手順は不要です。
- ・このマニュアルの「1.2.1(3) IIS 8.0 (Windows Server 2012) /IIS 8.5 (Windows Server 2012 R2) /IIS 10.0 (Windows Server 2016) の場合」の手順にて IIS をインストールした場合は、IIS と同時に .NET Framework 3.5 SP1 と .NET Framework 4.5/.NET Framework 4.6 がインストールされていますので、本手順は不要です。

以下では、Windows Server 2012 /Windows Server 2016 での .NET Framework 3.5 SP1 と .NET Framework 4.5/4.6 のインストール手順を説明します。

1. Windows デスクトップで、Windows タスクバーの「サーバー マネージャ」をクリックします。
2. 「サーバー マネージャ」画面が表示されますので、「管理」メニュー→「役割と機能の追加」をクリックします。
3. 「開始する前に」画面が表示されますので、「次へ」ボタンをクリックします。
4. 「インストールの種類の選択」画面が表示されますので、「役割ベースまたは機能ベースのインストール」を選択し、「次へ」ボタンをクリックします。
5. 「対象サーバーの選択」画面が表示されますので、該当マシンを選択し、「次へ」ボタンをクリックします。
6. 「サーバーの役割の選択」画面が表示されますので、「次へ」ボタンをクリックします。
7. 「機能の選択」画面が表示されますので、「.NET Framework 3.5 (.NET 2.0 および 3.0 を含む)」と「.NET Framework 4.5」または「.NET Framework 4.6」を選択し、「次へ」ボタンをクリックします。

注：

- ・これらを選択する上で必要となる役割サービスや機能が不足している場合は、追加を確認するダイアログが表示されますので、追加するようにしてください。

8. 「インストール オプションの確認」の画面では、Windows Server 2012/Windows Server 2016 のインストールメディアを DVD ドライブに挿入し、「代替ソースパスの指定」をクリックします。
9. 「代替ソースパスの指定」画面が表示されますので、「パス」に Windows Server 2012/Windows Server 2016 インストールメディアの「サイド パイ サイド ストア (SxS) フォルダー」を指定して、「OK」ボタンをクリックします。
(例) <DVDドライブ>:%Sources%SxS
10. 「インストール オプションの確認」画面に戻りますので、「インストール」ボタンをクリックします。
11. 「インストールの進行状況」の画面が表示され、インストールが開始されます。インストールが完了すると「インストールの結果」の画面が表示するので、内容を確認して「閉じる」ボタンをクリックします。

以上で、Windows Server 2012/Windows Server 2016 での.NET Framework 3.5 SP1 と.NET Framework 4.5/4.6 のインストールは完了です。

1.3 DPM コンポーネント共通の注意事項

- インストールする環境に「ターミナルサービス」(アプリケーションサーバーモードだけ) (または「ターミナルサーバー」「リモートデスクトップサービス」) がインストールされている場合は、インストール媒体を挿入する前に「コマンドプロンプト」を開き、次のコマンドを入力してください。

`CHANGE USER /INSTALL`

また、すべてのインストール完了後、再度「コマンドプロンプト」を開き、次のコマンドを入力してください。

`CHANGE USER /EXECUTE`

- Web コンソールを除き、インストールや運用時での操作は、必ずローカルのビルトイン Administrator アカウントで行ってください。ビルトイン Administrator アカウントが無効となっている場合は有効にする必要があります。

ただし、DPM クライアントは、インストール後にビルトイン Administrator アカウントを無効にしても影響はありません。

2

インストールを実行する

この章では、DPM のインストール手順について説明します。

なお、起動しているエクスプローラ、Web ブラウザ、そのほかアプリケーションなどがある場合は、すべて終了してください。

2.1 DPM サーバをインストールする

DPM サーバは管理サーバにインストールするコンポーネントです。DPM サーバをインストールすると、イメージビルダ/DPM コマンドラインも同時にインストールされます。

注：

「1.2 インストールを始める前に」を参照して、DPM サーバインストールの事前準備が完了していることを確認してください。

DPM サーバをインストールする際には、以下の点に注意してください。

- 「DPM サーバ」のインストールを行うために必要なディスク容量があることを確認してください。
- DPM で管理する予定のネットワーク内に、DPM サーバがインストールされているマシンが存在しないことを確認してください。バージョンが異なるものであっても同一ネットワーク内に存在していると誤動作の原因となります。また、異なるネットワークセグメント上のネットワークにある DPM サーバから管理されていないことを確認してください。

注：

DPM サーバのインストール前に、あらかじめ DHCP サーバの設定を行うことを推奨します。

- 新規インストールでは、「DPM サーバ」と同時に Microsoft SQL Server 2016 SP1 Express をインストールします。

注：

- ネットワークが接続されていることを確認して DPM サーバのインストールを行ってください。ネットワークが接続されていない状態でインストールを行った場合、初期設定に失敗し DPM サーバのインストールが失敗する可能性があります。

- DPM サーバをインストールするシステムには、「DPM」という名前の ODBC データソースが追加されます。DPM 以外のアプリケーションにより、すでに「DPM」という名前のデータソースが作成されているシステムには、DPM サーバをインストールしないでください。

- DPM サーバをインストールするマシンに、Microsoft SQL Server がインストールされている場合、次の手順でインストールしてください。

- (1) 「SQL Server Browser」サービスのスタートアップの種類が「無効」に設定されている場合は、「無効」以外に設定します。

- (2) 本項の手順を行い、DPM サーバをインストールします。

- (3) 「SQL Server Browser」サービスのスタートアップの種類を(1)の設定状態へ戻します。

- データベースコンポーネントをインストールした場合、「SQL Server インストールパス」として指定したフォルダに Microsoft SQL Server の「共有ツール」もインストールされます。ただし、すでに「共有ツール」が存在する環境にデータベースコンポーネントをインストールした場合、「共有ツール」のインストール先は変更されません。

- データベースのインストール時には以下のパラメータを固定で使います

インスタンス名：インストール時に指定した値（デフォルト：DPMDBI）

データベース名：DPM

管理者名：sa

データソース名：DPM

- System Manager - Basic Management Version 5.0 for ManageSite（以下、ManageSite）がインストールされているマシンに「DPM サーバ」をインストールする場合、もしくは ManageSite がインストールされているマシンと同一セグメントにあるマシンに「DPM サーバ」をインストールする場合

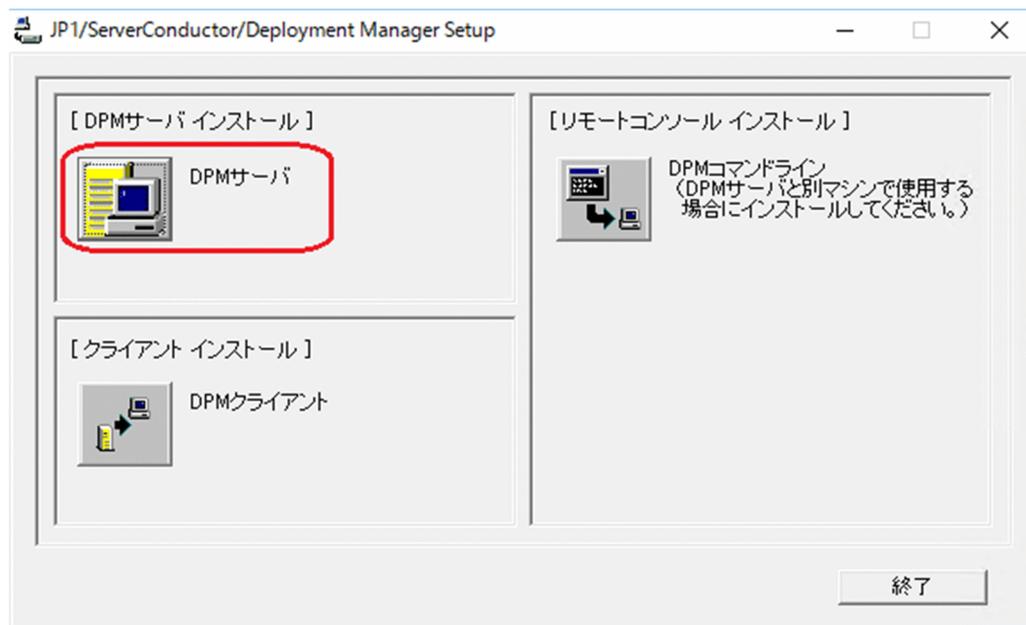
は、あらかじめ ManageSite がインストールされているマシン上で「Pxe MTFTP Service」、
「PxeServices」の二つのサービスを停止した後に「DPM サーバ」のインストールを行ってください。
なお、「DPM サーバ」がインストールされたマシンに ManageSite をインストールすることはできません。
一台のマシンに ManageSite と「DPM サーバ」をインストールする場合は、必ず ManageSite を
先にインストールしてから「DPM サーバ」をインストールしてください。

また、ManageSite 以外の PXE サーバがすでにインストールされているマシンには「DPM サーバ」は
インストールできません。

- インストール時の設定値の詳細については、マニュアル「リファレンスガイド 2.7 管理サーバの基本情報」を参照してください。
- Windows Update の適用により、システムの再起動が必要になった場合、SQL Server 2016 のインストールの前に、システムを再起動してください。再起動を行わないと SQL Server のインストールに失敗する場合があります。
- DPM09-54 でネットワークポートのデフォルトを変更しました。ネットワークポートの詳細は、「付録 B.1 ネットワークポートとプロトコル一覧」を参照してください。09-54 以降の DPM サーバを新規インストールした場合、変更後のネットワークポートを使用します（なお、アップグレードインストール時は、アップグレード前のネットワークポートを引継ぎます）。
- DPM サーバのインストールを行うと、VC2013 のランタイムがインストールされます。DPM サーバの OS が Windows Server 2008 R2 SP1 の場合、オフラインで VC2013 のランタイムのインストールに失敗する場合があります。
- DPM サーバの OS が Windows Server 2012 R2 の場合、同梱製品(.NET Framework 4.6.2)のインストールに失敗する場合があります。Microsoft 社の KB2919355 を参照してください。

DPM サーバのインストールについて説明します。

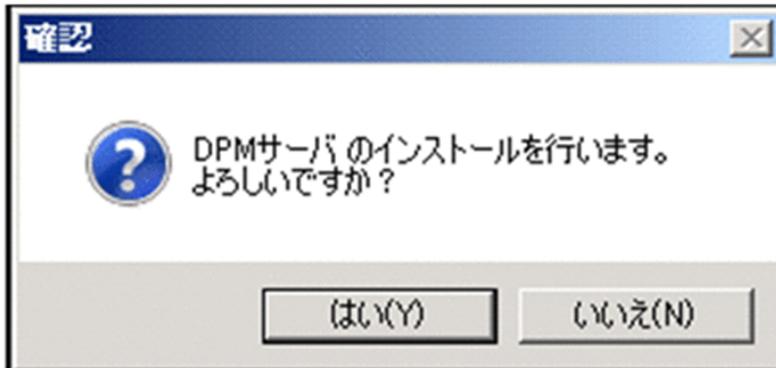
1. DPM サーバをインストールするマシンにローカルのビルトイン Administrator アカウントでログオンします。
2. インストール媒体を DVD ドライブにセットします。「JP1/ServerConductor/Deployment Manager Setup」画面が起動しますので、「DPM サーバ」を選択します。



3. 確認画面が表示されますので、「はい」ボタンをクリックします。

2 インストールを実行する

「いいえ」ボタンをクリックすると、「JP1/ServerConductor/Deployment Manager Setup」画面に戻ります。



4.「JP1/ServerConductor/Deployment Manager(DPM サーバ) セットアップ」ウィザードが開始されますので、「次へ」ボタンをクリックします。



5.「インストール先の選択」画面が表示されますので、インストール先のフォルダを指定して、「次へ」ボタンをクリックします。なお、インストール先のフォルダのパスは 150Byte 以内になしてください。



注：

インストール先のフォルダには、全角文字、「%」、「=」、「;」、「!」、「@」、「^」、「&」および Windows で使用が禁止されている文字を含むパスを指定しないでください。

6. 「セットアップタイプ」画面が表示されますので、お使いの環境に合わせチェック対象を変更し、「次へ」ボタンをクリックします。



- 「JP1/ServerConductor/Deployment Manager でパスを制御する」

管理対象マシンに日立ディスクアレイシステムを接続しており、バックアップ/リストア/ディスク構成チェック/ディスク複製 OS インストール時のパス制御を DPM で実施する場合は、こちらをチェックします。

DPM でパス制御を実施する場合は、ファイバチャネルボード BIOS の設定が必要です。設定方法については、マニュアル「運用ガイド 付録 B 管理対象マシンが日立ディスクアレイシステムおよび BR20/BR1200 の冗長化環境の運用」を参照してください。

2 インストールを実行する

- 「JP1/ServerConductor/Deployment Manager 以外でパスを制御する」

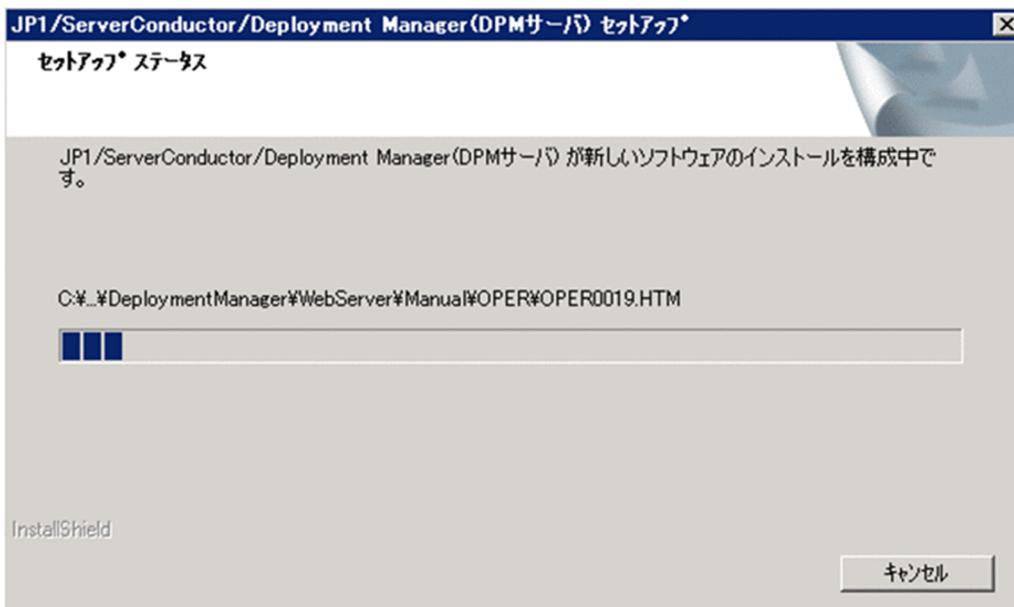
上記に該当しない場合、例えば、専用のソフトウェアでパスを制御する場合や、日立ディスクアレイシステムを使用していないためパスを制御する必要がない場合は、こちらをチェックします。

インストール後制御方法を変更する場合は、DPM サーバの上書きインストールを行ってください。上書きインストール時にも上記ダイアログが表示されますので、使用する制御方法を選択してください。

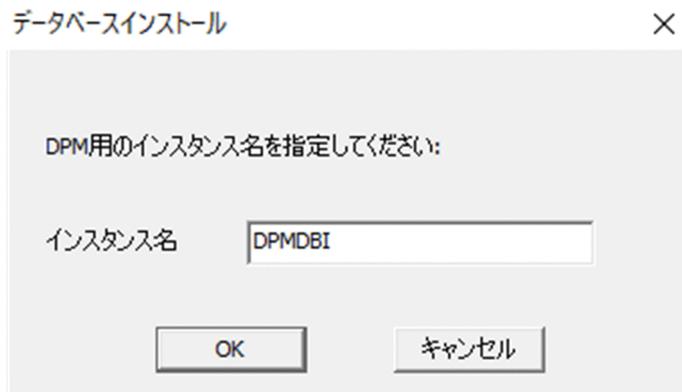
- 管理対象マシンについての注意事項が表示されますので、内容を確認し、「OK」ボタンをクリックしてください。



- 「セットアップステータス」画面が表示され、インストールが開始されます。



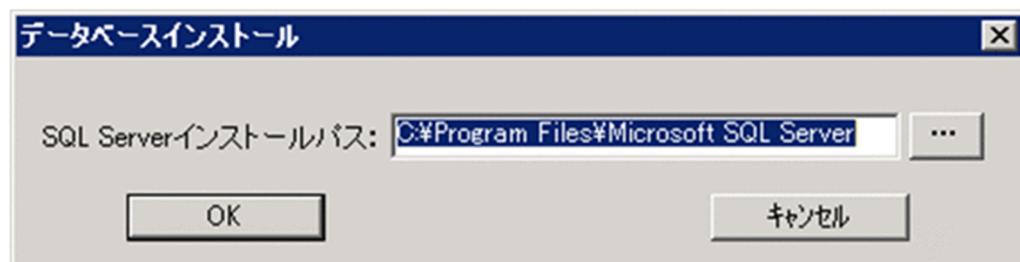
- インストールの途中で「データベースインストール」画面が表示されますので、インスタンス名を指定し、「OK」ボタンをクリックします。



注：

- ・既存のインスタンス名を指定した場合は、そのインスタンスを DPM 用に使用します。そのため、DPM 以外の用途で使用する DB インスタンスを指定しないでください。
- ・インスタンス名の指定については、以下に注意してください。
- ・SQL Server の予約済みキーワード("Default"など)は指定できません。
- ・予約済みキーワードを指定した場合、セットアップエラーが発生します。
- ・大文字小文字の区別はありません。
- ・入力できる文字数は、1～16Byte です。
- ・使用できる文字は、半角英数字です。
- ・新規インストール後に変更はできません。
- ・インスタンス名の先頭に数字を使用することはできません。
- ・本確認ダイアログが、ほかのアプリケーションの背面に隠れて表示されない場合があります。ほかのアプリケーションを画面の端にずらし、画面中央に確認ダイアログが表示されていないか確認してください。

10.「データベースインストール」画面が表示されますので、インストール先のフォルダを指定して、「OK」ボタンをクリックします。



注：

- ・手順 5.の「インストール先のフォルダ」に指定したフォルダ、および配下のフォルダは「SQL Server インストールパス」に指定しないでください。
- ・Microsoft SQL Server のインストール先のディスクが圧縮されている、または暗号化されている場合、インストールに失敗する場合があります。圧縮されたディスクまたは暗号化したディスクは、「SQL Server インストールパス」に指定しないでください。
- ・本確認ダイアログが、ほかのアプリケーションの背面に隠れて表示されない場合があります。ほかのアプリケーションを画面の端にずらし、画面中央に確認ダイアログが表示されていないか確認してください。

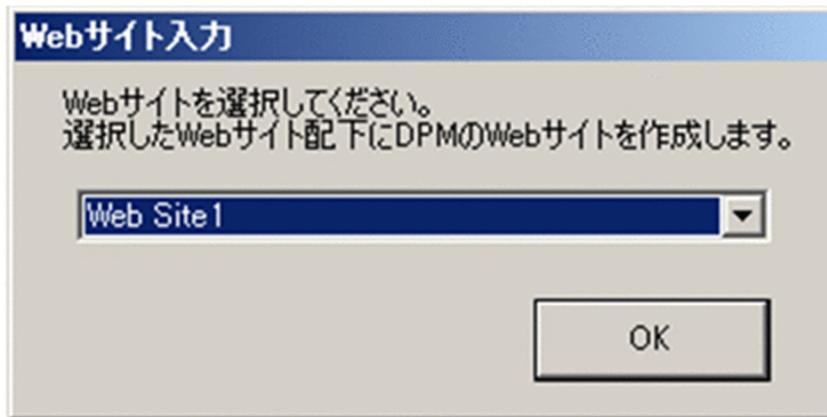
11. データベースのインストールが開始します。

2 インストールを実行する

データベースをインストールしています。しばらくお待ちください。

注：

・DPM サーバの Web コンポーネントは、IIS の Web サイトに「Default Web Site」「既定の Web サイト」「WebRDP」のどれかが存在する場合、その Web サイトにインストールします。上記の Web サイトがどれも存在しない場合は、以下のような画面が表示されますので、インストール先を選択してください。



なお、IIS の Web サイトが一つも存在しない場合は、DPM サーバのインストールが中断されます。

・次の画面が表示する場合、「OK」ボタンをクリックすると、DPM サーバのインストールを中断します。OS を再起動した後に再度 DPM サーバのインストールを行ってください。



12. データベースのインストールが完了すると「詳細設定」画面が表示されますので、「全般」タブを設定します。

詳細設定

全般 | シナリオ | ネットワーク | DHCPサーバ | TFTPサーバ

ライセンス情報

ライセンス数

サーバ情報

コンピュータ名

IPアドレス

サブネットマスク

サーバ設定

シナリオの完了をDPMクライアントからの通信で判断する

DPMクライアントを自動アップグレードする

イメージ設定

バックアップイメージ格納用フォルダ [参照\(A\)](#)

イメージ格納用フォルダ [参照\(B\)](#)

OK

注：

本確認ダイアログが、ほかのアプリケーションの背面に隠れて表示されない場合があります。ほかのアプリケーションを画面の端にずらし、画面中央に確認ダイアログが表示されていないか確認してください。

- 「サーバ情報」ボックスの「IP アドレス」には、DPM クライアントや、イメージビルダ（リモートコンソール）との接続に使用する IP アドレスを選択してください。DPM サーバが動作する OS に設定されているすべての IP アドレスを使用可能とする場合は、ANY を選択してください。

注：

- IP アドレスの設定を変更した場合は、以下を行ってください。

(1) DPM サーバに登録されているすべての管理対象マシンについて、DPM クライアントから管理サーバに通信を行えるように、Web コンソールからすべての管理対象マシンに対してシャットダウンを行ってください。

2 インストールを実行する

(2) イメージビルダ（リモートコンソール）については、接続先 IP アドレスの指定を変更してください。

(3) イメージビルダ（リモートコンソール）について、管理サーバと通信が行えない場合がありますので、リモートコンソールに設定した接続先 IP アドレスを変更してください。

接続設定は「スタート」メニューから「すべてのプログラム」→「ServerConductor」→「DeploymentManager」→「イメージビルダ」を選択すると起動します。

・「IP アドレス」で ANY 以外を選択する場合は、以下に注意してください。一つの LAN ボードに複数 IP アドレスが割り当てられている場合は、OS 上で先頭に見える IP アドレスを選択してください。それ以外の IP アドレスを選択すると DPM が正常に動作しない場合があります。

「IP アドレス」の設定を変更した場合（IP アドレスの変更や増減など）は、以下のサービスを再起動してください。

(1) DeploymentManager PXE Management

(2) DeploymentManager PXE Mtftp

・「IP アドレス」に ANY を選択し、かつ、リモートアップデートのシナリオでマルチキャストによる配信を行う場合は、配信対象となる管理対象マシンは、管理サーバの一つの LAN ボード配下に接続されるようにしてください。

・リストアのシナリオでマルチキャストによる配信を行う場合は、「IP アドレス」に ANY 以外（使用する LAN ボードに設定している IP アドレス）を選択してください。

- ・「シナリオの完了を DPM クライアントからの通信で判断する」では、シナリオの完了判定の方法を選択します。シナリオの完了をリアルタイムに監視する場合は、チェックを入れてください。

本項目にチェックを入れた場合は、管理対象マシンに対して次に何らかの処理を行える状態と判断したタイミングをシナリオ完了とみなします。

（例えば、DPM サーバからの再起動命令発行後、実際に管理対象マシンが再起動し、OS 起動/DPM クライアント起動が完了した時点）

「シナリオの完了を DPM クライアントからの通信で判断する」の設定によってシナリオの終了判定を行うタイミングが異なります。シナリオの終了をリアルタイムに監視する場合は、チェックを入れてください。

(1) チェックを入れた場合

DPM クライアントとの通信を契機にシナリオ実行が完了します。

(例) バックアップシナリオ実行

バックアップ処理完了

PXE ブート

OS 起動

DPM クライアントとの通信（ここで完了）

(2) チェックを入れない場合

DPM クライアントの通信を待たず、DPM サーバが最後の処理/命令を行った時点や管理対象マシンの PXE ブート（DHCP サーバを使用する場合だけ）を契機にシナリオ実行が完了します。

(例) バックアップシナリオ実行

バックアップ処理完了

PXE ブート（ここで完了）

注：

「シナリオの完了を DPM クライアントからの通信で判断する」チェックボックスにチェックを入れた場合は、次の点を確認してください。これらが満たされない場合は、シナリオが完了しません。

- ・管理対象マシンに必ず DPM クライアントをインストールする
- ・シナリオ完了時に管理対象マシンと DPM サーバが通信可能なネットワーク設定であること

また、管理対象マシンが、マニュアル「導入・設計ガイド 3.7 管理対象マシン（物理マシン）」に記載している HW 環境/SW 環境を満たしているか、再度確認してください。

- 「DPM クライアントを自動アップグレードする」では、DPM クライアントの自動アップグレードを行うかどうかを選択します。
DPM クライアントを自動アップグレードする場合は、チェックを入れてください。
自動アップグレードについては、「3.3.1 DPM クライアントを自動アップグレードインストールする」を参照してください。
- バックアップイメージ格納用フォルダを変更したい場合は、「イメージ設定」グループボックスの「バックアップイメージ格納用フォルダ」横の「参照」ボタンをクリックして、変更したいフォルダを選択してください。デフォルトは、「C:¥DeployBackup」です。
- イメージ格納用フォルダを変更したい場合は、「イメージ設定」グループボックスの「イメージ格納用フォルダ」横の「参照」ボタンをクリックして、変更したいフォルダを選択してください。「イメージ格納用フォルダ」は、DPM でサービスパック、HotFixなどを格納するフォルダ名を指定します。デフォルトは、「<DPMサーバインストールドライブ>:¥Deploy」です。

注：

• バックアップイメージ格納用フォルダを変更した場合は、すでに作成したバックアップ、およびリストアシナリオと、デフォルトで作成されている以下のシナリオのイメージファイルの参照先を変更してください。

- (1) System_Backup
- (2) System_Restore_Unicast

バックアップイメージ格納用フォルダの参照先を変更しない場合は、「イメージ一覧」グループボックスにバックアップイメージが表示されません。

バックアップ/リストアシナリオに指定したバックアップイメージの格納先と「バックアップイメージ格納用フォルダ」が一致していなくても、バックアップ/リストアの動作に支障はありません。

• バックアップイメージ格納用フォルダ、およびイメージ格納用フォルダの参照先として、以下のようなフォルダの指定はできません。

- (1) バックアップイメージ格納用フォルダとイメージ格納用フォルダが同じフォルダ
- (2) バックアップイメージ格納用フォルダとイメージ格納用フォルダがそれぞれのフォルダ配下に含まれるような指定（例えば、バックアップイメージ格納用フォルダにイメージ格納フォルダ配下のフォルダを指定できません）。
- (3) Windows のシステムフォルダ
- (4) ほかのアプリケーションで使用しているフォルダ
- (5) ドライブ直下

（例）「D:¥」

- (6) ネットワークドライブ

• バックアップイメージ格納用フォルダおよびイメージ格納用フォルダには、全角文字、「;」および Windows で使用が禁止されている文字を含むパスを指定しないでください。

• バックアップイメージ格納用フォルダのパスは 80Byte 以内にしてください。イメージ格納用フォルダのパスは 254Byte 以内にしてください。

• バックアップイメージ格納用フォルダ、およびイメージ格納用フォルダの変更は、必ず本項番内（項番 12）に記載している手順で行ってください。

• バックアップイメージ格納用フォルダ、およびイメージ格納用フォルダには、DPM の操作を行うユーザ、ならびに DPM サーバ上の "DeploymentManager" という名称で始まる各種サービスが使用するアカウント（既定値ではローカルシステムアカウント（SYSTEM））がフルコントロールでアクセスできるようにアクセス許可を与えてください。

2 インストールを実行する

・バックアップイメージ格納用フォルダ，およびイメージ格納用フォルダとも十分な空き容量を確保してください。

注：

DPM サーバのインストール後に設定を変更することも可能です。詳細については，マニュアル「リファレンスガイド 2.7.1 詳細設定」の「(1) 「全般」タブ」を参照してください。

13.「シナリオ」タブを設定します。

詳細設定

全般 シナリオ ネットワーク DHCPサーバ TFTPサーバ

タイムアウト設定

ハードウェアの設定	10	分
Linuxインストール	120	分

説明

シナリオ実行時のタイムアウトの設定を行います。
通常は変更する必要はありません。

OK

・シナリオのタイムアウト時間を設定します。通常は変更する必要はありません。

注：

・シナリオタイムアウト時間とは，シナリオ実行時のタイムアウトの時間のことです。各項目で設定した時間を過ぎてもシナリオが完了しない場合は，シナリオ実行エラーとなります。

・DPM サーバのインストール後に設定を変更することも可能です。詳細については、マニュアル「リファレンスガイド 2.7.1 詳細設定」の「(2) 「シナリオ」タブ」を参照してください。

14.「ネットワーク」タブを設定します。

詳細設定

全般 | シナリオ | **ネットワーク** | DHCPサーバ | TFTPサーバ

リモート電源操作の設定

リモート電源ON実行間隔 秒

リモート電源ONタイムアウト 分

シナリオ実行の設定

同時実行可能台数 台

説明

- ◇ リモート電源ON実行間隔
複数の管理対象マシンを同時に電源ONする場合の電源投入間隔を指定します。
- ◇ リモート電源ONタイムアウト
電源ONまたは、シナリオ実行時に管理対象マシンからの応答を待つ時間を指定します。
- ◇ 同時実行可能台数
シナリオを同時に実行する最大数を指定します。台数を増やすとネットワークの負荷が高くなります。

OK

・リモート電源操作の設定とシナリオ実行の設定ができます。必要に応じて変更してください。

注：

・同時実行可能台数を超えてシナリオを実行した場合、指定した台数分は実行しますが、超過分の動作は以下のようにシナリオにより異なります。待機状態となったマシンは、先に実行中のマシンが完了次第、順次シナリオを実行します。詳細については、マニュアル「リファレンスガイド 2.7.1 詳細設定」の「(3) 「ネットワーク」タブ」を参照してください。

2 インストールを実行する

シナリオ ^④	同時実行可能台数を超過した分 ^④
バックアップ ^④ リストア(ユニキャスト配信) ^④ リストア(マルチキャスト配信) ^④ リモートアップデート(ユニキャスト配信) ^④	待機状態 ^④
リモートアップデート(マルチキャスト配信) ^④	シナリオ実行エラー ^④

・リモート電源 ON 実行間隔とは、電源投入が一括で実行される場合のリモート電源 ON の実行間隔です。

・リモート電源 ON タイムアウトとは電源 ON、またはシナリオ実行時にマシンからの応答を待つ時間のことです。時間内に反応が無い場合はリモート電源 ON エラーになります。デフォルトの設定は、10 分に設定されています。

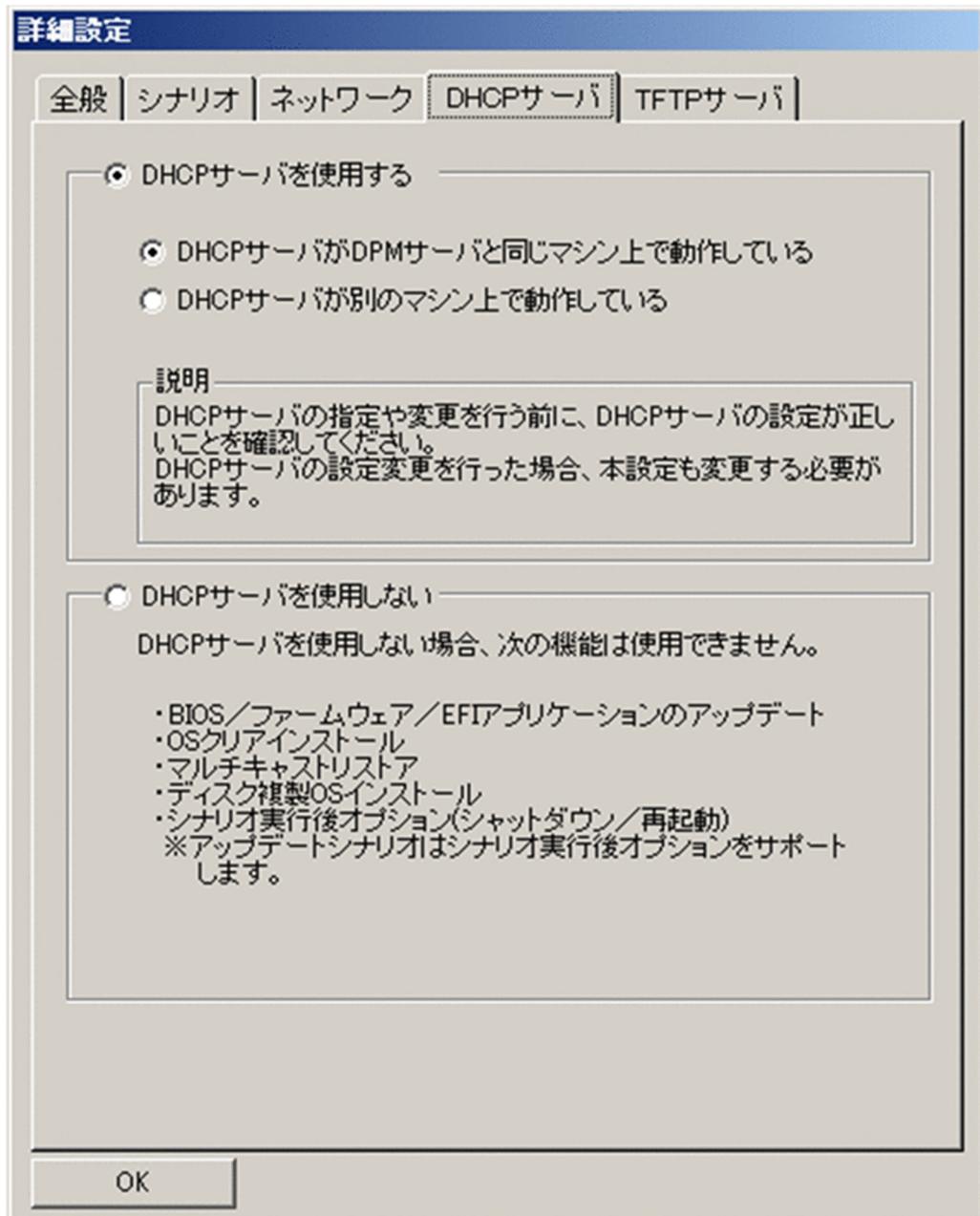
例えば、管理対象マシンのハードウェア構成（SMP 構成や搭載メモリサイズ、搭載 PCI デバイス数）によっては、電源 ON してから PXE ブートするまでに 10 分以上の時間を要する場合があります。このような環境を管理対象マシンとして DPM に登録している場合、DPM からのリモート電源 ON または電源 OFF 状態からのシナリオ実行後、10 分が経過するとエラーが発生します。

電源 ON はするがリモート電源 ON エラーが発生するという場合は、この数値を大きくしてください。また、0 を指定すると管理対象マシンからの反応を待ち続けます（リモート電源 ON タイムアウトしなくなります）。

・同時実行可能台数とはシナリオを同時に実行する台数を指定します。同時実行台数の最大値は、1000 台となっていますが、同時実行するシナリオ数が増えるとネットワークの負荷が高くなります。デフォルトは、5 台に設定されています。5 台を超えた台数を同時に実行する場合は設定を変更してください。

・DPM サーバのインストール後に設定を変更することも可能です。

15. 「DHCP サーバ」タブを設定して、「OK」ボタンをクリックします。



- DHCPサーバの設置場所を確認してください。DPMサーバ上に構築したDHCPサーバを使用する場合には、「DHCPサーバがDPMサーバと同じマシン上で動作している」を選択します（デフォルトで選択されています）。別のマシン上のDHCPサーバを使用する場合は、「DHCPサーバが別のマシン上で動作している」を選択してください。

また、「DHCPサーバを使用しない」を選択しないでください。DHCPサーバを設置した上で、「DHCPサーバを使用する」を選択してください。

注：

- DHCPサーバは、管理サーバ上に構築したものを使用することも、別のサーバに構築したものを使用することもできますが、管理サーバ上に構築したものを使用する場合は、そのDHCPサーバは同一ネットワーク内で唯一のDHCPサーバでなければなりません。別のサーバ上に構築したDHCPサーバを使用する場合は、同一ネットワーク内にDHCPサーバが複数構築されていても動作できます。

2 インストールを実行する

・DPM サーバのインストール後に設定を変更することも可能です。詳細については、マニュアル「リファレンスガイド 2.7.1 詳細設定」の「(4) 「DHCP」タブ」を参照してください。

・「TFTP サーバ」タブはデフォルト設定だけサポートしますので変更しないでください。

デフォルト設定は次のとおりです。

「DPM 以外の TFTP サービスを使用する」 → 「無効」

「TFTP ルート」 → 「<DPM サーバインストールフォルダ>%PXE%Images」

「TFTP サーバ」タブの「TFTP ルート」を変更してしまった場合、次のとおりフォルダ/ファイルがコピーされますが、DPM では使用しません。

(コピー元)：<DPM サーバインストールフォルダ>%PXE%Images% 配下のフォルダ/ファイル

(コピー先)：「TFTP サーバ」タブの「TFTP ルート」で指定したフォルダ配下

16. 「InstallShield Wizard の完了」画面が表示されますので、「完了」ボタンをクリックします。



注：

・インストール完了後、「スタート」メニューに「ServerConductor」→「DeploymentManager」が登録されます。なお、Windows Server 2012/Windows Server 2016 では、「スタート」画面に「ServerConductor」が登録されます。

・以下のどれかのサービスが起動している場合は、DPM サーバに必要なポート/プログラムが自動的に開放されます（開放されるポート/プログラムについては、「付録 B ネットワークポートとプロトコル一覧」を参照してください）。

- ・ Windows Firewall/Internet Connection Sharing (ICS)
- ・ Windows Firewall

以上で「DPM サーバ」のインストールは完了です。

2.2 DPM クライアントをインストールする

DPM クライアントは管理対象マシンにインストールするコンポーネントです。

管理対象マシンの OS によってインストール方法が異なります。Windows をご利用の場合は、「2.2.1 Windows (x86/x64) 版をインストールする」を、Linux をご利用の場合は、「2.2.2 Linux (x86/x64) 版をインストールする」を参照してください。

DPM クライアントをインストールする際は、以下の点に注意してください。

- インストールできる OS については、マニュアル「導入・設計ガイド 3.7 管理対象マシン (物理マシン)」を参照してください。
- DPM クライアントのインストールを行うために必要なディスク容量があることを確認してください。

注：

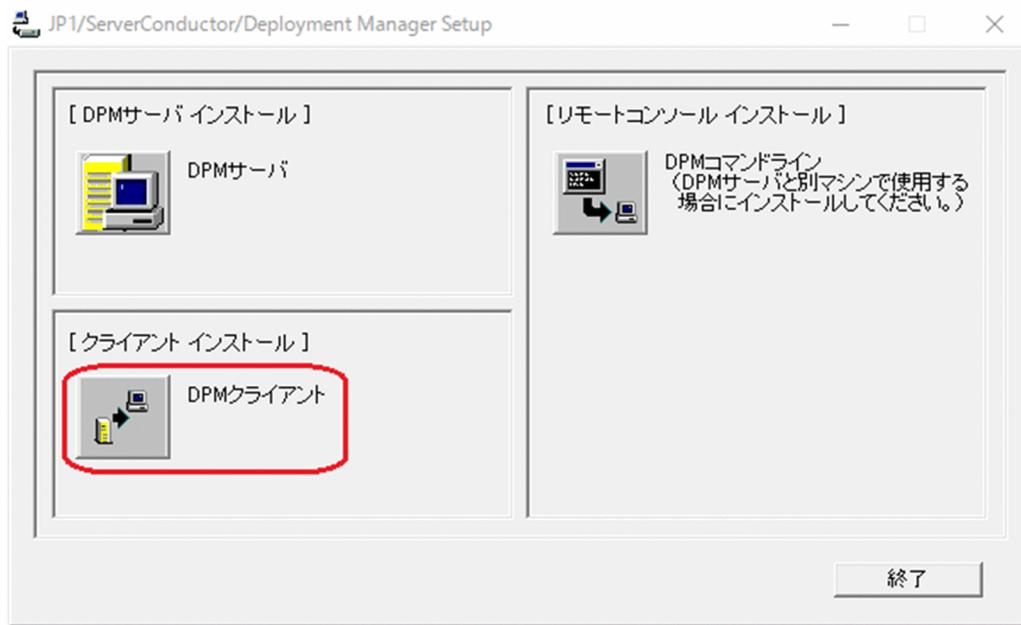
- DPM クライアントは、DPM サーバと同じバージョン-リビジョンのものをお使いください。DPM クライアントが旧バージョン-リビジョンを使用する場合は、「3.3 DPM クライアントをアップグレードインストールする」を参照してアップグレードしてください。
一部に制限がありますが、旧バージョン-リビジョンの DPM クライアントをインストールしたマシンを、管理対象マシンとする運用もサポートします。詳細は、マニュアル「導入・設計ガイド 付録 B DPM サーバと DPM クライアントのバージョンが異なる環境」を参照してください。
- 「管理」ビュー → 「DPM サーバ」 → 「詳細設定」 → 「全般」タブで「シナリオの完了を DPM クライアントからの通信で判断する」の項目にチェックをした場合、DPM クライアントを必ずインストールしてください。シナリオの完了を認識できず、シナリオエラーとなります。
- DPM クライアントのインストールは必須ではありませんが、インストールしない場合は、以下の機能が使用できません。
 - サービスパック/HotFix/Linux パッチファイル
 - シャットダウン
 - DPM サーバへの OS/サービスパック/HotFix/Linux パッチファイル情報の送信
 - シナリオ実行時の再起動の強制実行

2.2.1 Windows (x86/x64) 版をインストールする

DPM クライアント (Windows) のインストール手順について説明します。

1. DPM クライアントをインストールするマシンにローカルのビルトイン Administrator アカウントでログオンします。
2. インストール媒体を DVD ドライブにセットします。「JP1/ServerConductor/Deployment Manager Setup」画面が起動しますので、「DPM クライアント」を選択します。

2 インストールを実行する

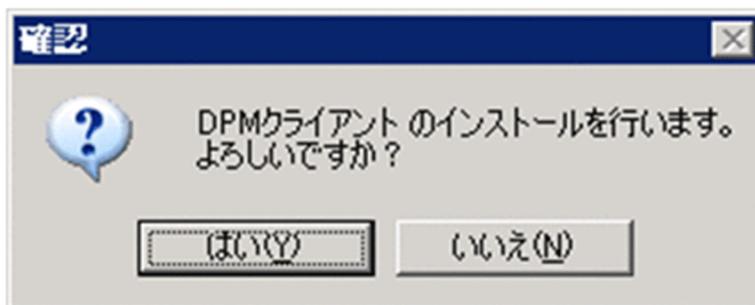


注：

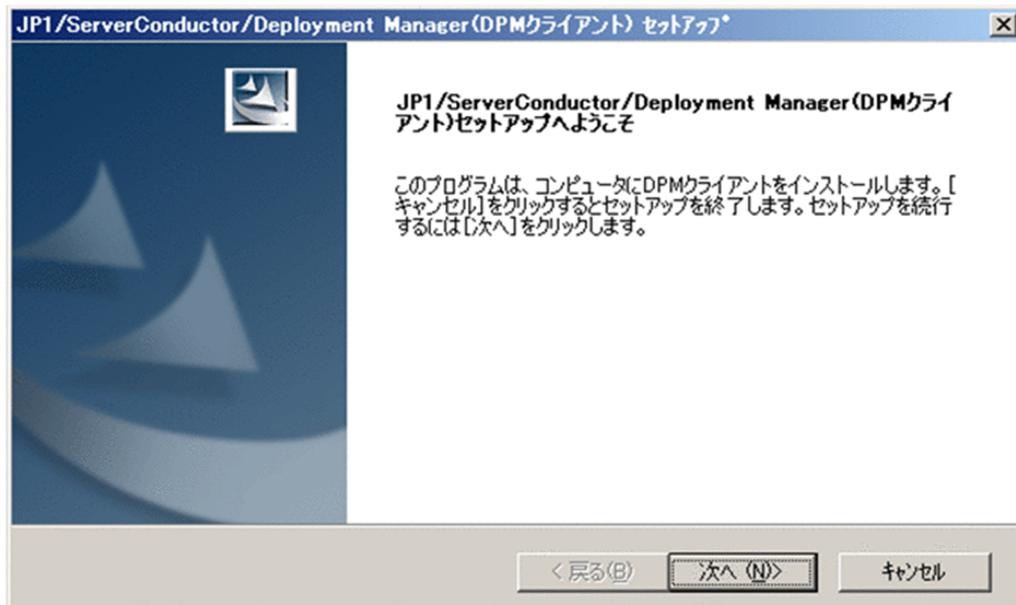
Windows Server 2012 以降の OS で、最小サーバーインタフェースとしている環境に DPM クライアントをインストールする場合は、以下のファイルを実行して、「JP1/ServerConductor/Deployment Manager Setup」画面を表示してください。

<製品媒体>:*Launch.exe

3.「確認」画面が表示されますので、「はい」ボタンをクリックします。



4.「JP1/ServerConductor/Deployment Manager(DPM クライアント) セットアップ」ウィザードが開始されますので、「次へ」ボタンをクリックします。



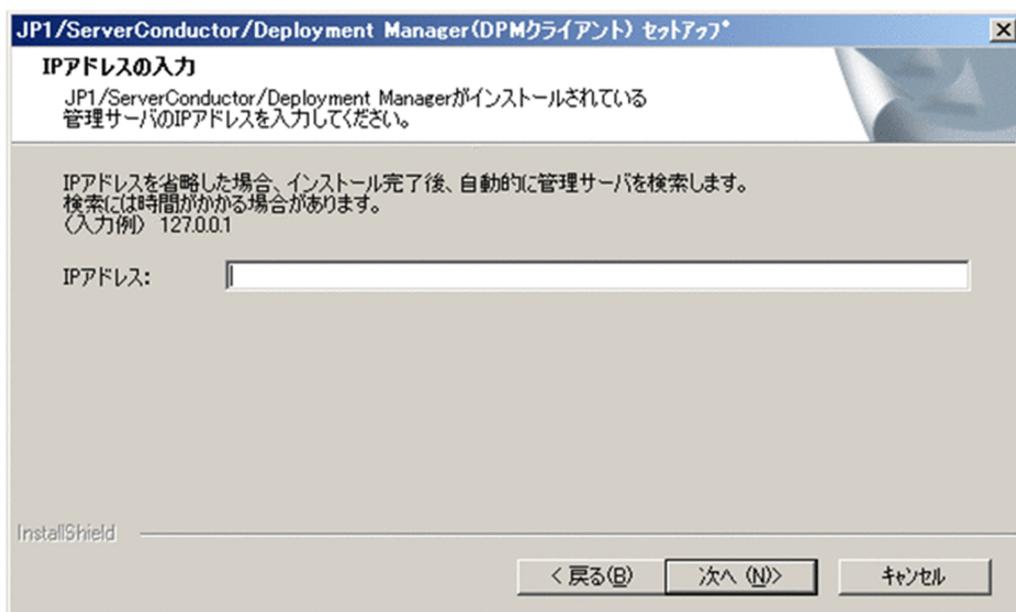
5. 「インストール先の選択」画面が表示されますので、インストール先のフォルダを指定して、「次へ」ボタンをクリックします。なお、インストール先のフォルダのパスは 150Byte 以内にしてください。

注：

インストール先のフォルダの指定については、以下に注意してください。

- ・全角文字、「%」、「=」、「;」、「!」、「@」、「^」、「&」および Windows で使用が禁止されている文字を含むパスを指定しないでください。
- ・ディスク複製 OS インストールを行う場合は、ドライブ文字の再割り当ての影響を受けないドライブ (C ドライブを推奨します。) にインストールしてください。

6. 「IP アドレスの入力」画面が表示されますので、DPM サーバがインストールされた管理サーバの IP アドレスを入力して、「次へ」ボタンをクリックします。



2 インストールを実行する

注：

- ・管理サーバの IP アドレスが不明な場合は、IP アドレスの省略も可能です。IP アドレスを省略した場合、インストール完了後に、自動的に管理サーバを検索します。ただし、検索には時間がかかる場合があります。

- ・DPM クライアントは、管理サーバの IP アドレスと、DPM サーバと DPM クライアントが使用するポートの情報を保持しており、DPM クライアントのサービス起動時に保持している IP アドレス、ポートで DPM サーバに接続を試みます。接続できない場合は、管理サーバの検索を行い IP アドレス、ポートの情報を取得します。

管理サーバの検索には DHCP の通信シーケンスの一部を使用（DHCP サーバを使用する運用/使用しない運用のどちらの場合も）しており、DPM クライアントは管理サーバからのデータ受信に UDP:68 ポートを使用します。DPM クライアントが UDP:68 ポートでネットワークにバインドできない場合、管理サーバの検索に失敗します。

- ・管理サーバを検索する場合は次に注意してください。

管理対象マシンが複数のネットワーク上に接続され、それぞれのネットワークに DPM の管理サーバが存在する環境で、管理サーバを検索した場合、最初に応答した管理サーバの IP アドレスを取得します。この場合は、意図した管理サーバに接続できない可能性があります。

- ・DPM クライアントの新規インストール時に、次のどちらかの環境では、管理サーバの IP アドレスを入力しても、DPM クライアントが想定するポート番号では、管理サーバに接続できないため、管理サーバの検索を行います。

- ・DPM サーバを 09-54 より前のバージョンからアップグレードインストールした環境

- ・DPM サーバ 09-54 以降をインストール後に、DPM が使用するポート番号を「付録 B.1 ネットワークポートとプロトコル一覧」に記載の 09-54 以降のデフォルトポート以外に変更した環境

7.自動的に処理が進み、「InstallShield Wizard の完了」画面が表示されますので、「完了」ボタンをクリックします。





注：

Windows Firewall サービス、または Windows Firewall/Internet Connection Sharing (ICS) サービスのどれかが起動している場合は、DPM クライアントに必要な以下のポートが自動的に開放されます。

プロトコル	ポート番号/プログラム
ICMP	8(Echo 着信)
TCP	DepAgent.exe
UDP	DepAgent.exe
TCP	rupdsvc.exe
UDP	rupdsvc.exe

以上で DPM クライアント (Windows) のインストールは完了です。

2.2.2 Linux (x86/x64) 版をインストールする

DPM クライアント (Linux) のインストール手順について説明します。

注：

- ・DPM クライアント (Linux) のインストール先は、/usr/hitachi/dpm/配下 (固定) となります。
- ・DPM クライアントを動作させるためには以下のライブラリが必要となります。

	x86	x64
DPM クライアントのインストール	<ul style="list-style-type: none"> ・ libpthread.so.0 ・ libc.so.* ・ ld-linux.so.* 	<ul style="list-style-type: none"> ・ libpthread.so.0 (※1) ・ libc.so.* (※1) ・ ld-linux.so.* (※1)
ディスク複製 OS インストール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「DPM クライアントのインストール」に記載のライブラリ ・ libcrypt.so.* (※2) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「DPM クライアントのインストール」に記載のライブラリ ・ libcrypt.so.* (※2) ・ libfreebl3.so (※2)

2 インストールを実行する

	x86	x64
ディスク複製 OS インストール	・ libfreebl3.so (※2)	・ 「DPM クライアントのインストール」に記載のライブラリ ・ libcrypt.so.* (※2) ・ libfreebl3.so (※2)
サービスパック/HotFix/Linux パッチファイル/アプリケーションのインストール(シナリオ方式)	・ 「DPM クライアントのインストール」に記載のライブラリ	・ 「DPM クライアントのインストール」に記載のライブラリ ・ /lib/libgcc_s.so.1 (※3)

※1

Red Hat Enterprise Linux 6 以降で、必要なライブラリが存在していない場合は、以下の rpm パッケージをインストールしてください。

・ glibc-*.i686.rpm (※4)

※2

Red Hat Enterprise Linux 6 以降で、必要なライブラリが存在していない場合は、以下の rpm パッケージをインストールしてください。

・ nss-softokn-freebl-*.i686.rpm (※4)

※3

/lib/x64 配下に同名ライブラリが存在する場合でも別途必要です。ライブラリは以下の rpm パッケージのいずれかをインストールしてください。

・ libgcc-*.i386.rpm

・ libgcc-*.i686.rpm

※4

パッケージのインストール時にパッケージの依存関係を無視するオプション(--nodeps)を指定した場合は、必要なパッケージがインストールされていない可能性がありますので、注意してください。

なお、Compatibility libraries(x64 の OS 環境で x86 用モジュールを動作させるためのライブラリ)をインストールした場合は不要です。

・ DPM クライアントで使用する以下のポートを開放してください。

プロトコル	ポート番号
UDP	68
TCP	26509
TCP	26510
TCP	26520
UDP	26529

(Red Hat Enterprise Linux 6 のポート開放の例)

(1) ファイアウォールの設定ファイル (/etc/sysconfig/iptables) を vi などで開いてください。

※ 設定ファイルがない場合には、クライアントサービスが使用するポートはすでに有効になっています。以降の処理は必要ありません。

(2) 設定ファイルの先頭に以下の行を登録してください。ここで、RH-Firewall-1-INPUT は任意の文字列です。

```
:INPUT ACCEPT [0:0]
```

```
:FORWARD ACCEPT [0:0]
```

```
:OUTPUT ACCEPT [0:0]
```

```
:RH-Firewall-1-INPUT - [0:0]
```

```
-A INPUT -j RH-Firewall-1-INPUT
```

```
-A FORWARD -j RH-Firewall-1-INPUT
```

(3) COMMIT 行の前に以下の行を登録してください。なお、RH-Firewall-1-INPUT は、(2)で定義した文字列です。

```
-A RH-Firewall-1-INPUT -m state --state NEW -m icmp -p icmp --icmp-type 8 -j ACCEPT
```

```
-A RH-Firewall-1-INPUT -m state --state NEW -m udp -p udp --dport 68 -j ACCEPT
```

```
-A RH-Firewall-1-INPUT -m state --state NEW -m udp -p udp --dport 4011 -j ACCEPT
```

```
-A RH-Firewall-1-INPUT -m state --state NEW -m udp -p udp --dport 5561 -j ACCEPT
```

```
-A RH-Firewall-1-INPUT -m state --state NEW -m tcp -p tcp --dport 26501 -j ACCEPT
```

```
-A RH-Firewall-1-INPUT -m state --state NEW -m tcp -p tcp --dport 26502 -j ACCEPT
```

```
-A RH-Firewall-1-INPUT -m state --state NEW -m tcp -p tcp --dport 26503 -j ACCEPT
```

```
-A RH-Firewall-1-INPUT -m state --state NEW -m tcp -p tcp --dport 26509 -j ACCEPT
```

```
-A RH-Firewall-1-INPUT -m state --state NEW -m tcp -p tcp --dport 26510 -j ACCEPT
```

```
-A RH-Firewall-1-INPUT -m state --state NEW -m tcp -p tcp --dport 26520 -j ACCEPT
```

```
-A RH-Firewall-1-INPUT -m state --state NEW -m udp -p udp --dport 26529 -j ACCEPT
```

```
-A RH-Firewall-1-INPUT -m state --state NEW -m udp -p udp --dport 26530 -j ACCEPT
```

ここで指定するポート番号は、管理サーバの設定ファイルに記載された値にしてください。

```
<DPM サーバインストールフォルダ>*>PXEXImages*Port.ini
```

```
[SERVERPORT] セクション
```

```
キー 1 : BackupRestoreUnicast (TCP, 既定値 : 26501)
```

```
キー 2 : BOOTNIC (TCP, 既定値 : 26502)
```

```
キー 3 : FSC (TCP, 既定値 : 26503)
```

```
キー 4 : RestoreMulticast (UDP, 既定値 : 26530)
```

```
[CLIENTPORT] セクション
```

```
キー 1 : ShutdownReboot (TCP, 既定値 : 26509)
```

```
キー 2 : RemoteUpdateUnicast (TCP, 既定値 : 26510)
```

```
キー 3 : RemoteUpdateMulticast (UDP, 既定値 : 26529)
```

(4) 以下の行が存在する場合は、必ず COMMIT 行の直前に登録してください。存在しない場合は、追記は不要です。

```
-A RH-Firewall-1-INPUT -j REJECT --reject-with icmp-host-prohibited
```

(5) ファイルを保存後、以下の手順をコンソール上で実行してサービスを再起動します。

```
#/etc/rc.d/init.d/iptables restart
```

・インストールされているライブラリは、以下のコマンドを実行して確認してください。

```
find / -name "ライブラリ名"
```

(例)

```
find / -name libpthread.so.0
```

または

```
find / -name "libpthread*"
```

("*"は、ワイルドカードとなります。)

上記のコマンドの場合、実行結果に以下の情報があれば、ライブラリがすでにインストールされています。

```
/lib/libpthread.so.0
```

2 インストールを実行する

1. DPM クライアントをインストールするマシンに、root アカウントでログインします。
2. インストール媒体を DVD ドライブにセットします。
3. インストール媒体をマウントします。

```
# mount -t iso9660 -o exec <マウントするDVDドライブ>
```

注：

"-t iso9660" オプションを指定してください。

(例) `mount -r -t iso9660 -o exec /dev/dvd /mnt/dvd`

mount コマンドのそのほかの使用方法については、使用している OS のマニュアルを参照してください。

4. カレントディレクトリを以下へ移動します。

```
# cd /mnt/dvd/Linux/ia32/bin/agent
```

5. `depinst.sh` を実行します。

```
# ./depinst.sh
```

6. 管理サーバの IP アドレスの入力要求が出力されます。

```
Enter the IP address of the management server.
```

(If you omit the IP address, the DPM client service searches the management server automatically, but it might take some time.)

>

7. 管理サーバの IP アドレスを入力して「Enter」キーを押します。

注：

- ・管理サーバの IP アドレスが不明な場合は、IP アドレスの省略も可能です。IP アドレスを省略した場合、インストール完了後に、自動的に管理サーバを検索します。ただし、検索には時間がかかる場合があります。

- ・DPM クライアントは、管理サーバの IP アドレスと、DPM サーバと DPM クライアントが使用するポートの情報を保持しており、DPM クライアントのサービス起動時に保持している IP アドレス、ポートで DPM サーバに接続を試みます。接続できない場合は、管理サーバの検索を行い IP アドレス、ポートの情報を取得します。

管理サーバの検索には DHCP の通信シーケンスの一部を使用 (DHCP サーバを使用する運用/使用しない運用のどちらの場合も) しており、DPM クライアントは管理サーバからのデータ受信に UDP:68 ポートを使用します。DPM クライアントが UDP:68 ポートでネットワークにバインドできない場合、管理サーバの検索に失敗します。

OS 標準の DHCP クライアントも UDP:68 ポートを使用しますが、評価の結果、SUSE Linux Enterprise 10 の `dhcpcd` 以外は問題ないことを確認済みです。SUSE Linux Enterprise 10 で管理サーバ検索の機能を使用するためには `dhcpcd` を停止した状態で DPM クライアントを起動させる必要があります。SUSE Linux Enterprise 10 のディスク複製 OS インストールを行う場合は、`dhcpcd` が必要なため、必ず管理サーバの IP アドレスを指定し、サーバ検索が動作しないようにしてください。ディスク複製 OS インストール以外の場合、管理対象マシンが `dhcpcd` を必要としないのであれば `dhcpcd` を停止させてください。`dhcpcd` が必要な場合、DPM の管理サーバ検索機能は使用できません。

- ・管理サーバを検索する場合は次に注意してください。

管理対象マシンが複数のネットワーク上に接続され、それぞれのネットワークに DPM の管理サーバが存在する環境で、管理サーバを検索した場合、最初に応答した管理サーバの IP アドレスを取得します。この場合は、意図した管理サーバに接続できない可能性があります。

- ・ DPM クライアントの新規インストール時に、次のどちらかの環境では、管理サーバの IP アドレスを入力しても、DPM クライアントが想定するポート番号では、管理サーバに接続できないため、管理サーバの検索を行います。
- ・ DPM サーバを 09-54 より前のバージョンからアップグレードインストールした環境
- ・ DPM サーバ 09-54 以降をインストール後に、DPM が使用するポート番号を「付録 B.1 ネットワークポートとプロトコル一覧」に記載の 09-54 以降のデフォルトポート以外に変更した環境

以上で、DPM クライアント (Linux) のインストールは、完了です。

注：

- ・ "unzip"をインストールしていない場合は、以下のメッセージがコンソール上に表示されますので、"unzip"をインストールしてください。

The unzip command is required in order to support remote update.

Please install a unzip package.

The unzip package is attached to installation CD of Linux OS.

Installation of client service was completed.

- ・ システムを再起動する必要はありません。

・ Linux のマシンが X Window システムで動作している場合、DPM クライアント (Linux) をインストールすると DPM サーバからのシャットダウン、リモートアップデートを行った際のメッセージを表示するために、ログイン時にコンソールが自動的に起動するようになります。コンソールを終了させると、メッセージが確認できなくなります。誤ってコンソールを終了させてしまった場合は、コンソールを手動で起動してください。txt モードで動作している場合には、これらのメッセージを起動している画面上に出力します。

txt モードの場合でも DPM の動作に影響はありません。

なお、コンソール (xterm) がインストールされていない場合は、自動起動しません。次の rpm をインストールしてください。

xterm-*.*.*.rpm (*は英数字が入ります。)

- ・ DPM クライアントのインストール時に以下のメッセージが表示される場合があります。

Warning: This program is an suid-root program or is being run by the root user. The full text of the error or warning message cannot be safely formatted in this environment. You may get a more descriptive message by running the program as a non-root user or by removing the suid bit on the executable.

/usr/X11R6/bin/xterm Xt error: Can't open display: %s

このメッセージは以下のどれかの場合に表示されます。

- (1) 管理対象マシンに X サーバがインストールされていない状態でインストールを行った。
- (2) 管理対象マシンに X サーバがインストールされているが、X サーバが起動されていない状態でインストールを行った。
- (3) 管理対象マシンに telnet より root ユーザアカウントでログインして、インストールを行った。

これは、DPM クライアントに関するメッセージが表示できないことによるものです。実際の運用に影響はありません。

2.3 DPM コマンドラインをインストールする

DPM コマンドラインは、管理対象マシンに対する処理の実行、実行状況の確認を行うコマンドラインインタフェースです。

DPM サーバのインストールと同時にインストールされますので、同じマシン上で DPM コマンドラインを使用する場合は、別途、インストールする必要はありません。DPM サーバとは別のマシンで DPM コマンドラインを使用する場合には、インストールが必要です。

DPM コマンドラインをインストールする際は、以下の点に注意してください。

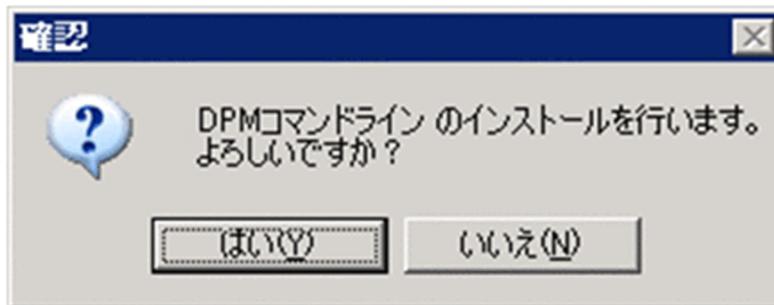
- インストールできる OS については、マニュアル「導入・設計ガイド 3.6 DPM コマンドライン」を参照してください。
- DPM コマンドラインのインストールを行うために必要なディスク容量があることを確認してください。

DPM コマンドラインのインストール手順について説明します。

1. DPM コマンドラインをインストールするマシンにローカルのビルトイン Administrator アカウントでログオンします。
2. インストール媒体を DVD ドライブにセットします。「JP1/ServerConductor/Deployment Manager Setup」画面が起動しますので、「DPM コマンドライン」を選択します。



3. 確認画面が表示されますので、「はい」 ボタンをクリックします。



4. 「JP1/ServerConductor/Deployment Manager (DPM コマンドライン) セットアップ」ウィザードが開始されますので、「次へ」ボタンをクリックします。



5. 「インストール先の選択」画面が表示されますので、インストール先のフォルダを指定して、「次へ」ボタンをクリックします。なお、インストール先のフォルダのパスは 150Byte 以内にご覧ください。

2 インストールを実行する



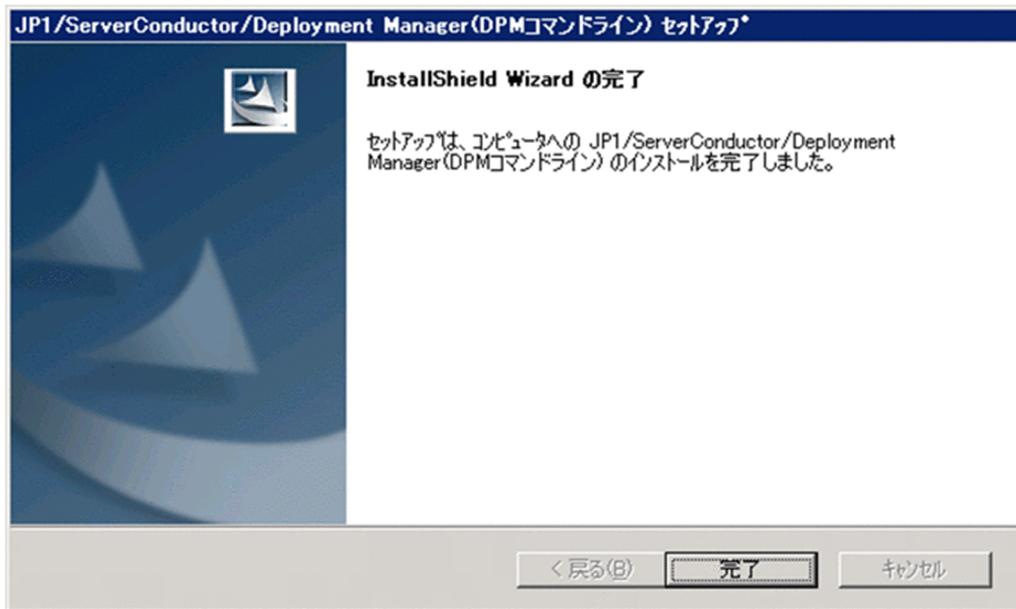
注：

- ・インストール先に指定したフォルダを控えておいてください。また、DPM コマンドラインを使用するにはコマンドプロンプト上でインストール先へ移動してください。「インストール先のフォルダ」のデフォルトは、(システムドライブ) :%Program Files (x86)%Hitachi%ServerConductor%DeploymentManager です。
- ・インストール先のフォルダには、全角文字、「%」, [=], [;], [!], [@], [^], [&] および Windows で使用が禁止されている文字を含むパスを指定しないでください。

6.「セットアップステータス」画面が表示されインストールが開始されます。



7.インストールが完了し、「InstallShield Wizard の完了」画面が表示されますので、「完了」ボタンをクリックします。



以上で DPM コマンドラインのインストールは、完了です。

注：

コマンドラインの使用方法については、マニュアル「リファレンスガイド 7 DPM コマンドライン」を参照してください。

3

アップグレードインストールを実行する

この章では、現在お使いの DPM がインストールされた環境を DPM09-63 へアップグレードインストールする手順について説明します。

3.1 アップグレードインストールを始める前に

3.1.1 アップグレードインストール実行前の注意

DPM の各機能に対するアップグレードインストールについて説明します。アップグレードインストールを行う前に、DPM の操作（以下）がすべて完了/終了していることを確認してください。

- 管理対象マシンに対して実施している操作（シナリオ実行、自動更新、ファイル配信、ファイル削除、「ファイル/フォルダ詳細」画面の情報取得）が完了していること。
- Web コンソール、DPM の各種ツール類を終了していること。

なお、起動しているエクスプローラ、Web ブラウザ、イベントビューア、そのほかアプリケーションなどがある場合は、すべて終了してください。

- 次のアップグレードインストールだけサポートしています。
 - DPM 08-50 以降から、DPM 09-70 以降へのアップグレードインストール
 - DPM コンポーネントはダウングレードできません
(例) DPM09-70 がインストールされた環境に DPM09-65 をインストールできない。
- DPM009-65 より前からアップグレードを行う場合、アップグレード後に、DPM09-70 以降のライセンスキーを登録した後で、既存のライセンスキーを削除してください。ライセンスキーの登録手順は、「5.1 DPM 運用前の準備を行う」を参照してください。
ライセンスキーの削除手順は、マニュアル「リファレンスガイド 2.5.2 ライセンスキー削除」を参照してください。
- DPM09-10 より前のバージョンの管理サーバ for DPM、Web サーバ for DPM、データベースは、DPM09-10 以降、DPM サーバに統合しました。DPM09-10 より前バージョンの各コンポーネントのデータはアップグレード時には以下のように扱われます。
 - 管理サーバ for DPM のデータはアップグレード時に引き継がれます。
 - DPM08-55 以降のバージョンから本バージョンへアップグレードインストールする場合は、アップグレード前に使用していたデータベースのインスタンスをそのまま引き継ぎ、本バージョンにアップグレード後も継続して使用します。
 - Web サーバ for DPM (Tomcat で使用する DPM のデータ) は、DPM09-10 以降、使用しませんので、DPM サーバのアップグレード時に削除されます。
- DPM09-59 からディスク構成を確認するツール (ディスクビューア) が廃止され、Web コンソールから管理対象マシンのディスク構成を確認できるようになりました。DPM09-59 より前のバージョンから DPM09-59 以降にアップグレードした場合は、ディスクビューアがアンインストールされます。管理対象マシンのディスク構成を Web コンソールから確認する方法についてはマニュアルの「リファレンスガイド 3.7 管理対象マシン詳細」を参照してください。
- DPM09-10 より前のバージョンで使用していた Tomcat は、DPM09-10 以降では使用しません。DPM サーバのアップグレード時に、Tomcat をアンインストールするか確認メッセージがでますので、Tomcat が不要であれば削除してください。
アップグレードした後に、Tomcat をアンインストールする場合は、DPM09-10 以降のインストール媒体の次のファイルを実行してください。
`<インストール媒体>:\$DPM%TOOLS%\TomcatUninstall\%Tomcat_Silent_Uninst_60.bat`

- DPM09-10 より前のバージョンで Web サーバ for DPM と管理サーバ for DPM を同じマシンにインストールした環境で、DPM サーバのアップグレード時に、Web サーバ for DPM を削除します。この際に Tomcat もアンインストールできます。
- DPM08-55～09-03 で管理サーバ for DPM とデータベースを別のマシンで構築した環境からのアップグレードインストールはサポートしていません。この場合は、次の手順を行ってください。
 - (1) マシン情報エクスポートを行う。
 - (2) 作成したシナリオの内容を記録する。
 - (3) 次のファイルを任意の場所にコピーする。
 <DPMサーバインストールフォルダ>%DataFile%KernelID.lst
 - (4) 管理サーバ for DPM およびデータベースをアンインストールする。
 - (5) DPM サーバをインストールする。
 - (6) (1)でエクスポートしたマシン情報をインポートする。
 - (7) (2)で記録したとおりにシナリオを作成する。
 - (8) (3)の KernelID.lst を参照して、Web コンソールから Deploy-OS を設定する。
- 管理サーバ for DPM と Web サーバ for DPM を別のマシンで構築した環境では、管理サーバ for DPM がインストールされているマシンで DPM サーバのアップグレードインストールを行ってください。Web サーバ for DPM は使用しませんのでアンインストールしてください。また Tomcat 自体も必要に応じてアンインストールしてください。
- アップグレードインストールを行う前にマニュアル「導入・設計ガイド 付録 A サポート一覧」を参照して本バージョンのサポート対象であることを確認してください。
- DPM 09-54 でネットワークポートのデフォルトを変更しましたが、アップグレードインストール時は、アップグレード前に使用していたネットワークポートを引継ぎます。
ただし、ポート番号 56050 番はアップグレード後に引継がれず、代わりに 26500 番を使用します。
- アップグレードインストール前のバージョンで以下のビルトインシナリオを変更していた場合、アップグレードインストールで引き継がれません。
 - System_AgentUpgrade_Multicast
 - System_LinuxAgentUpgrade_Multicast
- 「プログラムと機能」からアップグレードインストールはできません。
- インストール媒体からアップグレードインストールを行ってください。

3.2 DPM サーバをアップグレードインストールする

DPM サーバのアップグレードインストールについて説明します。

DPM サーバ (DPM09-10 より前のバージョンでは、管理サーバ for DPM) がインストールされているマシンに対して、アップグレードインストールを行ってください。

バージョンによりアップグレードインストールの手順が異なります。

注：

- アップグレード前のバージョンと本バージョンでは、前提ソフトウェアが異なる場合があります。「1.2 インストールを始める前に」を参照して、必要に応じて、事前に必要なソフトウェアをインストールしてください。
- Tomcat がインストールされている場合は、「Apache Tomcat」のサービスを停止してください。
- DPM09-10 より前のバージョンからアップグレードインストールする場合は、IIS のインストール、および設定が必要です。「1.2.1 インターネットインフォメーションサービス(IIS)を設定する」を参照してください。
- Windows Server 2008 R2 でアップグレードする場合は、事前に..NET Framework 4.5.2 以降にする必要があります。
- DPM08-55～09-03 の場合、Microsoft SQL Server 2005 Express Editoin を DPM の管理サーバで使用していますが、DPM09-10 以降にアップグレードした場合、Microsoft SQL Server 2005 Express Editoin を引続き使用します。
- DPM の管理サーバで使用している Microsoft SQL Server 2005 に SP3/SP4 を適用する場合は、「付録 D.1 Microsoft SQL Server 2005 Express Edition SP3/SP4 のインストール」を参照してください。
- DPM09-10～09-54 の場合、Microsoft SQL Server 2008 R2 SP1 Express x86/x64 を DPM の管理サーバで使用していますが、DPM09-55 以降にアップグレードした場合、Microsoft SQL Server 2008 R2 SP1 Express x86/x64 を引続き使用します。
- DPM09-55～09-62 の場合、Microsoft SQL Server 2012 Express を DPM の管理サーバで使用していますが、DPM09-63 以降にアップグレードした場合も、インストール済みの Microsoft SQL Server 2012 Express を引続き使用します。
- DPM09-63～09-64 の場合、Microsoft SQL Server 2014 Express を DPM の管理サーバで使用していますが、DPM09-65 以降にアップグレードした場合も、インストール済みの Microsoft SQL Server 2014 Express を引続き使用します。
- DPM09-10 より前のバージョンで作成したバックアップイメージファイルについては、以下の注意が必要です。
- DPM09-10 の Web コンソールで設定した「バックアップイメージ格納用フォルダ」には自動的に移動しません。手動で「バックアップイメージ格納用フォルダ」に移動してください。また、バックアップ/リストアシナリオのバックアップイメージファイルのパスについても必要に応じて変更してください。
- バックアップイメージファイルが「バックアップイメージ格納用フォルダ」にある場合には、バックアップイメージファイルはイメージとして Web コンソールの「イメージ一覧」画面に表示されますが、イメージに関連する情報は表示されません。関連情報を表示させるためには再度バックアップを行う必要があります。

- DPM09-00 より OS クリアインストール機能は使用できません。DPM Ver09-00 より前のバージョンで OS クリアインストール機能を使用されていた場合には、アップグレードを行う前に以下を行ってください。
- Web コンソールで OS クリアインストール、および OS クリアインストールを含むシナリオを削除してください。
- イメージビルダの「登録データの削除」→「オペレーティングシステム」より、OS クリアインストールで使用するための OS イメージを削除してください。
- DPM09-10 より前のバージョンで、クライアントサービス for DPM を使用していない場合、アップグレードインストール後に、各管理対象マシンの IP アドレスを DPM サーバへ登録してください。IP アドレスの登録を行わないと、DPM では「Unknown」の状態となり、電源 ON/OFF の確認ができなくなります。IP アドレスの登録方法はマニュアル「リファレンスガイド 3.7.2 管理対象マシン編集」を参照してください。
- DPM09-10 以降のバージョンでは、マシングループ名、およびシナリオグループ名に"/"（スラッシュ）は、使用できません。このため、アップグレード前にグループ名の変更を行い、"/"（スラッシュ）を別の文字に変更してください。"/"（スラッシュ）のまま DPM09-10 以降のバージョンにアップグレードインストールを行うと、"/"（スラッシュ）が"_"（アンダーバー）に自動的に変換されます。この変換により、同じグループ名が発生する場合には、二つのグループの内容がマージされます。
- DPM09-10 以降では、「一般コンピュータ」「BladeServer」等のグループ種別は廃止され、すべて「一般コンピュータ」グループの扱いとなります。「BladeServer」グループ特有の設定値（「収納ユニット」「ユニット番号」「ブレード幅」）は削除されます。
- DPM09-10 より前に作成したシナリオは、「Existing Scenarios」シナリオグループ配下に格納されます。
- DPM09-54 では、管理サーバと管理対象マシンのセグメントが異なる環境で、管理サーバ/ポート検索を行う場合は、途中のスイッチ（ルータ）に 4011 ポートのフォワード設定が必要でしたが、DPM09-55 では 4011 ポートのフォワード設定は不要となりました。DPM09-54 にてセグメントが異なる環境で管理サーバ/ポート検索を行うために、スイッチ（ルータ）に 4011 ポートのフォワード設定をしている場合は、DPM09-55 以降にアップグレードインストールした後で、設定を解除してください。
- 本バージョンで使用する予定のないサービスパック/HotFix は事前に削除してください。
- ターミナルサービス（Windows Server 2008 R2 以降の OS の場合は、リモートデスクトップサービス）が有効な状態のマシンに対して DPM サーバをアップグレードインストールする場合は、以下のどれかの方法で行ってください。
- OS のメニューから行う方法
「スタート」メニューから「コントロールパネル」→「ターミナルサーバへのアプリケーションのインストール」（Windows Server 2008 R2 以降の OS の場合は、「リモート デスクトップ サーバへのアプリケーションのインストール」）を選択し、以下のファイルを指定してアップグレードインストールを行ってください。
<インストール媒体>:\DPM\Launch.exe
- コマンドプロンプトから行う方法
 - 1) Administrator グループのユーザでコマンドプロンプトを起動します。
なお、Administrator 以外のユーザの場合は、管理者権限で実行してください。
 - 2) 以下のコマンドを実行してください。
change user /install
 - 3) コマンドプロンプト上で、以下のファイルを実行してください。

3 アップグレードインストールを実行する

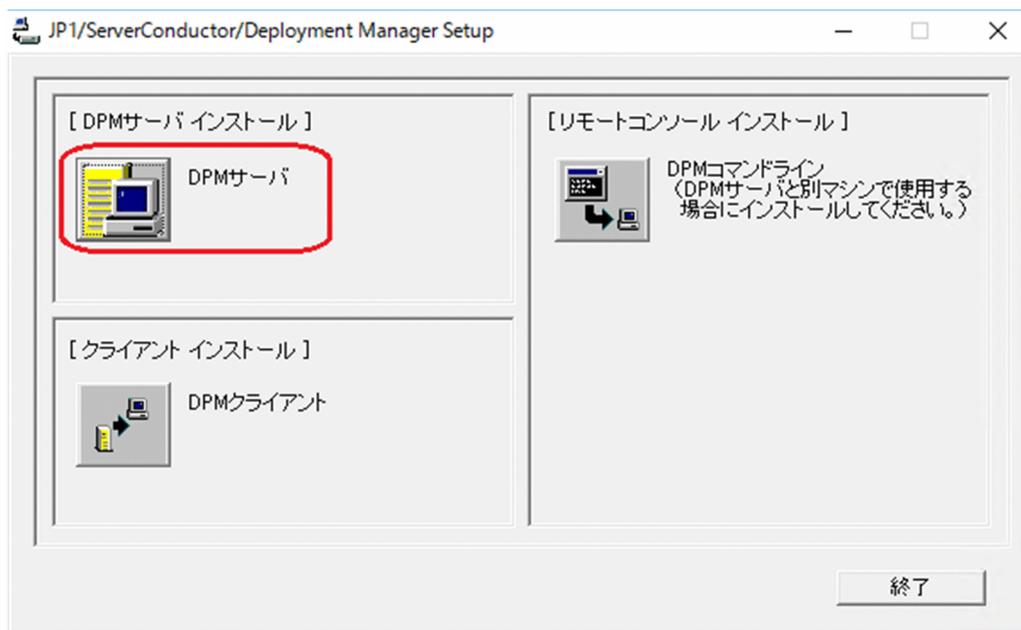
<インストール媒体>:¥DPM¥Launch.exe

4) 「JP1/ServerConductor/Deployment Manager Setup」画面が起動しますので、本章に記載の手順を参照して、DPM サーバをアップグレードインストールしてください。

5) 以下のコマンドを実行してください。

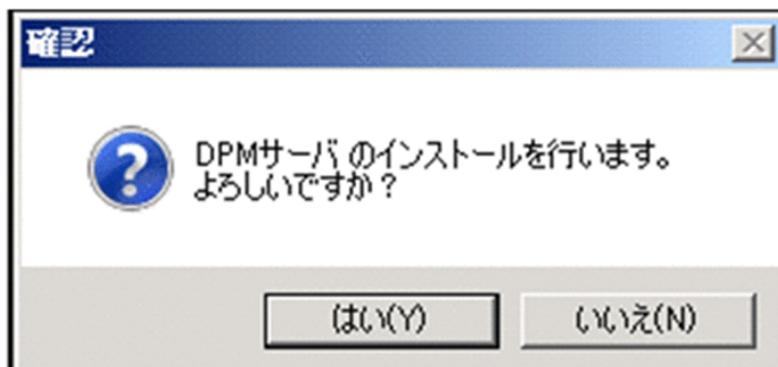
```
change user /execute
```

- 1.DPM サーバをインストールしているマシンにローカルのビルトイン Administrator アカウントでログインします。
- 2.「SQL Server Browser」サービスのスタートアップの種類が「無効」に設定されている場合は、「無効」以外に設定してください（「SQL Server Browser」サービスが存在しない場合は、本手順は不要です）。
- 3.インストール媒体を DVD ドライブにセットします。「JP1/ServerConductor/Deployment Manager Setup」画面が起動しますので、「DPM サーバ」を選択します。



4.確認画面が表示されますので、「はい」 ボタンをクリックします。

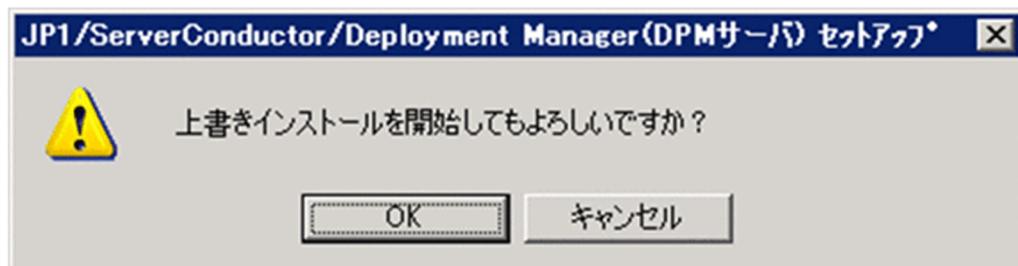
「いいえ」 ボタンをクリックすると、「JP1/ServerConductor/Deployment Manager Setup」画面に戻ります。



5.「セットアップタイプ」画面が表示されますので、「上書きインストール」を選択して、「次へ」 ボタンをクリックします。



6. 確認画面が表示されますので、「OK」ボタンをクリックします。



7. 「セットアップタイプ」画面が表示されますので、お使いの環境に合わせチェック対象を変更し、「次へ」ボタンをクリックします。



- 「JP1/ServerConductor/Deployment Manager でパスを制御する」

3 アップグレードインストールを実行する

管理対象マシンに日立ディスクアレイシステムを接続しており、バックアップ/リストア/ディスク構成チェック/ディスク複製 OS インストール時のパス制御を DPM で実施する場合は、こちらをチェックします。

DPM でパス制御を実施する場合は、ファイバチャネルボード BIOS の設定が必要です。設定方法については、マニュアル「運用ガイド 付録 B 管理対象マシンが日立ディスクアレイシステムおよび BR20/BR1200 の冗長化環境の運用」を参照してください。

- 「JP1/ServerConductor/Deployment Manager 以外でパスを制御する」

上記に該当しない場合、例えば、専用のソフトウェアでパスを制御する場合や、日立ディスクアレイシステムを使用していないためパスを制御する必要がない場合は、こちらをチェックします。

アップグレード後に制御方法を変更する場合は、再度 DPM サーバを上書きインストールしてください。

注：

現在のパス制御方法の設定状況については、次の手順で確認できます。

- 1) Administrator グループのユーザでコマンドプロンプトを起動します。

なお、Administrator 以外のユーザの場合は、管理者権限で実行してください。

- 2) 次のファイルを、任意の場所にコピーします。

<インストール媒体>:\TOOLS\DpmPathCtrl\DpmPathCtrl.bat

※DPM09-70 以降の DPM サーバがインストールされている場合は、「DPM インストールフォルダ」直下にも同じファイルが格納されています。

- 3) コマンドプロンプトを起動し、2)でコピーしたフォルダに移動します。

- 4) DpmPathCtrl.bat を実行します。

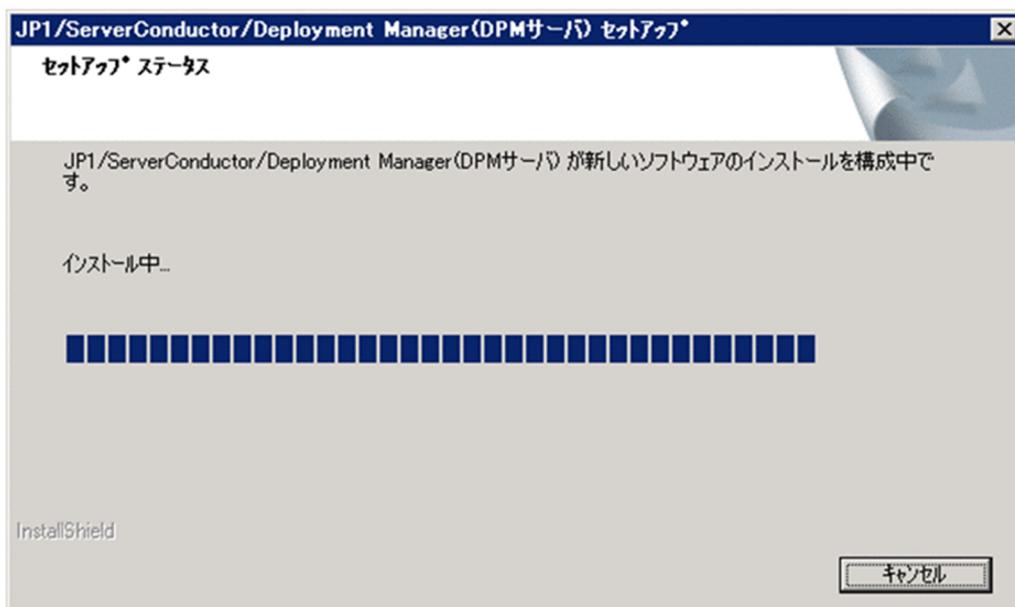
- 5) 「日立ディスクアレイシステムパス制御の現在の設定：」の後に、現在の設定状況が出力されません。

例) JP1/ServerConductor/Deployment Manager でパスを制御する

例) JP1/ServerConductor/Deployment Manager 以外でパスを制御する

- 6) 「Enter」を押します。

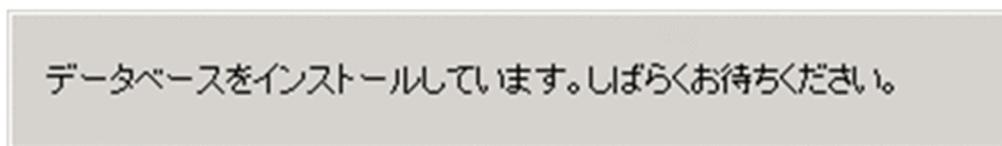
8. 「セットアップステータス」画面が表示されインストールが開始されます。



9. 以下の画面が表示されますので、「OK」ボタンをクリックします。

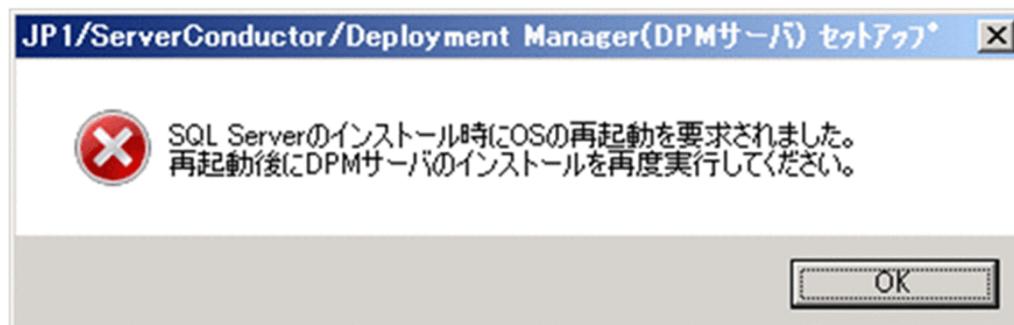


10. 以下の画面が表示され、インストールが開始されますので、しばらくお待ちください。



注：

次の画面が表示する場合、「OK」ボタンをクリックすると、DPMサーバのインストールを中断します。OSを再起動した後に再度DPMサーバのインストールを行ってください。



1. IISの確認画面が表示されますので、「はい」ボタンをクリックします。

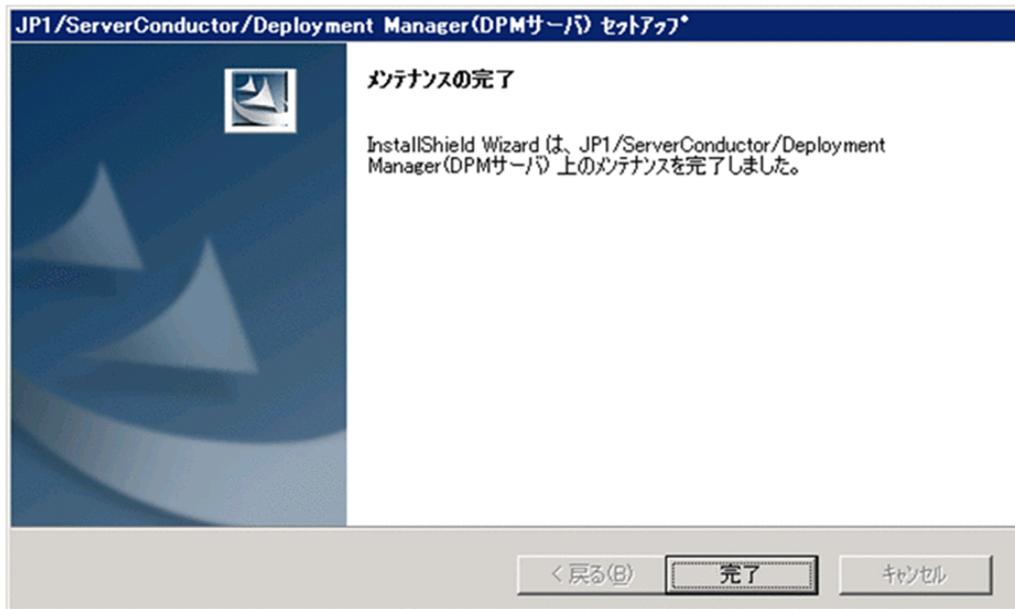


注：

「いいえ」ボタンをクリックすると、IISに対するアクセスに失敗し「DeploymentManager ログイン」画面が表示できなくなる可能性があります。IISに対するアクセスに失敗した場合は、DPMサーバを再度インストールしてください。

2. 「メンテナンスの完了」画面が表示されますので、「完了」ボタンをクリックします。

3 アップグレードインストールを実行する



3.「SQL Server Browser」サービスのスタートアップの種類を 1.で設定されていた値へ戻してください (1.で「SQL Server Browser」サービスのスタートアップの種類を変更していない場合は、本手順は不要です)。

4.DPM09-54 より前のバージョンからアップグレードインストールした場合は、Windows ファイアウォールの次の設定の中で、存在する設定を削除してください。09-54 以降からアップグレードインストールした場合は不要です。

- DeploymentManager(TCP:111)
- DeploymentManager(TCP:2049)
- DeploymentManager(TCP:56011)
- DeploymentManager(TCP:56020)
- DeploymentManager(TCP:56022)
- DeploymentManager(TCP:56023)
- DeploymentManager(TCP:56024)
- DeploymentManager(TCP:56028)
- DeploymentManager(TCP:56030)
- DeploymentManager(TCP:56050)
- DeploymentManager(TCP:56060)
- DeploymentManager(TCP:56070)
- DeploymentManager(TCP:8080)
- DeploymentManager(UDP:111)
- DeploymentManager(UDP:2049)
- DeploymentManager(UDP:4011)
- DeploymentManager(UDP:56040)
- DeploymentManager(UDP:67)
- DeploymentManager(UDP:69)

注：

- ・DPM 09-10~09-65 からアップグレードを行う場合、アップグレード後に、DPM09-70 以降のライセンスキーを登録した後で、既存のライセンスキーを削除してください。
ライセンスキーの登録手順は、「5.1 DPM 運用前の準備を行う」を参照してください。
ライセンスキーの削除手順は、マニュアル「リファレンスガイド 2.5.2 ライセンスキー削除」を参照してください。
- ・インストール中の画面表示は OS によって異なる場合があります。
- ・Windows Firewall サービス、または Windows Firewall/Internet Connection Sharing (ICS) サービスが起動している場合は、DPM サーバに必要なポート/プログラムが自動的に開放されます。
開放されるポート/プログラムについては、「付録 B ネットワークポートとプロトコル一覧」を参照してください。

以上で DPM サーバのアップグレードインストールは完了です。

3.3 DPM クライアントをアップグレードインストールする

DPM クライアントのアップグレードインストールについて説明します。

DPM クライアントがインストールされているマシンに対して、アップグレードインストールを行います。

アップグレード方法としては、DPM サーバをアップグレードすれば DPM クライアントも自動的にアップグレードする「自動アップグレード」をサポートしています。詳細については、「3.3.1 DPM クライアントを自動アップグレードインストールする」を参照してください。

「自動アップグレード」以外の方法としては、「シナリオによる DPM クライアントのアップグレード」、「インストール媒体による DPM クライアントのアップグレード」があります。手順については、「3.3.2 DPM クライアントを手動アップグレードインストールする」を参照してください。

注：

DPM 09-10~DPM09-57-/A までの DPM クライアント (Windows (x86/x64)) を本バージョンにアップグレードインストールした場合、DPM クライアントは、システムフォルダ (%windir%\System32 または %windir%\SysWOW64) 配下にインストールされているため、「プログラムと機能」に表示されるサイズは、実際の DPM クライアントのサイズより大きく表示されます。

3.3.1 DPM クライアントを自動アップグレードインストールする

- DPM クライアントの自動アップグレードとは

DPM クライアントがインストールされている状態で、DPM サーバをアップグレードすれば DPM クライアントも自動的にアップグレードを行う機能です。DPM クライアントがインストールされている場合は、管理対象マシン 1 台ずつに対して、本バージョンの DPM クライアントを再インストールすることは、非常に手間のかかる作業になるため、便利な機能です。

自動アップグレードは、DPM クライアントをインストールしたマシンが起動するタイミングで実行されます。マシンの起動時に DPM クライアントが開始され、DPM サーバと通信を行います。この際、DPM クライアントが以下のバージョンーリビジョンの場合、自動アップグレードが実行されます。

表 3-1 自動アップグレード可能な DPM クライアントバージョン

	DPM クライアントのバージョン									
	08-50 ~ 08-65	08-70 ~ 08-80	08-80-/A ~09-03	09-10 ~ 09-53	09-54 ~ 09-57	09-58	09-59 ~ 09-60	09-61 ~ 09-62	09-63 ~ 09-64	09-65
DPM クライ アント 自動 アップ グレー ド	—	○	—	○	○	○	○	○	○	○

(凡例)

- ：サポート
- ：未サポート

DPM09-54 より前のバージョンからアップグレードインストールした場合は、管理対象マシンで Windows ファイアウォールの次の設定を削除してください。09-54 以降からアップグレードインストールした場合は不要です。

- DeploymentManager(TCP:56000)
- DeploymentManager(TCP:56010)
- DeploymentManager(TCP:56025)
- DeploymentManager(UDP:56001)
- DPM クライアントのアップグレードを行わない場合は、サービスパック/HotFix/Linux パッチファイルのインストールなどのシナリオが正常に動作できない場合があります。また、ポートを変更した場合、DPM09-54 より前の DPM クライアントは管理サーバ検索機能が無いため、通信ができずバックアップ/リストア/ディスク構成チェック/ディスク複製 OS インストール/シナリオ実行結果などの機能が正常に動作しません。DPM サーバと同じバージョン-リビジョンにアップグレードしてください。
- 次の環境では DPM09-54 より前の DPM クライアントの自動アップグレードは動作しません。シナリオによるアップグレードかインストール媒体を使用したアップグレードを行ってください。
 - DPM サーバの 09-54 以降を新規インストールした環境
 - DPM サーバを 09-54 以降にアップグレードした後に、ネットワークポートを変更した環境
- Web コンソールの「管理」ビュー→「DPM サーバ」→「詳細設定」→「全般」タブで、「DPM クライアントを自動アップグレードする」にチェックを入れている場合にだけ、DPM クライアントの自動アップグレードが実行されます。
- DPM クライアント自動アップグレードが実行されると、DPM は内部的に管理している「System_AgentUpgrade_Unicast」または「System_LinuxAgentUpgrade_Unicast」シナリオを自動的に割り当てます。そのため別のシナリオが事前に割り当てられていた場合にはそのシナリオは解除されます。
また自動アップグレード用のシナリオは実行後も割り当たったままの状態になりますので、解除されたシナリオがスケジュールを指定したシナリオなどで自動アップグレード後も必要な場合には再度シナリオ割り当てを行ってください。
なお自動アップグレード用のシナリオを手動で実行できません。
- Linux クライアントに DPM クライアントの自動アップグレードが実行された場合は、シナリオ開始から約 2 分間は別のシナリオを実行させないでください。
- DPM08-70~08-80 の DPM クライアントをインストールしている場合、DPM08-85 以降の DPM サーバ (DPM09-10 より前は管理サーバ for DPM) をインストールする前に、手動により管理対象マシンの DPM クライアントを DPM08-85 以降へ更新してください。
- 管理対象マシンの OS が Windows Server 2012 (Server Core) の場合、インストール済みの DPM クライアントが起動するたびに、自動アップグレードシナリオが実行されますが、DPM クライアントのアップグレードは実行されません。
そのため、管理対象マシンの OS に Windows Server 2012 (Server Core) を含む場合は、詳細設定で「DPM クライアントを自動アップグレードする」の設定を無効にすることを推奨します。設定方法については、マニュアル「リファレンスガイド 2.7.1 詳細設定 (1)「全般」タブ」を参照してください。
- 管理対象マシンの電源 OFF 状態からのシナリオ実行でマシンが起動された場合は、自動アップグレードは行われません。
- 自動アップグレードは、「シナリオ実行」として扱いますので、「シナリオ実行結果一覧」画面へ実行結果が出力されます。

3 アップグレードインストールを実行する

- 自動アップグレードは「シナリオ実行」として扱いますので、シナリオ中断は可能になりますが、実行時間が短いため、自動アップグレードの中断はできません。
- 管理対象マシンのファイアウォールサービスを自動起動に設定している場合、ファイアウォール機能の有効/無効に関わらず管理対象マシンが起動してからファイアウォールサービスが起動するまでの間、すべてのポートが閉じられます (DPM クライアントの自動アップグレードインストールに失敗します)。このような場合は、「3.3.2 DPM クライアントを手動アップグレードインストールする」を参照して、シナリオ配信によるアップグレードを行ってください。
自動アップグレード実行後の DPM クライアントのサービス再起動は数十秒後に行われます。その間にほかのシナリオを実行した場合は、シナリオ実行エラーになる場合があります。
- この手順は DPM クライアントを 09-70 以降へアップグレードする手順です。DPM クライアントがインストールされていない管理対象マシンに対し、新規にインストールできません。
- 自動アップグレード中は、「シナリオ実行一覧」画面を表示できません。
- DPM サーバのイベントログに以下のログが出力される場合があります。
depssvc: Agent Upgrade Error MAC : Sts = (MAC アドレス)
これは何らかの原因により、表示された管理対象マシンに対する DPM クライアントの自動アップグレードが失敗したことを意味しています。
このログが出力された場合は DPM クライアントの手動アップグレード用のシナリオを実行してください。
- DPM クライアントをインストールした管理対象マシンの再起動が困難な場合は、以下のサービスを再起動することで、自動アップグレードが実行されます。
 - DPM クライアント(Windows)
 - DeploymentManager Remote Update Service Client
 - DPM クライアント(Linux)
 - Red Hat Enterprise Linux 7 より前の場合
Depagt
 - Red Hat Enterprise Linux 7 の場合
depagt.service
- 下記のように表示されれば、DPM クライアントのアップグレードは、成功です。
 - Windows Server 2008 R2/Windows Server 2012/Windows Server 2016 の場合
「プログラムと機能」の「JP1/ServerConductor/Deployment Manager(DPM クライアント)」の「バージョン」(※1) が、DPM サーバのバージョンと同じ。
(プログラム一覧に「バージョン」が表示されていない場合は、プログラム一覧の列のタイトル部分を右クリック→「その他」を選択、「詳細表示の設定」画面で「バージョン」欄にチェックを入れることで、バージョンが表示します。)
(※1) 「VV.RRSS」(VV:バージョン, RR:リビジョン, SS:限定コード) と表示します。
(例) 09-70 の場合: 9.7000
09-03-/A の場合: 9.0301
08-90-/B の場合: 8.9002
 - Linux の場合
次のコマンドの実行結果に表示されるバージョンが DPM サーバのバージョンと同じ。
/usr/hitachi/dpm/agent/bin/depagtd _v
- 以下のサービスが起動している場合は、DPM クライアントに必要なポート/プログラムが自動的に開放されます。

(開放されるポート/プログラムについては、「付録 B.1 ネットワークポートとプロトコル一覧」を参照してください。)

- Windows Firewall/Internet Connection Sharing (ICS)
- Windows Firewall

3.3.2 DPM クライアントを手動アップグレードインストールする

(1) シナリオによる DPM クライアントのアップグレードインストール

シナリオによる DPM クライアントのアップグレードとは DPM クライアントの自動アップグレードとは別に、DPM クライアント (DPM09-10 より前のバージョンではクライアントサービス for DPM) をアップグレードするシナリオをあらかじめ登録しています。このシナリオを実行することで DPM クライアントをアップグレードすることができます。



※ System_AgentUpgrade_Multicast は、Windows (x86/x64) 用アップグレードシナリオです。
System_LinuxAgentUpgrade_Multicast は、Linux (x86/x64) 用アップグレードシナリオです。

注：

- 使用する環境にあわせて、シナリオ編集により、「パッケージ」タブ「配信条件設定」の「最大ターゲット数」、「最大待ち時間」を変更してお使いください。
また、上記以外の項目を変更すると、DPM クライアントのアップグレードが行われない場合があります。特に実行タイミングの指定は必ず「配信後すぐに実行」で行ってください。
- DPM クライアントのアップグレードは、アップグレードのシナリオが完了した後行われます。通常この処理には数十秒程度かかりますので、この間は別のシナリオを実行しないでください。
- 管理対象マシンの OS が Windows Server 2012 (Server Core) の場合、DPM クライアントのアップグレードシナリオを実行しても DPM クライアントはアップグレードされません。
- これらのシナリオは、デフォルトではマルチキャスト配信となっていますが、シナリオ編集により、「パッケージ」タブ「配信条件設定」で「ユニキャストでデータを送信する」を選択することで、ユニキャストでも配信できます。

(2) インストール媒体による DPM クライアントのアップグレード

- Windows (x86/x64) の場合
DPM クライアントのインストール媒体によるアップグレードインストール (Windows (x86/x64) 用) について説明します。

3 アップグレードインストールを実行する

1. DPM クライアントをインストールしているマシンにローカルのビルトイン Administrator アカウントでログオンします。
2. インストール媒体を DVD ドライブにセットします。
「JP1/ServerConductor/Deployment Manager Setup」画面が起動しますので、「DPM クライアント」を選択します。

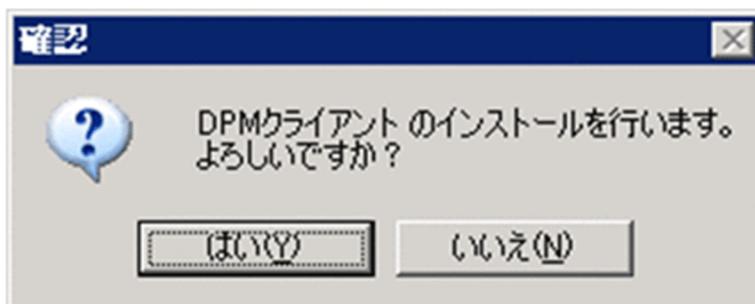


注：

Windows Server 2012 以降の OS で、最小サーバーインターフェイスとしている環境に DPM クライアントをインストールする場合は、以下のファイルを実行して、「JP1/ServerConductor/Deployment Manager Setup」画面を表示してください。

<製品媒体>:%Launch.exe

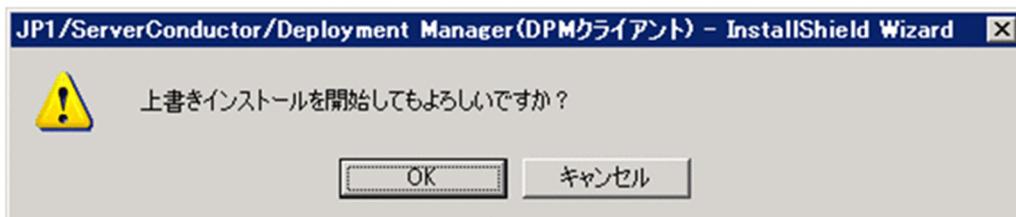
3. 「確認」画面が表示されますので、「はい」ボタンをクリックします。



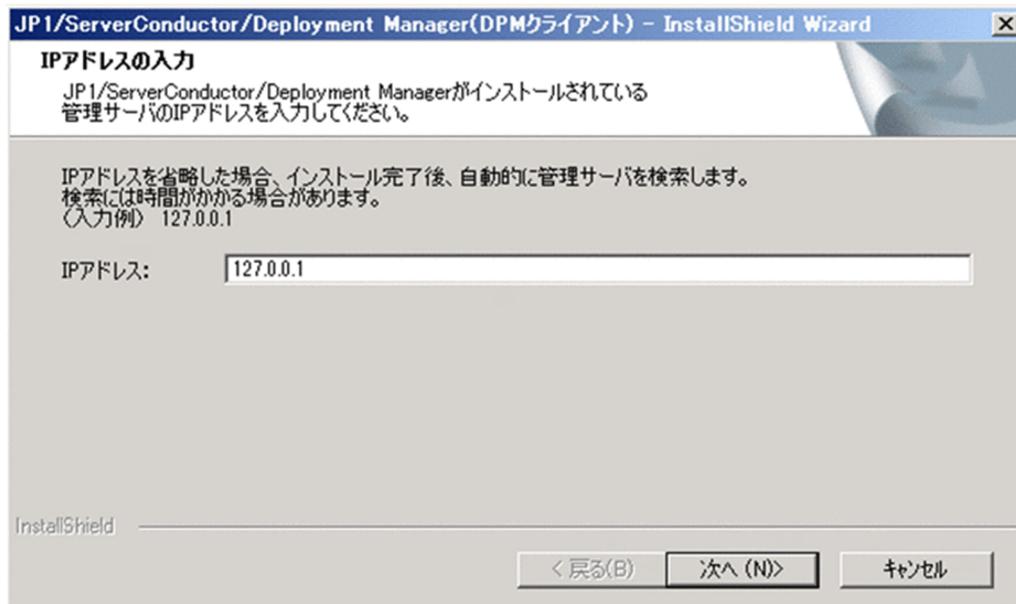
4. 「セットアップタイプ」画面が表示されますので「上書きインストール」を選択して、「次へ」ボタンをクリックします。



5. 確認画面が表示されますので、「OK」ボタンをクリックします。



6. 「IP アドレスの入力」画面が表示されますので、DPM サーバがインストールされている管理サーバの IP アドレスを入力して「次へ」ボタンをクリックします。



3 アップグレードインストールを実行する

注：

- ・IPアドレスの省略も可能です。IPアドレスを省略した場合、インストール完了後に、自動的に管理サーバを検索します。ただし、検索には時間がかかる場合があります。

- ・DPM クライアントは、管理サーバのIPアドレスと、DPMサーバとDPMクライアントが使用するポートの情報を保持しており、DPMクライアントのサービス起動時に保持しているIPアドレス、ポートでDPMサーバに接続を試みます。接続できない場合は、管理サーバの検索を行いIPアドレス、ポートの情報を取得します。

管理サーバの検索にはDHCPの通信シーケンスの一部を使用（DHCPサーバを使用する運用/使用しない運用のどちらの場合も）しており、DPMクライアントは管理サーバからのデータ受信にUDP:68ポートを使用します。DPMクライアントがUDP:68ポートでネットワークにバインドできない場合、管理サーバの検索に失敗します。

OS標準のDHCPクライアントもUDP:68ポートを使用しますが、評価の結果問題ないことを確認済みです。

- ・IPアドレスの省略により、管理サーバを検索する場合は次に注意してください。

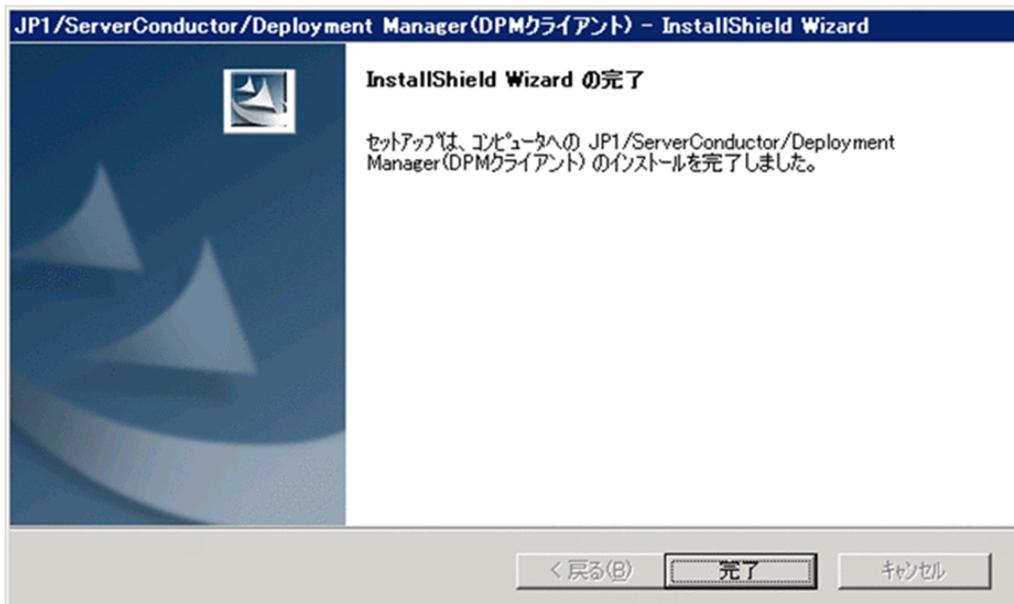
管理対象マシンが複数のネットワーク上に接続され、それぞれのネットワークにDPMの管理サーバが存在する環境で、管理サーバを検索した場合、最初に応答した管理サーバのIPアドレスを取得します。この場合は、意図した管理サーバに接続できない可能性があります。

- ・DPMクライアントの新規インストール時に、次のどちらかの環境では、管理サーバのIPアドレスを入力しても、DPMクライアントが想定するポート番号では、管理サーバに接続できないため、管理サーバの検索を行います。

- ・DPMサーバを09-54より前のバージョンからアップグレードインストールした環境

- ・DPMサーバ09-54以降をインストール後に、DPMが使用するポート番号を「付録B.1 ネットワークポートとプロトコル一覧」に記載の09-54以降のデフォルトポート以外に変更した環境

7. 上書きインストールが開始され、「InstallShield Wizardの完了」画面が表示されますので、「完了」ボタンをクリックします。



注：

以下のサービスが起動している場合は、DPMクライアントに必要なポート/プログラムが自動的に開放されます。（開放されるポート/プログラムについては、「付録B.1 ネットワークポートとプロトコル一覧」を参照してください。）

- ・ Windows Firewall/Internet Connection Sharing (ICS)
- ・ Windows Firewall

8. DPM09-54 より前のバージョンからアップグレードインストールした場合は、Windows ファイアウォールの次の設定を削除してください。09-54 以降からアップグレードインストールした場合は不要です。

- ・ DeploymentManager(TCP:56000)
- ・ DeploymentManager(TCP:56010)
- ・ DeploymentManager(TCP:56025)
- ・ DeploymentManager(UDP:56001)

注：

- ・ インストール中の画面表示は OS によって多少違いがあります。
- ・ 「プログラムと機能」にはアプリケーションがインストールされているフォルダの容量が表示されます。DPM クライアントはシステムフォルダ配下にインストールされるため実際の容量より大きく表示されます。
- ・ 管理サーバの IP アドレスの入力や、インストール中のキー操作が一切不要なサイレントインストールを実行するには、「付録 C DPM クライアントのサイレントインストール」を参照してください。

以上で、DPM クライアント (x86/x64) のアップグレードインストールは完了です。

- Linux (x86/x64) の場合

インストール媒体による DPM クライアント (Linux) のアップグレードインストールは、新規インストールの場合と同じです。「2.2.2 Linux (x86/x64) 版をインストールする」を参照してください。なお、アップグレードインストールを行うと、インストール済み DPM クライアントはいったんアンインストールされます。

3.4 DPM コマンドラインをアップグレードインストールする

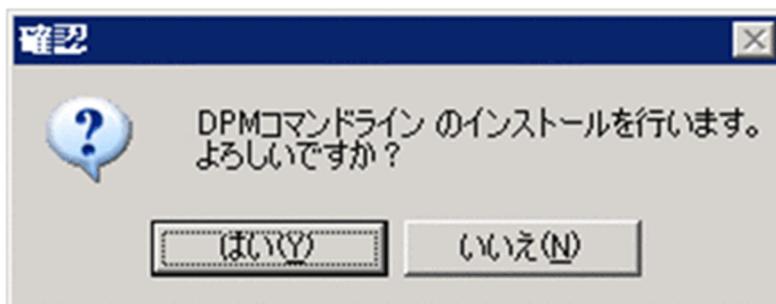
DPM コマンドラインのアップグレードインストールについて説明します。

DPM コマンドライン (DPM09-10 より前のバージョンではコマンドライン for DPM) がインストールされているマシンに対して、アップグレードインストールを行います。

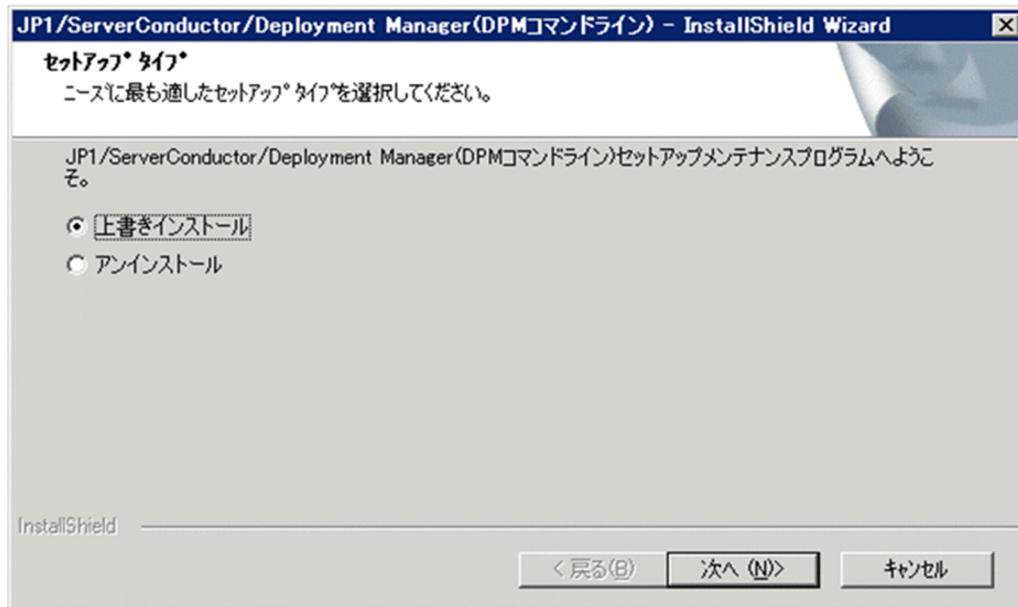
1. DPM コマンドラインをインストールしているマシンにローカルのビルトイン Administrator アカウントでログオンします。
2. インストール媒体を DVD ドライブにセットします。「JP1/ServerConductor/Deployment Manager Setup」画面が起動しますので、「DPM コマンドライン」を選択します。



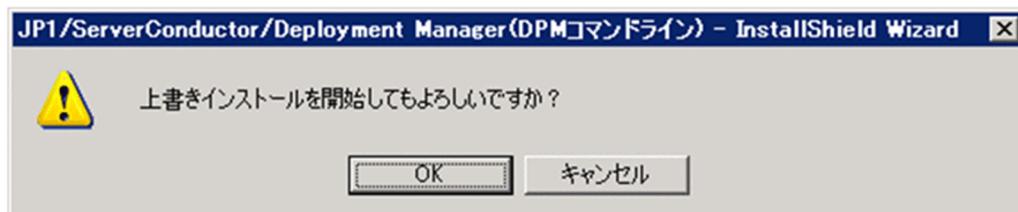
3. 「確認」画面が表示されますので、「はい」ボタンをクリックします。



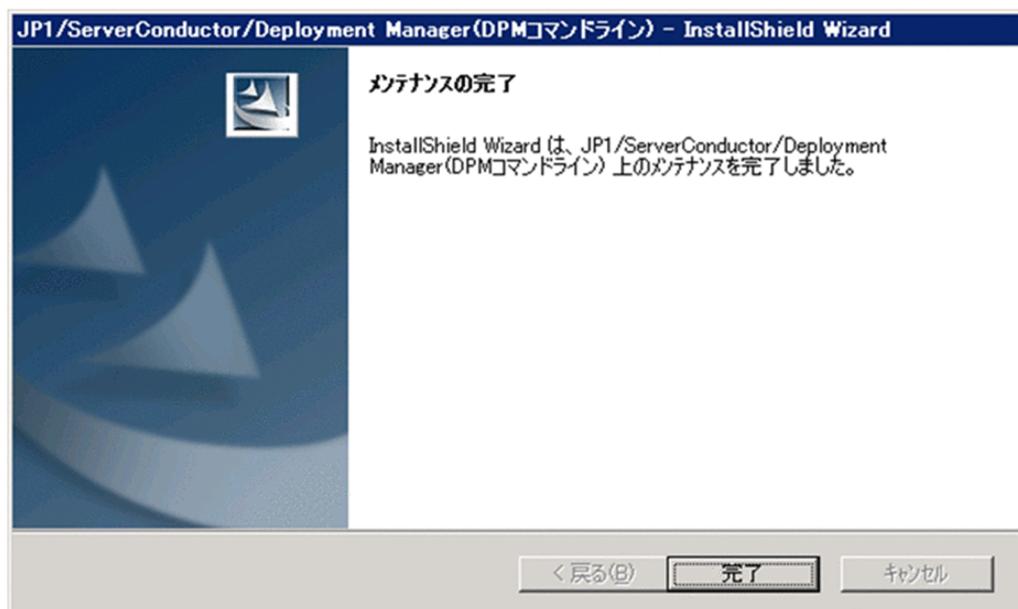
4. 「セットアップタイプ」画面が表示されますので、「上書きインストール」を選択して、「次へ」ボタンをクリックします。



5. 確認画面が表示されますので、「OK」ボタンをクリックします。



6. 上書きインストールが開始され、「メンテナンスの完了」画面が表示されますので、「完了」ボタンをクリックします。



以上で「DPM コマンドライン」のアップグレードインストールは完了です。

4

アンインストールを実行する

この章では、DPM のアンインストール手順について説明します。

4.1 アンインストールを始める前に

4.1.1 アンインストール実行前の注意

DPM の各機能に対するアンインストールについて説明します。

アンインストールを行う前に、DPM の操作（以下）がすべて完了/終了していることを確認してください。

- 管理対象マシンに対して実施している操作（シナリオ実行、自動更新、ファイル配信、ファイル削除、「ファイル/フォルダ詳細」画面の情報取得）が完了していること。
- Web コンソール、DPM の各種ツール類を終了していること。

なお、起動しているエクスプローラ、Web ブラウザ、イベントビューア、そのほかアプリケーションなどがある場合は、すべて終了させてください。

注：

本製品のアンインストール後、インストールフォルダ内にフォルダなどが削除されずに残る場合があります。この場合は、エクスプローラを使用して削除してください。

なお、本製品のインストールフォルダの既定値はマニュアル「導入・設計ガイド 付録 A サポート一覧」を参照してください。

4.2 DPM サーバをアンインストールする

DPM サーバをアンインストールする場合は、以下の手順で行ってください。

注：

DPM サーバよりも先に Microsoft SQL Server をアンインストールしないでください。

DPM サーバよりも先に Microsoft SQL Server をアンインストールすると、DPM サーバを再インストールするときに再インストールに失敗することがあります。

この場合は、下記フォルダが残っていないか確認し、残っている場合は削除してから、再度インストールを実行してください。

【対象フォルダ（デフォルト設定でインストール時）】

Microsoft SQL Server 2005 の場合

C:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL.x (x: 数値)

(フォルダは、SQL Server を利用しているアプリケーションごとに存在します。)

Microsoft SQL Server 2008 R2 の場合

C:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL10_50.DPMDBI

また、DPM 使用フォルダには、対象フォルダの下位に、次のファイルが存在する場合がありますので、一緒に削除願います。

- ・ %MSSQL%\Data\DPM_DATA.MDF
- ・ %MSSQL%\Data\DPM_LOG.LDF

Microsoft SQL Server 2012 の場合

C:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL11.DPMDBI

(「DPMDBI」の部分は、インストール時に指定したインスタンス名に置き換えてください。)

また、DPM 使用フォルダには、対象フォルダの下位に、次のファイルが存在する場合がありますので、一緒に削除願います。

- ・ %MSSQL%\Data\DPM_DATA.MDF
- ・ %MSSQL%\Data\DPM_LOG.LDF

Microsoft SQL Server 2014 の場合

C:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL12.DPMDBI

(「DPMDBI」の部分は、インストール時に指定したインスタンス名に置き換えてください。)

また、DPM 使用フォルダには、対象フォルダの下位に、次のファイルが存在する場合がありますので、一緒に削除願います。

- ・ %MSSQL%\Data\DPM_DATA.MDF
- ・ %MSSQL%\Data\DPM_LOG.LDF

Microsoft SQL Server 2016 の場合

C:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL13.DPMDBI

(「DPMDBI」の部分は、インストール時に指定したインスタンス名に置き換えてください。)

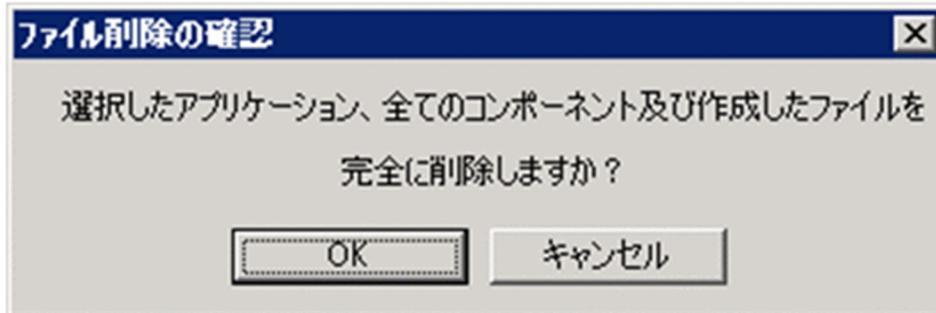
また、DPM 使用フォルダには、対象フォルダの下位に、次のファイルが存在する場合がありますので、一緒に削除願います。

- ・ %MSSQL%\Data\DPM_DATA.MDF
- ・ %MSSQL%\Data\DPM_LOG.LDF

1. DPM サーバをインストールしたマシンにローカルのビルトイン Administrator アカウントでログオンします。

4 アンインストールを実行する

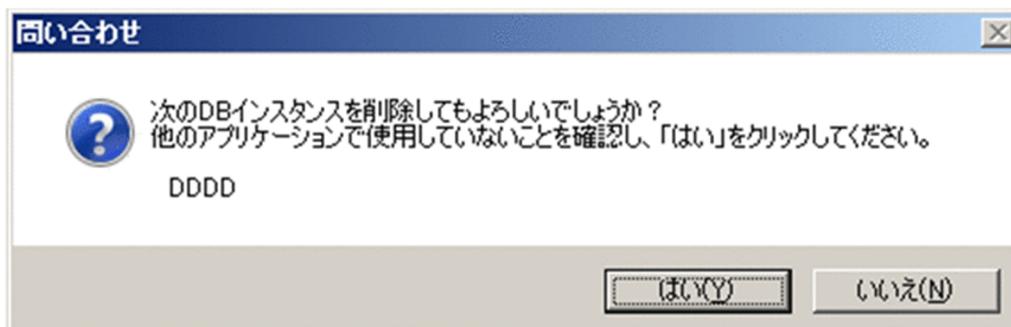
2. 「スタート」メニュー → 「すべてのプログラム」 → 「ServerConductor」 → 「DeploymentManager」 → 「DPM サーバのアンインストール」を選択します。
3. 「ファイル削除の確認」画面が表示されますので、「OK」ボタンをクリックします。



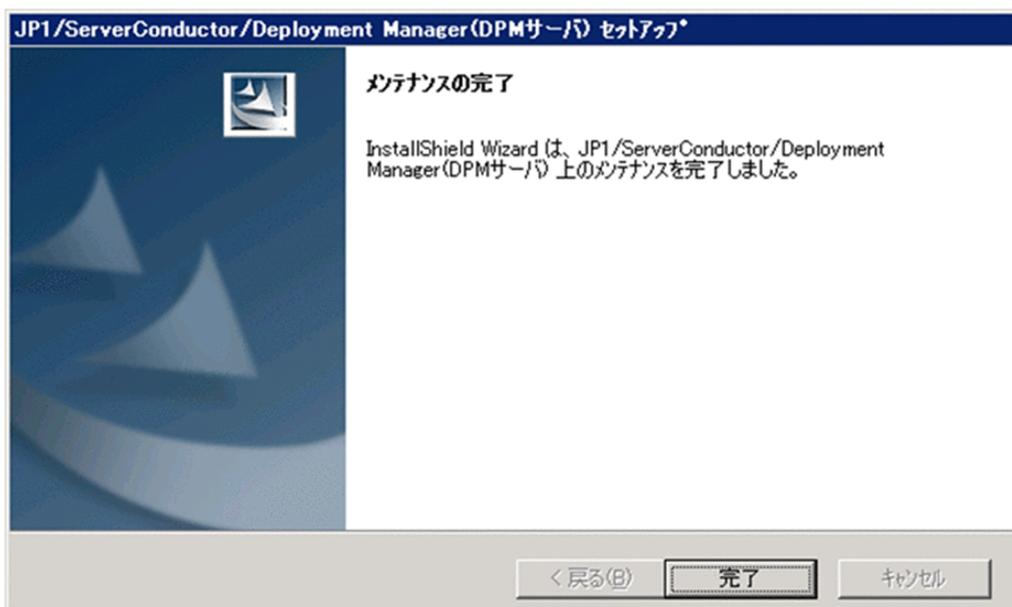
注：

DPM サーバ新規インストール時に、DB インスタンス名をデフォルト (DPMDBI) 以外に変更している場合は、次のダイアログが表示されます。

記載されている DB インスタンスがほかのアプリケーションで使用されていないことを確認し、「はい」をクリックしてください。



4. 「セットアップ ステータス」画面が表示され、アンインストールが開始されます。自動的に処理が進み「メンテナンスの完了」画面が表示されますので、「完了」ボタンをクリックしてください。



注：

DPM サーバをアンインストールする前に、データベースをアンインストールした場合、以下の画面が表示されますので、「OK」ボタンをクリックして、DPM サーバのアンインストールを進めてください。



ほかのアプリケーションで以下のコンポーネントを利用しない場合は、OSの「プログラムと機能」からアンインストールを行ってください。

- 本バージョンを新規インストールした場合
 - Microsoft SQL Server 2012 Native Client
- DPM 09-65 より前のバージョンからアップグレードインストールした場合
 - Microsoft SQL Server 2012 Native Client
- DPM09-55 より前のバージョンからアップグレードインストールした場合
 - Microsoft SQL Server 2008 R2 Native Client

4.3 DPM クライアントをアンインストールする

DPM クライアントのアンインストールについて説明します。

4.3.1 Windows (x86/x64) 版をアンインストールする

DPM クライアント (Windows (x86/x64)) のアンインストールを行うには、「プログラムと機能」から行う方法とコマンドプロンプトから行う方法があります。

注：

- 次のどちらかの場合は、「[プログラムと機能] からアンインストールする」を参照して、アンインストールを行ってください。それ以外の場合は、「コマンドプロンプトからアンインストールする」を参照して、アンインストールを行ってください。
 - ・「プログラムと機能」画面に「JP1/ServerConductor/Deployment Manager (DPM クライアント)」が表示されている場合
 - ・Windows Server 2012 以降の OS で、Server Core、または最小サーバーインターフェイスとしている場合
- DPM クライアントのインストール直後や、サービス起動直後にアンインストールを実行しないでください。管理サーバ検索処理が実行中の場合、正しくアンインストールされない可能性があります。

(1) 「プログラムと機能」からアンインストールする

- 1.DPM クライアントをインストールしたマシンにローカルのビルトイン Administrator アカウントでログオンします。
- 2.「スタート」メニュー→「コントロールパネル」→「プログラムと機能」→「JP1/ServerConductor/DeploymentManager/ Manager (DPM クライアント)」を選択して、「アンインストール」ボタンをクリックします。

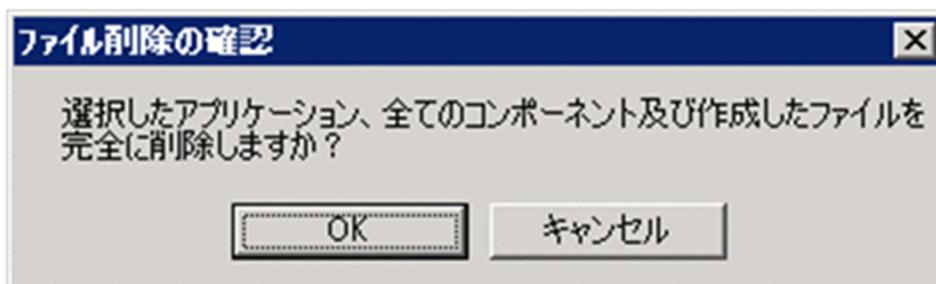
注：

Windows Server 2012 以降の OS で、最小サーバーインターフェイスとしている場合は、「プログラムと機能」は表示されませんので、コマンドラインから以下のファイルを実行してください。

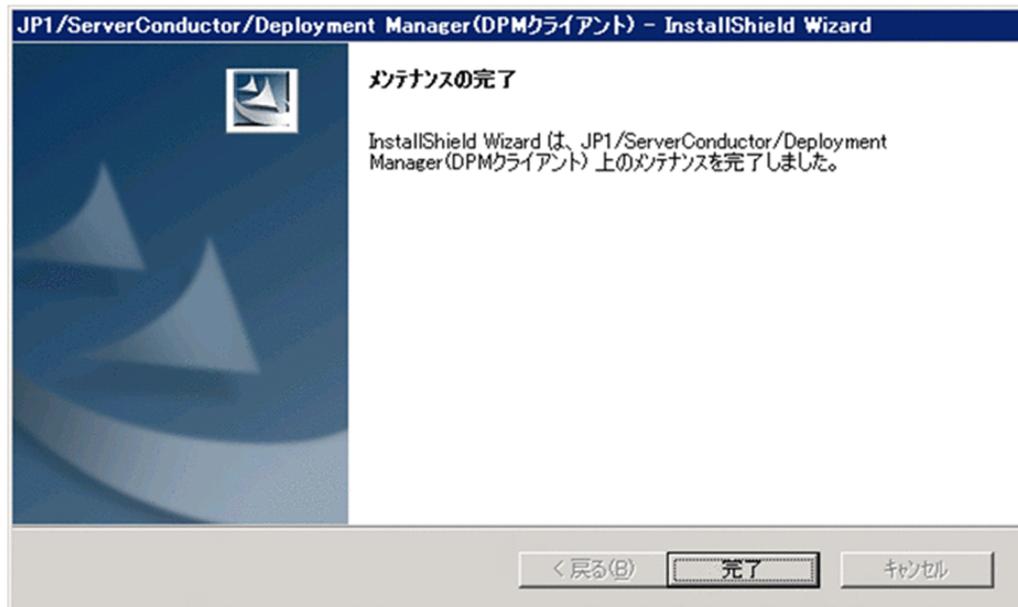
(以下のコマンドは表記の都合上複数行で記載していますが、1 行で入力してください。)

```
"%SystemDrive%\Program Files (x86)\InstallShield Installation Information\{50A6058D-C068-4196-9FAC-FA45255A9711}\setup.exe" -runfromtemp -l0x0011uninstall -removeonly
```

- 3.「ファイル削除の確認」画面が表示されますので、「OK」ボタンをクリックします。



- 4.「セットアップ ステータス」画面が表示され、アンインストールが開始されます。自動的に処理が進み「メンテナンスの完了」画面が表示されますので、「完了」ボタンをクリックしてください。



(2) コマンドプロンプトからアンインストールする

1. DPM クライアントをインストールしたマシンにローカルのビルトイン Administrator アカウントでログオンします。
2. コマンドプロンプトを起動し、DPM クライアントがインストールされているフォルダに移動します。

`cd /d <DPMクライアントインストールフォルダ>`

(例) 64bit OS で DPM クライアントのインストールフォルダがデフォルトの場合

```
cd /d %ProgramFiles(x86)%¥Hitachi¥
ServerConductor¥DeploymentManager_Client
```

注：

DPM09-58 より前のバージョンから本バージョンにアップグレードインストールした場合、DPM クライアントのインストールフォルダは、次のとおりです。

```
%windir%¥SysWOW64
```

3. コマンドプロンプトから、以下のコマンドを順に実行してリモートアップデートサービスをアンインストールします。

```
rupdsvc.exe -remove
del rupdsvc.exe
del clisvc.ini
```

4. コマンドプロンプトから、以下のコマンドを順に実行してエージェントサービスをアンインストールします。

```
depagent.exe -remove
del depagent.exe
del depagent.dll
del depinfo.dll
```

5. コマンドプロンプトから、以下のコマンドを実行して自動更新状態表示ツールをアンインストールします。

```
del DPMtray.exe
```

6.「スタート」メニューの「ServerConductor」フォルダに移動します。

Windows Server 2000/2003の場合：

```
cd "%allusersprofile%\スタート メニュー\プログラム\ServerConductor"
```

Windows Server 2008の場合：

```
cd "%allusersprofile%\Microsoft\Windows\Start Menu\Programs\ServerConductor"
```

Windows Server 2012の場合：

```
cd "%allusersprofile%\Microsoft\Windows\Start Menu\Programs\ServerConductor"
```

Windows Server 2016の場合：

```
cd "%allusersprofile%\Microsoft\Windows\Start Menu\Programs\ServerConductor"
```

7.コマンドプロンプトから、以下のコマンドを実行して自動更新状態表示ツールのショートカットを削除します。

```
rmdir /s /q DeploymentManager
```

注：

自動更新状態表示ツールのショートカットが作成されていない場合に上記コマンドを実行するとエラーが表示されますが、問題ありませんので、コマンドプロンプトを終了してください。

また、ほかのプログラムが登録されていない場合、続けて次のコマンドを実行し ServerConductor フォルダを削除してください。

```
cd ..
```

```
rmdir ServerConductor
```

(例) C ドライブに Windows Server 2003 がインストールされている場合

```
C:\Documents and Settings\All Users\スタート メニュー\プログラム\ServerConductor>cd ..  
C:\Documents and Settings\All Users\スタート メニュー\プログラム>rmdir ServerConductor
```

4.3.2 Linux (x86/x64) 版をアンインストールする

DPM クライアント (Linux (x86/x64) 版) のアンインストールについて説明します。

- 1.DPM クライアントをインストールしたマシンに root アカウントでログインします。
- 2.インストール媒体を DVD ドライブにセットします。
- 3.インストール媒体をマウントします。

```
# mount -t iso9660 -o exec <マウントするDVDドライブ>
```

注：

"-t iso9660"オプションを指定してください。

(例) mount -r -t iso9660 -o exec /dev/dvd /mnt/dvd

mount コマンドのそのほかの使用方法については、使用している OS のマニュアルを参照してください。

- 4.カレントディレクトリを移動します。

```
# cd /mnt/dvd/Linux/ia32/bin/agent
```

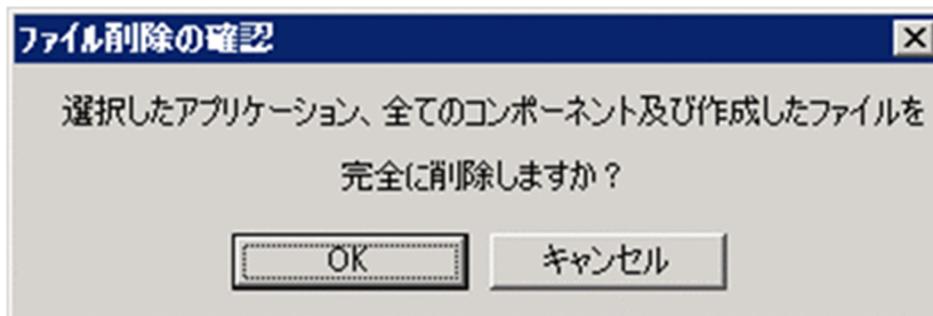
- 5.depuninst.sh を実行します。

```
# ./depuninst.sh
```

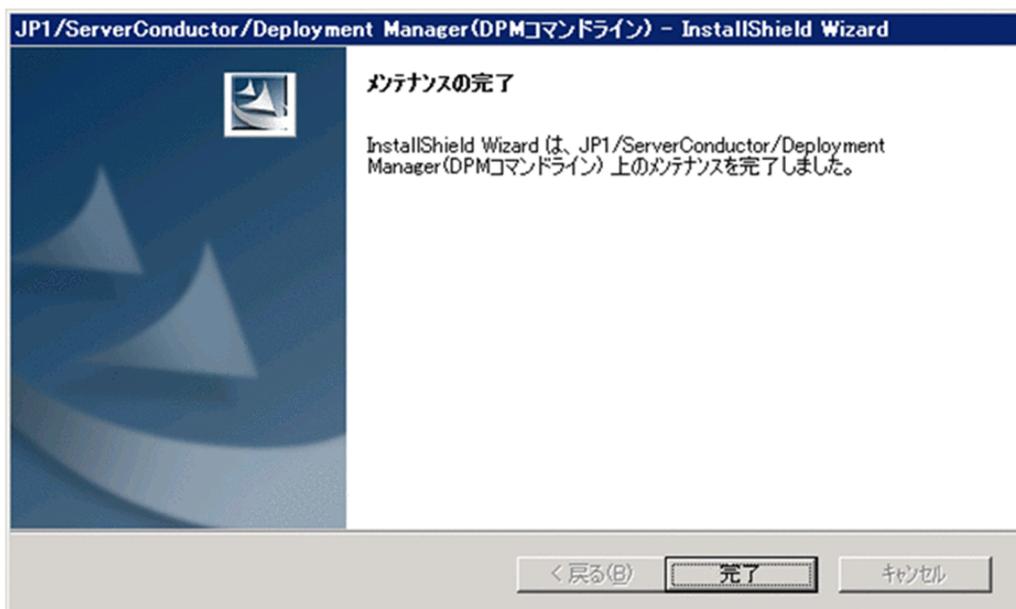
4.4 DPM コマンドラインをアンインストールする

DPM コマンドラインのアンインストールについて説明します。

1. DPM コマンドラインをインストールしたマシンにローカルのビルトイン Administrator アカウントでログオンします。
2. 「スタート」メニュー→「コントロールパネル」→「プログラムと機能」→「JP1/ServerConductor/DeploymentManager (DPM コマンドライン)」を選択して、「アンインストール」ボタンをクリックします。
3. 「ファイル削除の確認」画面が表示されますので、「OK」ボタンをクリックします。



4. 「セットアップ ステータス」画面が表示され、アンインストールが開始されます。自動的に処理が進み「メンテナンスの完了」画面が表示されますので、「完了」ボタンをクリックしてください。



5

DPM 運用前の準備を行う

この章では、DPM の初期設定について説明します。

5.1 DPM 運用前の準備を行う

DPM をはじめてお使いになる場合の設定について以下の流れに沿って説明します。作業を行う前によくお読みください。

5.1.1 Web コンソールを起動する

以下の手順で、Web コンソールを起動してください。

1. ブラウザを起動します。

注：

- ブラウザのキャッシュの設定を無効にしてください。
- Internet Explorer 9 の場合
Internet Explorer の「ツール」メニュー→「インターネット オプション」を選択して、「全般」タブの「閲覧の履歴」の「設定」ボタンをクリックします。
「インターネット一時ファイルと履歴の設定」画面が表示されますので、「保存しているページの新しいバージョンの確認」または「保存しているページの新しいバージョンがあるかどうかの確認」を「Web サイトを表示するたびに確認する」に設定して、「OK」ボタンをクリックします。
- Internet Explorer 10/11 の場合
Internet Explorer の「ツール」メニュー→「インターネット オプション」を選択して、「全般」タブの「閲覧の履歴」の「設定」ボタンをクリックします。
「インターネット一時ファイル」画面が表示されますので、「保存しているページの新しいバージョンがあるかどうかの確認」を「Web サイトを表示するたびに確認する」に設定して、「OK」ボタンをクリックします。
- ブラウザのセキュリティ設定を変更してください。
 1. Internet Explorer の「ツール」メニュー→「インターネットオプション」を選択して、「セキュリティ」タブの「信頼済みサイト」の「サイト」ボタンをクリックします。
 2. 「信頼済みサイト」画面が表示されますので、DPM サーバの URL (<http://ホスト/DPM/Login.aspx>) を入力して、「このゾーンのサイトにはすべてサーバーの確認 (https:) を必要とする」のチェックを外した後、「追加」ボタンをクリックし、「閉じる」ボタンをクリックします。
 3. 「セキュリティ」タブの「信頼済みサイト」の「レベルのカスタマイズ」ボタンをクリックします。
 4. 以下の項目について「有効にする」を選択後、「OK」ボタンをクリックしてください。
 - ・スクリプト→アクティブ スクリプト
 - ・ダウンロード→ファイルのダウンロード
 - ・ダウンロード→ファイルのダウンロード時に自動的にダイアログを表示 (Internet Explorer 9/10/11 は不要)
- ブラウザの Cookie の設定を変更してください。
Internet Explorer の「ツール」メニュー→「インターネットオプション」を選択して、「プライバシー」タブで「設定」のスライドを一番上「すべての Cookie をブロック」以外に設定してください。
- Internet Explorer 9/10/11 ですでに Web コンソールにログインしている場合は、同じウィンドウ内の別タブで、2 つ目の Web コンソールを起動しないでください。
2 つ目の Web コンソールにログインする場合は、次の方法で別のウィンドウを起動してから、Web コンソールにログインしてください。

Internet Explorer 9/10/11 の場合：

起動中の Internet Explorer で「ファイル」メニューから「新規セッション」を選択

- Internet Explorer 9/10/11 の「ページ」(または「表示」)メニュー→「拡大」で、100%以外を指定すると画面上の文字がずれる場合があります。
- Windows 8/Windows Server 2012/Windows Server 2016 の Internet Explorer 10/11 では次の設定をしてください。

Internet Explorer の「ツール」メニュー→「インターネット オプション」を選択して、「プログラム」タブの「リンクの開き方を選択」を「常にデスクトップ用 Internet Explorer で開く」に選択する。

2. ブラウザのアドレス欄に、以下のどれかの URL を入力し、Web コンソールを起動します。(すべて同じ Web ページが表示されます)

`http://ホスト/DPM/`

`http://ホスト/DPM/Login.aspx`

`http://ホスト/DPM/Default.aspx`

ホストには、Web コンソールから接続する管理サーバの DNS 名、または IP アドレスを入力します。大文字小文字の区別はありません。

注：

- Internet Explorer 11 の場合は、DPM の Web コンソールを表示した状態で、「ツール」メニュー→「互換性表示設定」をクリックし、DPM サーバのアドレスを追加してください。
- DPM09-10 で Web コンソールの URL を変更しています。
- DPN サーバのホスト名に Windows で推奨されていない文字列（半角英数字と、「-」(ハイフン)以外)が含まれる場合 Web ブラウザのアドレス欄には、IP アドレスを指定してください。DNS 名を指定すると Web コンソールの起動に失敗する可能性があります。
- Web サービス (IIS) で使用するポートを既定値 (80) から変更した場合は、変更したポート番号を含めた以下の URL を指定してください。

`http://ホスト:ポート番号/DPM/Login.aspx`

- Web コンソール起動時に「ウィンドウは、表示中の Web ページにより閉じられようとしています。このウィンドウを閉じますか？」のダイアログが表示される場合があります。その際は「はい」を選択してください。
- DPM サーバと同じサーバからアクセスする場合は、ホストは localhost が指定できます。

`http://localhost/DPM/`

3. DPM の Web コンソールが起動し、「DeploymentManager ログイン」画面が表示されます。

5.1.2 ログインする

DPM の機能を使用するには、ユーザに権限を設定する必要があります。

ユーザ名とパスワードを入力し、「ログイン」ボタンをクリックします（入力必須です）。

注：

- インストール直後に使用できる Administrator 権限を持つユーザのユーザ名とパスワードは以下になります。
 - ・ユーザ名「admin」
 - ・パスワード「admin」

ログイン後は、必ずパスワードを変更してください。ログインしているユーザのパスワードの変更方法については、「5.1.3 ログインユーザの設定を行う」を参照してください。本ユーザだけ登録されている状態で変更後のパスワードを忘れると、ログインできなくなるため、再インストールが必要になります。

以降の運用時には上記の"admin"ユーザ以外のユーザを追加し、使用してください。ユーザの追加・ユーザ権限については、マニュアル「リファレンスガイド 2.2 「ユーザ」アイコン」、およびマニュアル「リファレンスガイド 2.3 ユーザー一覧」を参照してください。

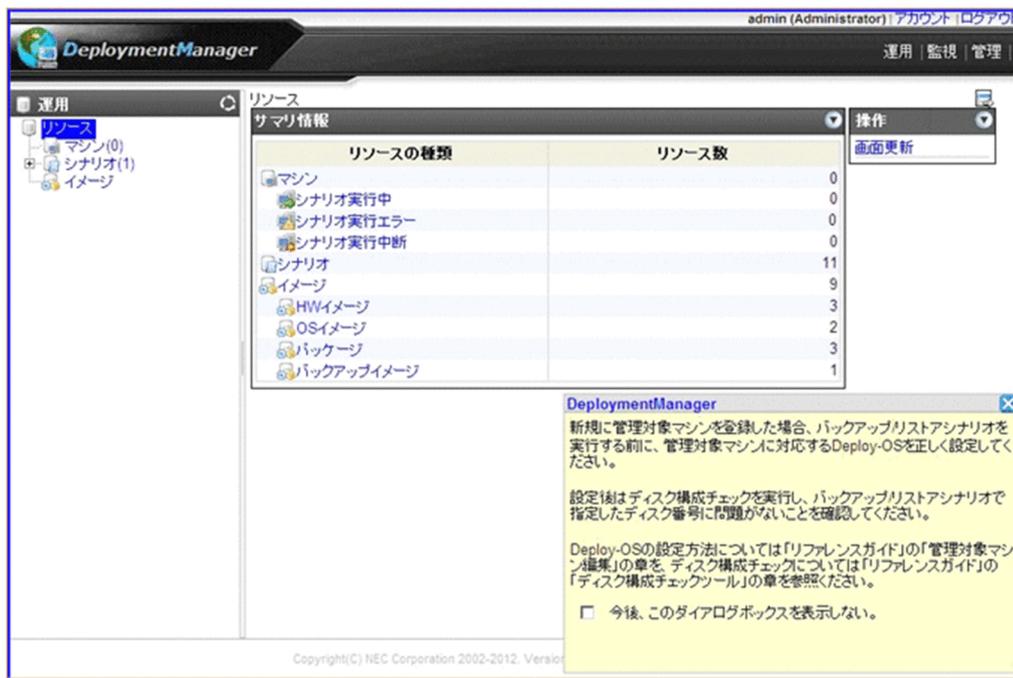
- Internet Explorer 9 以降を使用して Web コンソールを表示した場合、メニューにカーソルを合わせた際に、下線の表示位置がずれるなどの現象が発生する場合は、次のとおり Web サーバ (IIS) の設定を変更してください。なお、Web コンソールは閉じた状態で行ってください。

「スタート」メニュー→「管理ツール」→「インターネット インフォメーション サービス (IIS) マネージャ」を選択し、「インターネット インフォメーション サービス (IIS) マネージャ」で設定します。（なお、DPM サーバを上書きインストールすると、設定がデフォルトに戻る場合がありますので、再設定してください。）

- 画面左側の「サイト」→「Default Web Site」で「DPM」をクリックして、画面中央の「IIS」で「HTTP 応答ヘッダー」を選択して、画面右側の「操作」で「機能を開く」をクリック。
- 「HTTP 応答ヘッダー」画面が表示されたら、画面右側の「操作」で「追加...」をクリック。
- 「カスタム HTTP 応答ヘッダーの追加」画面で次の値を設定して、「OK」ボタンをクリック。
 - 名前：X-UA-Compatible
 - 値：IE=8
- Internet Explorer 10 以降を使用して Web コンソールを表示した場合、パスワードを入力すると右隅に「パスワード表示ボタン」が表示されます。

本機能は Internet Explorer が提供する機能であり、「パスワード表示ボタン」をクリックしている間は、入力中のパスワードが表示されるため、入力間違いがないか確認することができます。

Web コンソール上に「お知らせダイアログ」が表示されますので、内容を確認してください。



注：

Web コンソールにログインした状態で、Web サーバ (IIS) へ一定時間アクセスしないとタイムアウトになる場合があります。タイムアウトが発生した場合は、次に Web サーバ (IIS) へアクセスしたタイミングでログイン画面に戻りますので、再度ログインしてください。

タイムアウトはデフォルト 20 分です。タイムアウト時間を変更する場合は、次のとおり Web サーバ (IIS) の設定値を変更してください。

Web コンソールのタイムアウト時間には、以下の四つの項目があります。タイムアウト時間は、これらすべての設定の内、最少の設定値が使われます。

1. セッションのタイムアウト時間 (デフォルトは 20 分)
2. フォーム認証のタイムアウト時間 (デフォルトは 30 分)
3. アプリケーションプールのアイドルタイムアウト時間 (デフォルトは 20 分)
4. ワーカープロセスのリサイクル時間 (デフォルトは 1740 分)

各項目の変更手順は以下のとおりです。

Web コンソールを閉じた状態で行ってください。

「スタート」メニュー→「管理ツール」→「インターネット インフォメーション サービス (IIS) マネージャ」を選択し、「インターネット インフォメーション サービス (IIS) マネージャ」で設定します。

(変更後、「アプリケーションプール」と「既定の Web サイト」/「Default Web Site」は双方とも再起動する必要があります。)

(DPM サーバを上書きインストールすると、設定がデフォルトに戻る場合がありますので、再設定してください。)

- IIS8.0 (Windows Server 2012) /8.5 (Windows Server 2012 R2) /10.0 (Windows Server 2016)

1. セッションのタイムアウト時間

- (1) 画面左側の「サイト」→「Default Web Site」で「DPM」をクリックして、画面中央の「ASP.NET」で「セッション状態」を選択して、画面右側の「操作」で「機能を開く」をクリック。
- (2) 「セッション状態」画面の「Cookie の設定」-「タイムアウト(分)(O):」でタイムアウト値を指定して、画面右側の「操作」で「適用」をクリック。

2. フォーム認証のタイムアウト時間

- (1) 画面左側の「サイト」→「Default Web Site」で「DPM」をクリックして、画面中央の「IIS」で「認証」を選択して、画面右側の「操作」で「機能を開く」をクリック。
- (2) 「認証」画面で「フォーム認証」を選択して、画面右側の「操作」で「編集...」をクリック。
- (3) 「フォーム認証設定の編集」画面の「認証 Cookie のタイムアウト(分)(A)」でタイムアウト値を指定して、「OK」ボタンをクリック。

3. アプリケーションプールのアイドルタイムアウト時間

- (1) 画面左側の「アプリケーション プール」をクリックして、画面中央の「アプリケーション プール」で「ASP.NET v4.0 DeploymentManagerPool」を選択。
- (2) 画面右側の「アプリケーション プールの編集」で「詳細設定...」をクリック。
- (3) 「詳細設定」画面の「プロセス モデル」-「アイドル状態のタイムアウト(分)」で時間を指定して、「OK」ボタンをクリック。

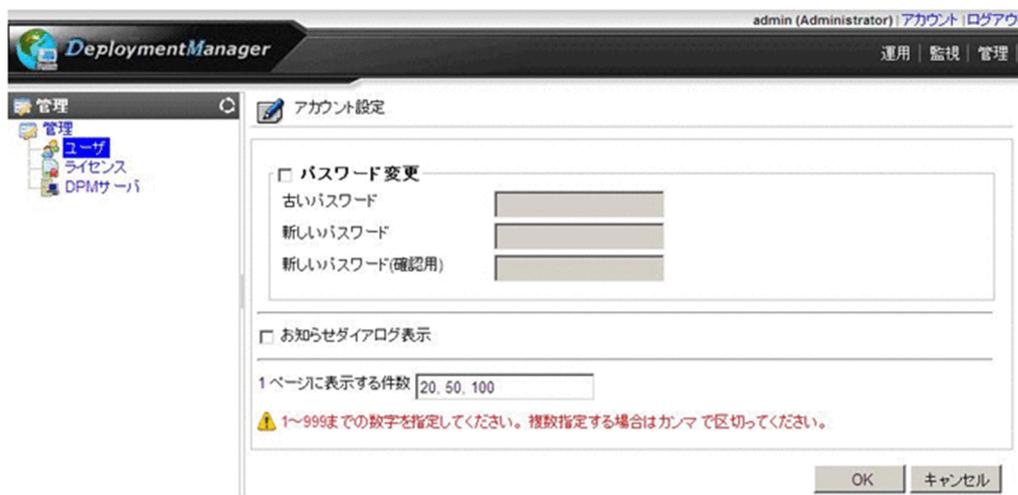
4. ワーカープロセスのリサイクル時間

- (1) 画面左側の「アプリケーション プール」をクリックして、画面中央の「アプリケーション プール」で「ASP.NET v4.0 DeploymentManagerPool」を選択。
- (2) 画面右側の「アプリケーション プールの編集」で「詳細設定...」をクリック。
- (3) 「詳細設定」画面の「リサイクル」-「定期的な間隔(分)」で時間を指定して、「OK」ボタンをクリック。

5.1.3 ログインユーザの設定を行う

ログインしているユーザについて、パスワードの変更、お知らせダイアログの表示/非表示の切り替え、一覧画面の1ページに表示する件数をアカウント設定で設定できます。設定内容の詳細については、マニュアル「リファレンスガイド 1.1.2 アカウント」を参照してください

1. Web コンソール上でタイトルバーの「アカウント」をクリックすると、「アカウント設定」画面が表示されます。



2. パスワードを変更する場合は、「パスワード変更」チェックボックスにチェックを入れ、パスワードを入力します。
3. ログイン時に表示される「お知らせダイアログ」を表示したくない場合には、「お知らせダイアログ表示」チェックボックスを外します。
4. 一覧画面の 1 ページに表示する件数を設定します。
メインウィンドウに表示される「グループ一覧」画面のような一覧画面で、画面に表示する件数を変更できますが、ここで設定する値を一覧画面のコンボボックスより選択することができます。例えば、「20,50,100」（既定値）を設定している場合にはコンボボックスよりこれらの値を選択できます。画面起動時には、表示件数は先頭の設定である 20 件になります。
5. 「OK」ボタンをクリックします。

5.1.4 ライセンスキーを登録する

注：

ライセンスの追加と削除は、Administrator 権限を持つユーザだけ可能です。

DPM をお使いになる前に、ライセンスキーの登録が必要です。

以下の手順でライセンスキーの登録を行います。

注：

- ライセンス数は、DPM から同時にシナリオ実行する管理対象マシンの台数ではなく、DPM が導入運用/管理するすべての管理対象マシンの台数となります。
- 購入したライセンスの数まで管理対象マシンを登録できます。
- ライセンスについては、マニュアル「導入・設計ガイド 2.3.1 製品の構成およびライセンス」を参照してください。
- ライセンスキーを登録していない場合でも、試用期間として 30 日間は管理対象マシンを 10 台まで登録できます。
なお、ライセンスキーを登録しないまま 30 日を経過すると、DPM が使用できなくなります。

1. 管理対象マシン総台数（全マシングループに所属する管理対象マシンの合計数）以上のライセンスを登録する。
2. 管理対象マシン総台数を、購入したライセンス数以下の台数にまで削減した後、ライセンスを登録する。

管理対象マシン総台数に満たないライセンス数を登録すると、DPM が使用できなくなります。この場合、管理対象マシン総台数分までライセンスを追加登録してください。

1. Web コンソール上でタイトルバーの「管理」をクリックし、「管理」ビューに切り替えます。
2. ツリービューから「ライセンス」アイコンをクリックすると、「ライセンス情報」グループボックスと、「登録ライセンス一覧」グループボックスが表示されます。



3. 「設定」メニューから「ライセンスキー追加」をクリックすると、「ライセンスキー追加」画面が表示されます。
4. 「ライセンスキー追加」画面でライセンスキーを入力して「OK」ボタンをクリックすると、入力したライセンスキー情報が登録されます。ライセンスキーを複数登録する場合は、3.~4.までの処理をライセンスキーの数だけ繰り返し行ってください。

注：

ライセンスは、大文字/小文字を正しく入力してください。

付録

付録 A サービスおよびプロセス一覧

付録 A.1 サービスおよびプロセス一覧

DPM のサービス、およびプロセスは、次のとおりです。

注：

次の表で「スタートアップの種類」に「自動」と記載しているものは、常駐サービスとなります。

- DPM サーバ

サービス名	表示名	スタートアップの種類	プロセス名※ 1	プロセス数	機能
APIServ	DeploymentManager API Service	自動	apiserv.exe	1	シナリオ実行/各種項目の設定
	(子プロセス)	-	mkParams.exe	1以上	Windows のディスク複製用情報ファイルを作成するツール
			magicsend.exe	1	リモート電源 ON の実行
			ipconfig.exe	1以上	ネットワーク設定
			nbtstat.exe	1以上	ネットワーク設定
bkressvc	DeploymentManager Backup/Restore Management	自動	bkressvc.exe	1	バックアップ/リストアの実行
depssvc	DeploymentManager Get Client Information	自動	depssvc.exe	1	管理対象マシンからの OS/SP/パッチ情報を受信
PxeSvc	DeploymentManager PXE Management	自動	pxesvc.exe	1	ネットワーク (PXE) ブートの制御
	(子プロセス)	-	ipconfig.exe	1以上	ネットワーク設定
			nbtstat.exe	1以上	ネットワーク設定

サービス名	表示名	スタートアップの種類	プロセス名※ 1	プロセス数	機能
PxeMftftp	DeploymentManager PXE Mftftp	自動	pxemtftp.exe	1	tftp サーバ機能
rupdssvc	DeploymentManager Remote Update Service	自動	rupdssvc.exe	1	リモートアップデートの実行
	(子プロセス)	—	zip.exe	1	ファイル圧縮コマンド
			unzip.exe	1	ファイル解凍コマンド
schwatch	DeploymentManager Schedule Management	自動	schwatch.exe	1	スケジュール管理
	(子プロセス)	—	magicsend.exe	1	リモート電源ONの実行
			ipconfig.exe	1以上	ネットワーク設定
			nbtstat.exe	1以上	ネットワーク設定
ftsvc	DeploymentManager Transfer Management	自動	ftsvc.exe	1	ファイル転送サービス
	(子プロセス)	—	CHKOS32.exe	1以上	OS 種別取得ツール
MSSQL\$インスタンス名	SQL Server (インスタンス名)	自動	sqlservr.exe ※2	1	SQL データベース (DPM 用)
SQLAgent\$インスタンス名	SQL Server エージェント (インスタンス名)	無効	SQLAGENT.EXE※2	1	SQL エージェント (DPM 用)

※1

インストールフォルダのデフォルトは、「C:\Program Files (x86)\Hitachi\ServerConductor\DeploymentManager」です。

※2

インストールフォルダのデフォルトは、次のとおりです。

- Microsoft SQL Server 2014 :
[C:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL12.インスタンス名\MSSQL\Binn]
- Microsoft SQL Server 2012 :
[C:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL11.インスタンス名\MSSQL\Binn]
- Microsoft SQL Server 2008 R2 :
[C:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL10_50.DPMDBI\MSSQL\Binn]

- Microsoft SQL Server 2005 :
「C:¥Program Files¥Microsoft SQL Server¥MSSQL.x¥MSSQL¥Binn」

• イメージビルダ

サービス名	表示名	スタートアップの種類	プロセス名※1	プロセス数	機能
なし	なし	—	DIBuilde.exe	1	イメージビルダ
	(子プロセス)	—	DIBPkgMake.exe	1	パッケージ作成用ツール
			DIBPkgDel.exe	1	パッケージ削除用ツール
			mkParams.exe	1	Windows のディスク複製用情報ファイルを作成するツール
			ExecLinuxIParm.jar	1	Linux のインストールパラメータを作成するツール
			ExecLinuxSysRep.jar	1	Linux のディスク複製用情報ファイルを作成するツール
			winftc.exe	1	ファイル転送ツール
			zip.exe	1	ファイル圧縮コマンド
			CHKOSCD.EXE	1	OS 媒体チェックツール

※1

インストールフォルダのデフォルトは、「C:¥Program Files (x86)¥Hitachi¥ServerConductor¥DeploymentManager」です。

• DPM コマンドライン

サービス名	表示名	スタートアップの種類	プロセス名※1	プロセス数	機能
なし	なし	—	dpmcmd.exe (1以上)	1以上	DPM コマンドラインからのシナリオ実行

※1

インストールフォルダのデフォルトは、「C:¥Program Files (x86)¥Hitachi¥ServerConductor¥DeploymentManager」です。

• DPM クライアント (Windows)

サービス名	表示名	スタートアップの種類	プロセス名※1	プロセス数	機能
depagent	DeploymentManager Agent Service	自動	DepAgent.exe	1	DPM サーバからの電源 OFF を実行
rupdsvc	DeploymentManager Remote Update Service Client	自動	rupdsvc.exe	1	リモートアップデート実行 管理対象マシンの OS/サービスパック/パッチ情報を DPM サーバに送信
	(子プロセス)	—	unzip.exe	1	ファイル解凍コマンド
			実行ファイル	1	パッケージのインストーラ
			GetBootServerIP.exe	1	管理サーバ検索
なし	なし	—	DPMTTray.exe	1 以上	自動更新状態表示

※1

インストールフォルダのデフォルトは、次のとおりです。

%ProgramFiles(x86)%Hitachi*ServerConductor*DeploymentManager_Client

• DPM クライアント (Linux)

サービス (デーモン) 名	表示名	スタートアップの種類	プロセス名	プロセス数	機能
depagt	なし	自動	depagtd※1	1, 2	DPM クライアントサービス
	(子プロセス) system 関数にて起動	—	depagtd	1	DPM サーバからの電源 OFF を実行 リモートアップデート実行 管理対象マシンの OS/パッチ情報を DPM サーバに送信
			rpm	1	rpm パッケージインストーラ

サービス（デーモン）名	表示名	スタートアップの種類	プロセス名	プロセス数	機能
depagt	(子プロセス) system 関数にて起動	-	shutdown	1	シャットダウンコマンド
			mv	1	ファイル移動コマンド
			echo	1	メッセージ表示コマンド
			unzip	1	圧縮ファイル解凍コマンド
			touch	1.	タイムスタンプの変更コマンド
			GetBootServer IP	1	管理サーバ検索

※1

インストールディレクトリは固定値で「/usr/hitachi/dpm/agent/bin」です。

付録 A.2 サービスの開始，停止方法と順序

DPM サーバは，DPM に関連する各サービスに連携/依存関係があるため，手動でサービスの開始/停止を行う場合は，以下の順番で行ってください。

なお，DPM クライアントの各サービス（デーモン）については，サービスの開始/停止の順番はありません。

- サービス開始順番
 1. SQL Server (インスタンス名)
 2. 「DeploymentManager」で始まるサービス
- サービス停止順番
 1. 「DeploymentManager」で始まるサービス
 2. SQL Server (インスタンス名)

注：

DPM サーバおよび DPM クライアントのサービスを再起動する場合は，DPM 関連のサービスをすべて停止した後で，サービスを開始してください。

サービスごとに再起動を行わないでください。

(正しい例) DPM クライアント (Windows) の場合

- (1) DeploymentManager Agent Service 停止
- (2) DeploymentManager Remote Update Service Client 停止
- (3) DeploymentManager Agent Service 開始

(4) DeploymentManager Remote Update Service Client 開始

付録 B ネットワークポートとプロトコル一覧

付録 B.1 ネットワークポートとプロトコル一覧

- DPM が通信に使用しているポート一覧

注：

- 管理サーバ上に DHCP サーバを構築する場合は、それぞれの表に記載の通信が、管理サーバと管理対象マシン間で行われます。
- DPM が通信に使用しているポート（Windows OS）の自動/手動開放については、マニュアル「リファレンスガイド 6.1 ポート開放ツール」を参照してください。

- 管理サーバと管理対象マシンの通信

項目	管理サーバ			プロトコル	接続方向	宛先指定 —	管理対象マシン			Port. ini の キー
	実行ファイル名	ポート番号	ポート番号変更の可否				ポート番号	ポート番号変更の可否	実行ファイル名	—
電源 ON	magicse nd.exe	※1	不可	UDP	→	Direct Broadca st※2	5561	不可	—	—
シャット ダウン	apiserv. exe schwatk h.exe	※1	不可	TCP	→	Unicast	26509 (56010) ※9	可	Windo ws の場 合： DepAg ent.exe Linux の場 合： depagt d	Shut dow nReb oot
生存確認 (電源 ON/OF F 状態の 確認)	apiserv. exe schwatk h.exe	_※3	不可	ICMP Echo request	→	Unicast	g※3	不可	—	—
	apiserv. exe schwatk h.exe	0※3	不可	ICMP Echo reply	←	Unicast	_※3	不可	—	—
ネット ワーク ブート	pxesvc.e xe	67	不可	UDP (DHCP)	←	Broadca st※4※5	68	不可	—	—

項目	管理サーバ			プロトコル	接続方向	宛先指定 —	管理対象マシン			Port. ini の キー
	実行ファイル名	ポート番号	ポート番号変更の可否				ポート番号	ポート番号変更の可否	実行ファイル名	—
ネットワークブート	pxesvc.exe	67	不可	UDP (DHCP)	→	Broadcast*4*5	68	不可	—	—
	pxesvc.exe	67	不可	UDP	→	Unicast	68	不可	—	—
	pxesvc.exe	4011	不可	UDP	←	Unicast	68	不可	—	—
	pxesvc.exe	4011	不可	UDP	←	Unicast	4011	不可	—	—
	pxesvc.exe	67	不可	UDP	→	Unicast	4011	不可	—	—
	pxemtftp.exe	69	不可	UDP (TFTP)	←	Unicast	*1	不可	—	—
	pxemtftp.exe	69	不可	UDP (TFTP)	→	Unicast	*1	不可	—	—
	bkressvc.exe	26503 (56030) *9	可 *10	TCP	←	Unicast	*1	不可	—	FSC
	bkressvc.exe	26502 (56022) *9	可 *10	TCP	←	Unicast	*1	不可	—	BOOTNIC
ディスク複製 OS インストール*6	ftsvc.exe	26508 (56023) *9	可 *10	TCP	←	Unicast	*1	不可	—	FTUnicast
リストア・マルチキャスト*7	ftsvc.exe	26508 (56023) *9	可 *10	TCP	←	Unicast	*1	不可	—	FTUnicast
	bkressvc.exe	26501 (56020) *9	可 *10	TCP	←	Unicast	*1	不可	—	BackupRestoreUnicast
	bkressvc.exe	26530 (56021)	可	UDP	→	Multicast	26530 (56021)	可	—	RestoreM

項目	管理サーバ			プロトコル	接続方向	宛先指定 —	管理対象マシン			Port. iniの キー
	実行ファイル名	ポート番号	ポート番号変更の可否				ポート番号	ポート番号変更の可否	実行ファイル名	—
リストア・マルチキャスト※7	bkressvc.exe	※9	※10	UDP	→	Multicast	※9	※10	—	ulticast
リストア・ユニキャスト※7	ftsvc.exe	26508 (56023) ※9	可 ※10	TCP	←	Unicast	※1	不可	—	FTUnicast
	bkressvc.exe	26501 (56020) ※9	可 ※10	TCP	←	Unicast	※1	不可	—	BackupRestoreUnicast
バックアップ※7	ftsvc.exe	26508 (56023) ※9	可 ※10	TCP	←	Unicast	※1	不可	—	FTUnicast
	bkressvc.exe	26501 (56020) ※9	可 ※10	TCP	←	Unicast	※1	不可	—	BackupRestoreUnicast
ディスク構成チェック※7	ftsvc.exe	26508 (56023) ※9	可 ※10	TCP	←	Unicast	※1	不可	—	FTUnicast
リモートアップデートによるサービスパック/ HotFix/ Linux パッチ ファイルのインストール	rupdsvc.exe	※1	不可	TCP	→	Unicast	26510 (56000) ※9	可 ※10	Windowsの場合： rupdsvc.exe Linuxの場合： depagtd	RemoteUpdateUnicast
	rupdsvc.exe	※1	不可	UDP	→	Multicast	26529 (56001) ※9	可 ※10	Windowsの場合： rupdsvc.exe	RemoteUpdateMulticast

項目	管理サーバ			プロトコル	接続方向	宛先指定 —	管理対象マシン			Port. iniの キー
	実行ファイル名	ポート番号	ポート番号変更の可否				ポート番号	ポート番号変更の可否	実行ファイル名	—
リモートアップデートによるサービスパック/ HotFix/ Linux パッチ ファイルのインストール	rupdssvc.exe	※1	不可	UDP	→	Multicast	26529 (56001) ※9	可 ※10	Linuxの場合： depagtd	RemoteUpdateMulticast
	rupdssvc.exe	26507 (56028) ※9	可 ※10	TCP	←	Unicast	※1	不可	rupdssvc.exe (Windowsだけ)	ReceiveClientResult
管理対象マシンの情報送付 ※12	depssvc.exe	26504 (56011) ※9	可 ※10	TCP	←	Unicast	※1	不可	Windowsの場合： rupdssvc.exe Linuxの場合： depagtd	ReceiveClientInfo
	rupdssvc.exe	26507 (56028) ※9	可 ※10	TCP	←	Unicast	※1	不可	rupdssvc.exe (Windowsのみ)	ReceiveClientResult
自動更新要求※13	rupdssvc.exe	26506 (56024) ※9	可 ※10	TCP	←	Unicast	※1	不可	rupdssvc.exe	AUUpdate
	rupdssvc.exe	26507 (56028) ※9	可 ※10	TCP	←	Unicast	※1	不可	rupdssvc.exe	ReceiveClientResult
自動更新通知	rupdssvc.exe	※1	不可	TCP	→	Unicast	26511 (56025) ※9	可 ※10	rupdssvc.exe	AUClient
	rupdssvc.exe	26506 (56024) ※9	可 ※10	TCP	←	Unicast	※1	不可	rupdssvc.exe	AUUpdate

項目	管理サーバ			プロトコル	接続方向	宛先指定 —	管理対象マシン			Port. iniの キー
	実行ファイル名	ポート番号	ポート番号変更の可否				ポート番号	ポート番号変更の可否	実行ファイル名	—
自動更新通知	rupdsv c.exe	26507 (56028) ※9	可 ※10	TCP	←	Unicast	※1	不可	rupdsv c.exe	Rece iveCl ientR esult
DHCP サーバを 使用しない運用※ 8	pxesvc.e xe	26505 (56060) ※9	可 ※10	TCP	←	Unicast	※1	不可	—	DHC PLes s
管理サー バ/ポー ト検索※ 11※14	pxesvc.e xe	67	不可	UDP (DHCP)	←	Broadca st※4	68	不可	Windo wsの場 合： GetBo otServe rIP.exe Linux の場 合： GetBo otServe rIP	—
	pxesvc.e xe	67	不可	UDP (DHCP)	→	Broadca st※4	68	不可	Windo wsの場 合： GetBo otServe rIP.exe Linux の場 合： GetBo otServe rIP	—
	pxesvc.e xe	4011	不可	UDP	←	Unicast	※1	不可	Windo wsの場 合： GetBo otServe rIP.exe Linux の場 合：	—

項目	管理サーバ			プロトコル	接続方向	宛先指定 —	管理対象マシン			Port. iniの キー
	実行ファイル名	ポート番号	ポート番号変更の可否				ポート番号	ポート番号変更の可否	実行ファイル名	—
管理サーバ/ポート検索※11※14	pxesvc.exe	4011	不可	UDP	←	Unicast	※1	不可	GetBotServerIP	—
	pxesvc.exe	4011	不可	UDP	→	Unicast	※1	不可	Windowsの場合： GetBotServerIP.exe Linuxの場合： GetBotServerIP	—
	pxemtftp.exe	69	不可	UDP (TFTP)	←	Unicast	※1	不可	—	—
	pxemtftp.exe	69	不可	UDP (TFTP)	→	Unicast	※1	不可	—	—
ファイル配信, ファイル削除, ファイル/フォルダ詳細の 情報取得※15	apiserv.exe	※1	不可	TCP	→	Unicast	26520	可	Windowsの場合： rupdsv c.exe Linuxの場合： depagtd	FDS

※1

ポートは自動的に割り当てられます。

※2

管理サーバと同じセグメントのマシンに対しては 255.255.255.255 宛となります。

管理サーバと別セグメントの場合はダイレクトブロードキャストとなります。

(例) 192.168.0.0 (MASK=255.255.255.0) セグメントの場合は、192.168.0.255 宛となります。

※3

ICMP (Internet Control Message Protocol) ではポート番号を指定した通信は行いませんが、ICMP の Type フィールド値を使ってルーティングします。

※4

DHCP リレーによりリレーされたパケットの宛先は Unicast になる場合があります。

※5

DHCP サーバと管理サーバが別装置の場合だけとなります。

※6

リストアの項目に記載されているプロトコルとポート番号も、追加が必要となります。

※7

「ネットワークブート」の項目に記載しているプロトコルとポート番号も追加が必要となります。

※8

DHCP サーバを使用しない運用は未サポートです。

※9

DPM09-54 と DPM09-54 より前のバージョンで、使用するネットワークポートを変更しました。DPM09-54 より前のバージョンからアップグレードインストールした場合は、アップグレードインストール前に使用していたポート番号をそのまま引き継ぎます。上の表の括弧内の番号が、DPM09-54 より前のバージョンのデフォルトポート番号です。

※10

DPM の使用するネットワークポートを変更する場合は、「付録 B.2 DPM のネットワークポート変更」を参照してください。

※11

DPM09-54 では、管理サーバと管理対象マシンのセグメントが異なる環境で、管理サーバ/ポート検索を行う場合は、途中のスイッチ（ルータ）に 4011 ポートのフォワード設定が必要でしたが、DPM09-55 では 4011 ポートのフォワード設定は不要となりました。DPM09-54 使用時に、スイッチ（ルータ）に 4011 ポートのフォワード設定をしていた場合は、設定を解除してください。

※12

クライアントサービスが起動する際に送付します。

※13

あらかじめ指定されたタイミングで、管理対象マシンから管理サーバに対して、サービスパック/HotFix の自動更新を要求します。

※14

クライアントサービスが起動する際やシナリオを実行する際に、管理サーバを検索する場合は、必要となります。

※15

管理対象マシンへファイル配信を行う際や管理対象マシン上のファイルを削除する際、「ファイル/フォルダ詳細」画面を表示する際に、必要となります。

注：

- 管理対象マシンの OS が次のどれかの場合、DPM クライアントのインストール時に使用されているネットワークの状況により、次のようにポート/プログラムが開放されます。
- Windows Server 2008 R2 以降の場合
DeploymentManager (DepAgent.exe), DeploymentManager (rupdsvc.exe) については、Windows ファイアウォールのアクティブなパブリックプロファイル、プライベートプロファイル、ドメインプロファイルのどれかに対して、ポート/プログラムが開放されます。
ファイルとプリンターの共有 (エコー要求 - ICMPv4 受信) については、Windows ファイアウォールのパブリックプロファイル、プライベートプロファイル、ドメインプロファイルのどれかに対して、ポート/プログラムが開放されます。
例)
管理対象マシンがドメインに参加してドメインプロファイルに変更されると、DPM が使用するポート/プログラムがブロックされ通信できなくなります。
- 管理対象マシンがドメインに参加してドメインプロファイルに変更されると、DPM が使用するポート/プログラムがブロックされ通信できなくなります。

ドメインに参加する管理対象マシンや、ディスク複製 OS インストールでマスタとするマシンには、あらかじめ DPM が使用するポート/プログラムをドメインプロファイルで開放しておいてください。

次の手順により管理対象マシンのドメインプロファイルのポートを開放することができます。

- ・ドメインのポリシーで設定する方法：

Windows Server 2008 以降のドメインコントローラのドメインポリシーで設定してください。

- ・管理対象マシンのローカルで設定する方法：

管理対象マシンの「セキュリティが強化された Windows ファイアウォール」の「受信の規則」から以下を選択して右クリックで「プロパティ」を開きます。

DeploymentManager (DepAgent.exe)

DeploymentManager (rupdsvc.exe)

ファイルとプリンターの共有 (エコー要求 - ICMPv4 受信)

プロパティの「詳細設定」タブのプロファイルでドメインのチェックボックスにチェックを入れます。

- ・管理対象マシンのファイアウォールサービスを自動起動に設定している場合、ファイアウォール機能の有効/無効に関わらずマシンが起動してからファイアウォールサービスが起動するまでの間、すべてのポートが閉じられます。このタイミングで以下の操作を行うと、処理に失敗しますので、注意してください。

- ・シナリオ実行/シャットダウンを行うと管理対象マシンとの通信ができないため処理がエラーとなります。

このような場合は、管理対象マシンが電源 ON となっていることを Web コンソールから確認後、シナリオ実行/シャットダウンを行ってください。

- ・DPM クライアントのバージョン/リビジョンが、DPM サーバのバージョン/リビジョンと一致していない場合、DPM クライアントの自動アップグレードインストールが実行されますが、このタイミングで管理対象マシンと通信できないため自動アップグレードインストールに失敗します。

このような場合は、「3.3.2 DPM クライアントを手動アップグレードインストールする」を参照して、シナリオ配信によるアップグレードを行ってください。

・ DHCP サーバと管理対象マシンの通信

項目	DHCP サーバ			プロトコル	接続方向	宛先指定	管理対象マシン		
	実行ファイル名	ポート番号	ポート番号変更の可否				ポート番号	ポート番号変更の可否	実行ファイル名
ネットワークブート	—	67	不可	UDP (DHCP)	←	Broadcast* 1	68	不可	—

項目	DHCP サーバ			プロトコル	接続方向	宛先指定	管理対象マシン		
	実行ファイル名	ポート番号	ポート番号変更の可否				ポート番号	ポート番号変更の可否	実行ファイル名
ネットワークブート	-	67	不可	UDP (DHCP)	→	Broadcast* 1	68	不可	-

※1

DHCP リレーによりリレーされたパケットの宛先は Unicast になる場合があります。

• NFS サーバと管理対象マシンの通信

項目	NFS サーバ			プロトコル	接続方向	宛先指定	管理対象マシン		
	実行ファイル名	ポート番号	ポート番号変更の可否				ポート番号	ポート番号変更の可否	実行ファイル名
OS クリアインストール※4	_※1	111	不可	TCP	←	Unicast	※2	不可	※1
	_※1	111	不可	UDP	←	Unicast	※2	不可	※1
	_※1	1048※3	不可	TCP	←	Unicast	※2	不可	※1
	_※1	1048※3	不可	UDP	←	Unicast	※2	不可	※1
	_※1	2049	不可	TCP	←	Unicast	※2	不可	※1
	_※1	2049	不可	UDP	←	Unicast	※2	不可	※1

※1

Linux OS 関連モジュールになります (DPM 製品には、含まれません)。

※2

ポートは自動的に割り当てられます。

※3

このポート番号は動的に変更される場合があります。もし通信に失敗する場合は、"rpcinfo -p" コマンドで mountd

(NFS mount daemon) サービスが使用するポート番号を確認し、そのポートを開放するようにしてください。この方法によっても改善されない場合は、Windows ファイアウォールの設定を無効にしてください。

※4

OS クリアインストールは未サポートです。

• Web コンソールと管理サーバの通信

項目	Web コンソール用マシン			プロトコル	接続方向	宛先指定	管理サーバ※2		
	実行ファイル名	ポート番号	ポート番号変更の可否				ポート番号	ポート番号変更の可否	実行ファイル名
Web コンソール	—	※1	不可	TCP (HTTP)	→	Unicast	80※3	可	Web サービス (IIS)

※1

ポートは自動的に割り当てられます。

※2

管理サーバは、内部処理用 (DPM サーバと Web サービス (IIS) との通信) にポート (TCP:26500 (DPM09-54 より前は TCP:56050)) を使用するため、ほかのアプリケーションでこのポートを使用しないようにしてください。なお、DPM サーバを 09-54 より前のバージョンからアップグレードインストールした場合、09-54 より前のバージョンで使用していたポート番号 56050 番の代わりに 26500 番を使用します。ほかのアプリケーションで 26500 番を使用している場合は「付録 B.2 DPM のネットワークポート変更」を参照して 26500 番を 56050 番に変更してください (56050 番以外のネットワークポートは、アップグレード前の番号を引継いで使用します)。

※3

以下の手順を参考にして、使用するポート番号を変更することができます。

(例) IIS7.0 の場合

1. 「スタート」メニュー→「管理ツール」→「インターネット インフォメーション サービス (IIS) マネージャ」を選択します。
2. 「インターネット インフォメーション サービス (IIS) マネージャ」画面が起動しますので、ツリービュー上で、コンピュータ名→「Web サイト」→Web サイト名を右クリックした後に「バインドの編集」を選択してポート番号を変更します。

• データベースと管理サーバの通信

管理サーバは、内部処理用 (DPM サーバとデータベースとの通信) にポート (TCP:1433, TCP:1434, UDP:1433, UDP:1434) を使用するため、ほかのアプリケーションでこのポートを使用しないようにしてください。

• イメージビルダ (リモートコンソール) と管理サーバの通信

項目	イメージビルダ(リモートコンソール)用マシン			プロトコル	接続方向	宛先指定	管理サーバ		
	実行ファイル名	ポート番号	ポート番号変更の可否				ポート番号	ポート番号変更の可否	実行ファイル名
イメージビルダ (リモートコンソール)	DIBuild.exe	※1	不可	TCP	→	Unicast	26508 (56023) ※2	可	ftsvc.exe

※1

ポートは自動的に割り当てられます。

※2

DPM サーバを DPM09-54 より前のバージョンからアップグレードインストールした場合、アップグレードインストール前のポート (56023) が引き継がれます。

• DPM コマンドラインと管理サーバの通信

項目	DPM コマンドライン用マシン			プロトコル	接続方向	宛先指定	管理サーバ※2		
	実行ファイル名	ポート番号	ポート番号変更の可否				ポート番号	ポート番号変更の可否	実行ファイル名
DPM コマンドライン	dpmcmd.exe	※1	不可	TCP (HTTP)	→	Unicast	80※3	可	Web サービス (IIS)

※1

ポートは自動的に割り当てられます。

※2

管理サーバは、内部処理用 (DPM サーバと Web サービス (IIS) との通信) にポート (TCP:26500 (DPM09-54 より前は TCP:56050)) を使用するため、ほかのアプリケーションでこのポートを使用しないようにしてください。なお、DPM サーバを 09-54 より前のバージョンからアップグレードインストールした場合、09-54 より前のバージョンで使用していたポート番号 56050 番の代わりに 26500 番を使用します。ほかのアプリケーションで 26500 番を使用している場合は「付録 B.2 DPM のネットワークポート変更」を参照して 26500 番を 56050 番に変更してください (56050 番以外のネットワークポートは、アップグレード前の番号を引継いで使用します)。

※3

以下の手順を参考にして、使用するポート番号を変更することができます。

(例) IIS7.0 の場合

1. 「スタート」メニュー→「管理ツール」→「インターネット インフォメーション サービス (IIS) マネージャ」を選択します。
2. 「インターネット インフォメーション サービス (IIS) マネージャ」画面が起動しますので、ツリービュー上で、コンピュータ名→「Web サイト」→Web サイト名を右クリックした後に「バインドの編集」を選択してポート番号を変更します。

注：

- ・OSの種類によっては、エフェメラルポートの影響でDPMが使用するポートと、ほかのサービスやアプリケーションで使用するポートが競合し、DPMのサービスが起動できない場合があります。エフェメラルポートの確認方法と、対処方法については、マニュアル「導入・設計ガイド 2.2.1 ネットワーク環境について」の「(3) DPMが使用するポートについて」を参照してください。
- ・ルータとスイッチの設定については、ネットワーク機器のマニュアルを参照していただくか、購入元に問い合わせてください。

付録 B.2 DPM のネットワークポート変更

DPM が使用するネットワークポートを変更する手順を説明します。

注：

- ・手順どおりに行わなかった場合、管理サーバ/管理対象マシンが正常に動作しなくなります。
- ・本手順に沿って `ftsvc.exe` で使用するポート (TCP:26508) を変更する場合は、イメージビルダ (リモートコンソール) の「接続設定」画面でも同じポートを指定してください。
- ・DPM09-54 の DPM サーバを新規インストールした場合、DPM09-54 より前の DPM クライアントを自動アップグレードインストールできません。
次を行ってください。
- ・次のバージョンで DPM クライアント (クライアントサービス for DPM) が LISTEN するポート番号を変更している場合は、DPM サーバを新規インストールした後に、「3.3.2 DPM クライアントを手動アップグレードインストールする」を参照して、インストール媒体による DPM クライアントのアップグレードインストールを行ってください。
DPM08-90-/E~08-90-/*, 09-03-/A~09-53 (*は F 以降の文字)
- ・DPM クライアント (クライアントサービス for DPM) が LISTEN するポート番号を変更していない場合は、DPM サーバを新規インストールした後に、「3.3.2 DPM クライアントを手動アップグレードインストールする」を参照して、シナリオによる DPM クライアントのアップグレードインストールを行ってください (シナリオ完了まで 10 分程度かかります)。
- ・DPM09-54 より前のバージョンで作成したディスク複製 OS インストール用のマスタイメージは、DPM09-54 以降の DPM サーバを新規インストールした環境や DPM09-54 以降の DPM サーバにアップグレード後ポート番号を変更した環境では、使用できません。DPM09-54 で、マスタイメージを再作成するか、本手順に沿って、マスタイメージ作成時のポート番号に変更してください。
- ・DPM09-54 以降と、DPM09-54 より前のバージョンでは、使用するポートの既定値が異なります。ネットワークポートの詳細については、「付録 B.1 ネットワークポートとプロトコル一覧」を参照してください。

1. 管理サーバに管理者権限を持つユーザでログオンします。
2. DPM に関する処理を終了します。
3. <TFTP ルートフォルダ>%PXE%\Images%Port.ini を編集します。

注：

- ・Port.ini のキーとポート番号の既定値については、「付録 B.1 ネットワークポートとプロトコル一覧」を参照してください。

- ・ Port.ini の編集では、ポート番号以外を編集しないでください。
 - ・ Port.ini の編集で次の場合は、09-54 より前のネットワークポートの既定値が使用されます。
 - ・ ポート番号に数値以外を入力した。
 - ・ セクションやキーを変更/削除した。
- 09-54 より前のネットワークポートの既定値は、「付録 B.1 ネットワークポートとプロトコル一覧」を参照してください。
- ・ TFTP ルートフォルダのデフォルトは、「<DPM サーバインストールフォルダ>%PXE%Images」です。
 - ・ Web サービス用ポート（既定値：26500）を変更する場合は、<TFTP ルートフォルダ>%WebServer%App_Data%Config%MgrServerList.xml の以下の行を修正してください。
<Port>変更するポート</Port>

4. 管理サーバを再起動します。

5. 管理対象マシンを再起動します。

注：

ポート番号の設定内容は、次のコマンドを使用してください。

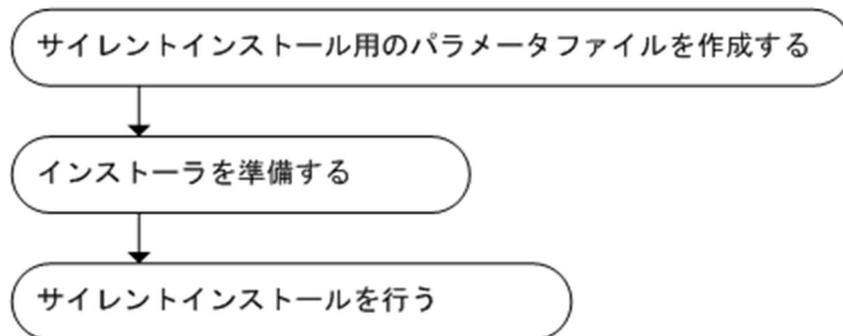
- ・ Windows : netstat -ab

6. ・ Linux : netstat -ap

付録 C DPM クライアントのサイレントインストール

DPM クライアント (Windows(x86/x64)) については、次の手順に沿ってサイレントインストール用のパラメータファイルを用意することで、サイレントインストールを行うことが可能です。

なお、起動しているアプリケーション、エクスプローラおよび Web ブラウザがある場合は、すべて終了してください。



- サイレントインストール用のパラメータファイルを作成します。
 1. パラメータファイル作成用のマシンを用意します。
 2. 1. で用意したマシンに管理者権限を持つユーザでログインします。
 3. インストール媒体を DVD ドライブにセットします。
 4. 「スタート」メニュー→「ファイル名を指定して実行」を選択し名前に「cmd」と入力して「OK」ボタンをクリックします。
 コマンドプロンプトが起動しますので以下のコマンドを実行します。
 <インストール媒体>:%Setup%Client%setup.exe -r
 5. セットアップウィザードが起動しますので必要な値を入力しセットアップを行います。このときの入力した値や操作がパラメータファイルとして記録されます。
 6. Windows のシステムフォルダにサイレントインストール用のパラメータファイル setup.iss ファイルが作成されます。
 注：
 Windows のシステムフォルダは、デフォルトでは以下となります。
 Windows 2008 R2/2012・・・C:%WINDOWS
 そのほかの OS については、環境変数「%Systemroot%」をご確認ください。
- インストーラを準備します。
 1. インストール媒体を DVD ドライブにセットし、インストール媒体内の以下フォルダを任意の場所にコピーします。
 <インストール媒体>:%Setup%Client
 2. 1. でコピーしたフォルダに事前に作成した setup.iss をコピーします。
 以上で準備完了です。
- サイレントインストールを実行します。
 1. 「スタート」メニュー→「ファイル名を指定して実行」を選択し名前に「cmd」と入力して「OK」ボタンをクリックします。

コマンドプロンプトが起動しますので以下のコマンドを実行します。

(例) C ドライブ直下にフォルダをコピーした場合

```
C:%Client%setup.exe -s
```

注：

- ・サイレントインストール用のパラメータファイルは OS ごとに作成する必要があります。
- ・作成したパラメータファイルを使って正しくインストールできるかどうか十分な確認をしてください。
- ・サイレントインストール用のパラメータファイルは Windows (x86/x64) だけで使用可能です。

以上でサイレントインストールの実行手順の説明は完了です。

付録 D データベースのアップグレード手順

付録 D.1 Microsoft SQL Server 2005 Express Edition SP3/SP4 のインストール

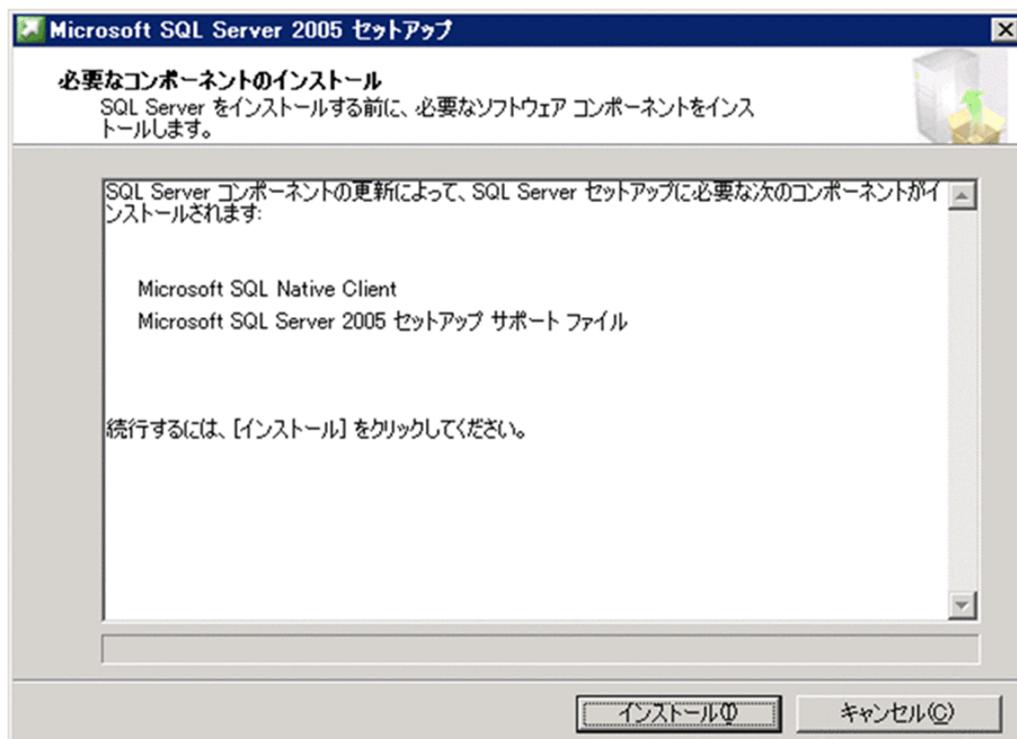
DPM08-55～09-03 では、Microsoft SQL Server 2005 Express Edition SP2 (x86) をインストール媒体に同梱し、DPM で使用します。

DPM08-55～09-03 から DPM09-10 以降にアップグレードしても Microsoft SQL Server 2005 Express Edition (x86) を引き続き DPM で使用します。

ここでは、Microsoft SQL Server 2005 Express Edition SP2/SP3 (x86) を SP3/SP4 へ更新する場合の手順を説明します。

管理サーバへ管理者権限のあるユーザでログインします。

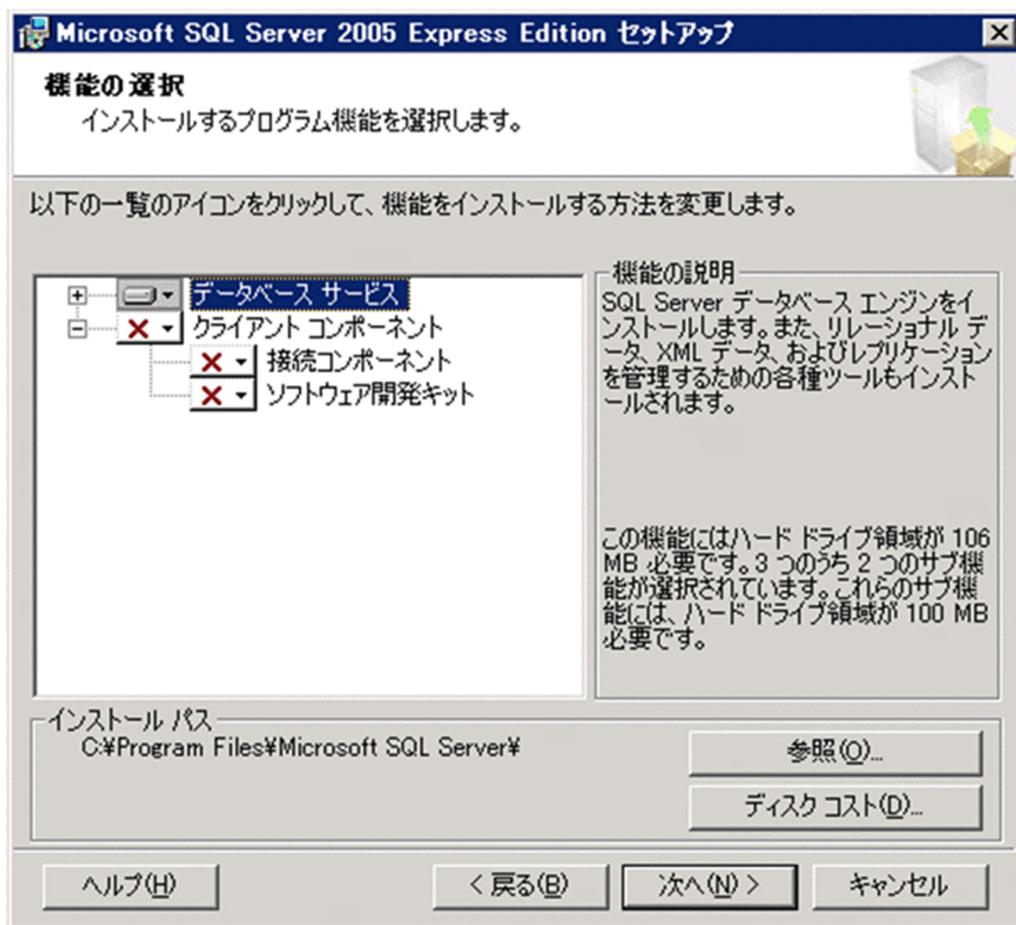
1. Microsoft ダウンロードセンターより、Microsoft SQL Server 2005 Express Edition SP3/SP4 のインストーラ [SQLEXPJPN.EXE] を取得します。
2. [DeploymentManager] で始まる次のサービスを停止します。
 - DeploymentManager API Service
 - DeploymentManager Backup/Restore Management
 - DeploymentManager Get Client Information
 - DeploymentManager PXE Management
 - DeploymentManager PXE Mtftp
 - DeploymentManager Remote Update Service
 - DeploymentManager Schedule Management
 - DeploymentManager Transfer Management
3. 1.で取得した [SQLEXPJPN.EXE] を実行します。
4. 「使用許諾契約書」画面が表示されますので、内容を確認し「使用許諾契約書に同意する」にチェックを入れて、「次へ」ボタンをクリックします。
5. 「必要なコンポーネントのインストール」画面が表示されますので、「インストール」ボタンをクリックします。



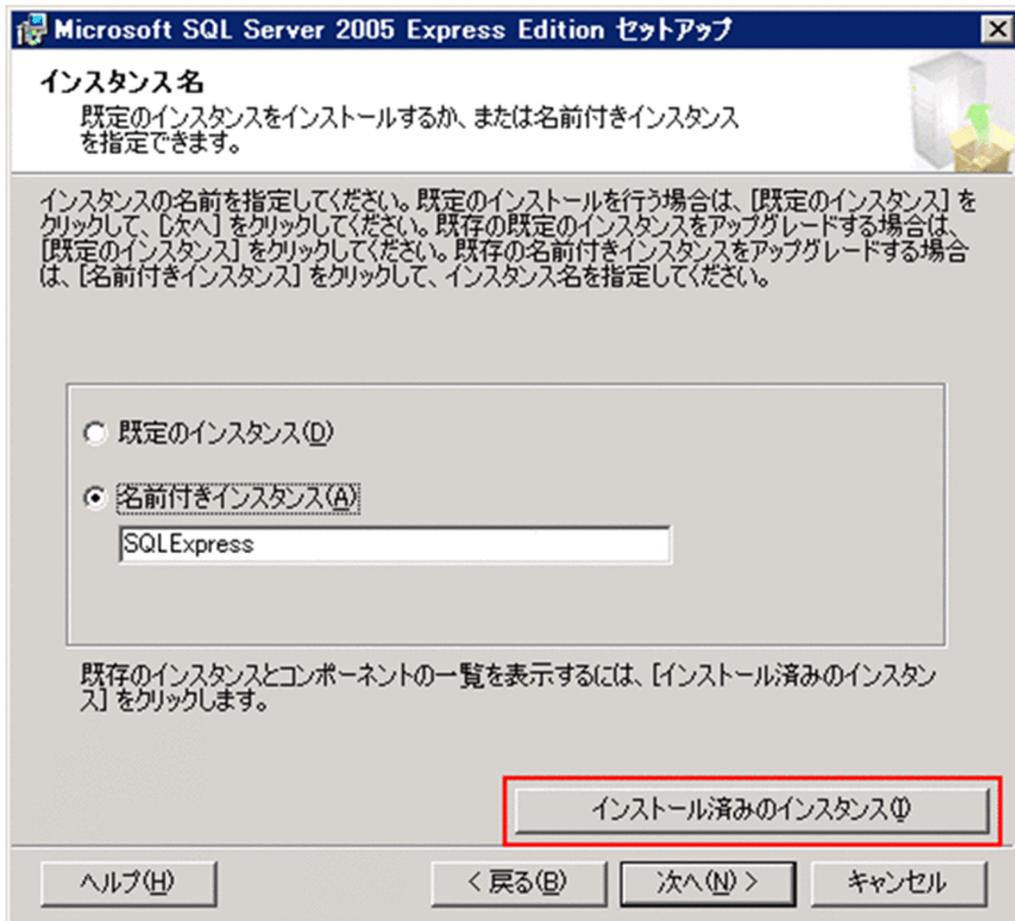
6. 「登録情報」画面まで、「次へ」ボタンをクリックしてインストールを進めます。
7. 「登録情報」画面で、「詳細構成オプションを非表示にする」のチェックを外した後に「次へ」ボタンをクリックします。

The screenshot shows a Windows dialog box titled "Microsoft SQL Server 2005 Express Edition セットアップ". The main heading is "登録情報" (Registration Information). Below the heading, it says "インストールされた環境には、次のユーザー情報が登録されます。" (In the installed environment, the following user information will be registered.). There is a small icon of a server tower with a green arrow pointing up. The text continues: "続行するには [名前] フィールドに名前を入力してください。[会社名] フィールドは省略可能です。" (To continue, please enter a name in the [Name] field. The [Company Name] field is optional.). There are two text input fields: "名前(A):" (Name) and "会社名(O):" (Company Name). Below these fields is a checkbox labeled "詳細構成オプションを非表示にする(D)" (Hide advanced configuration options). At the bottom of the dialog, there are four buttons: "ヘルプ(H)" (Help), "< 戻る(B)" (Back), "次へ(N) >" (Next), and "キャンセル" (Cancel).

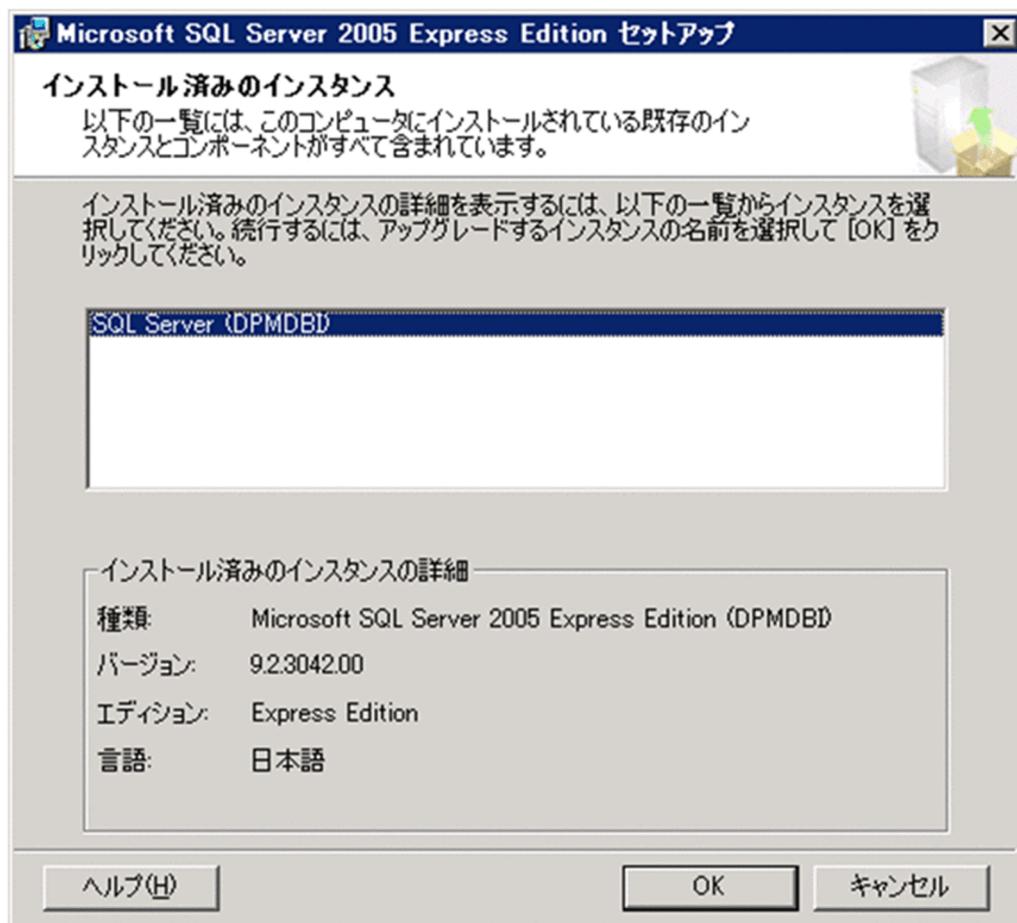
8. 「機能の選択」画面が表示されますので、既定値のまま「次へ」ボタンをクリックします。



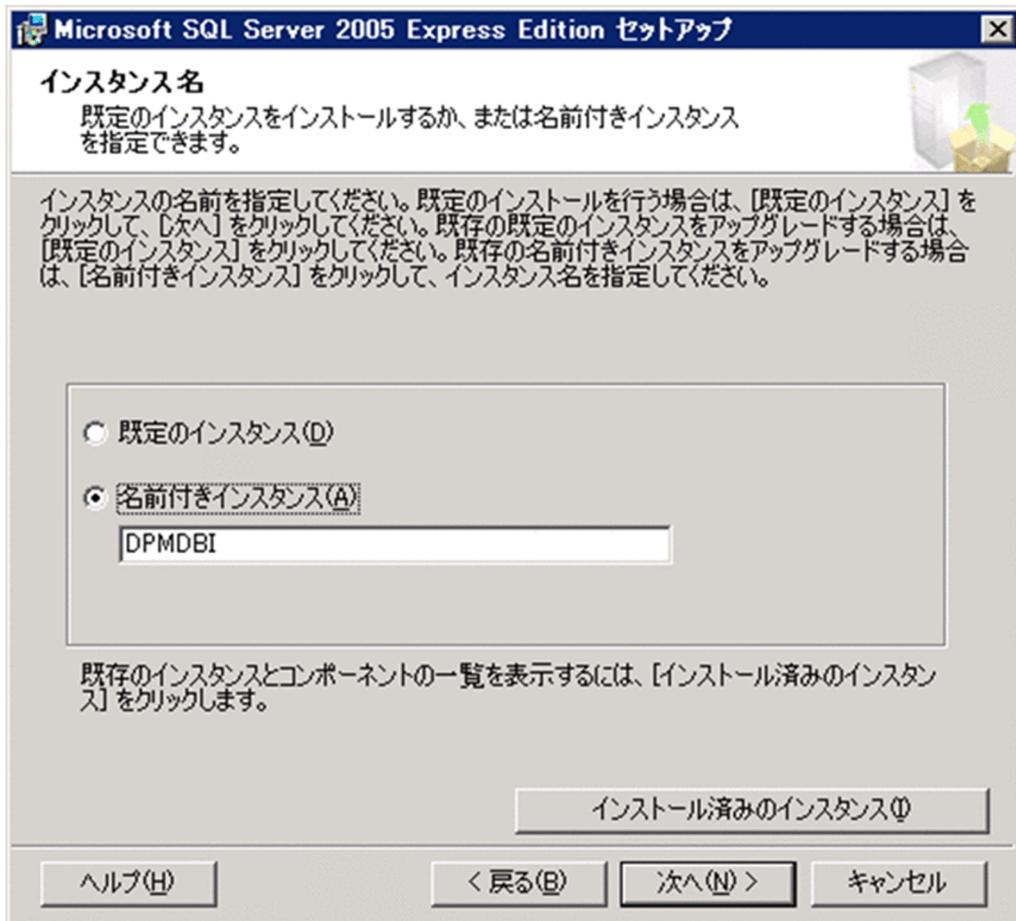
9. 「インスタンス名」画面で、「インストール済みのインスタンス」ボタンをクリックします。



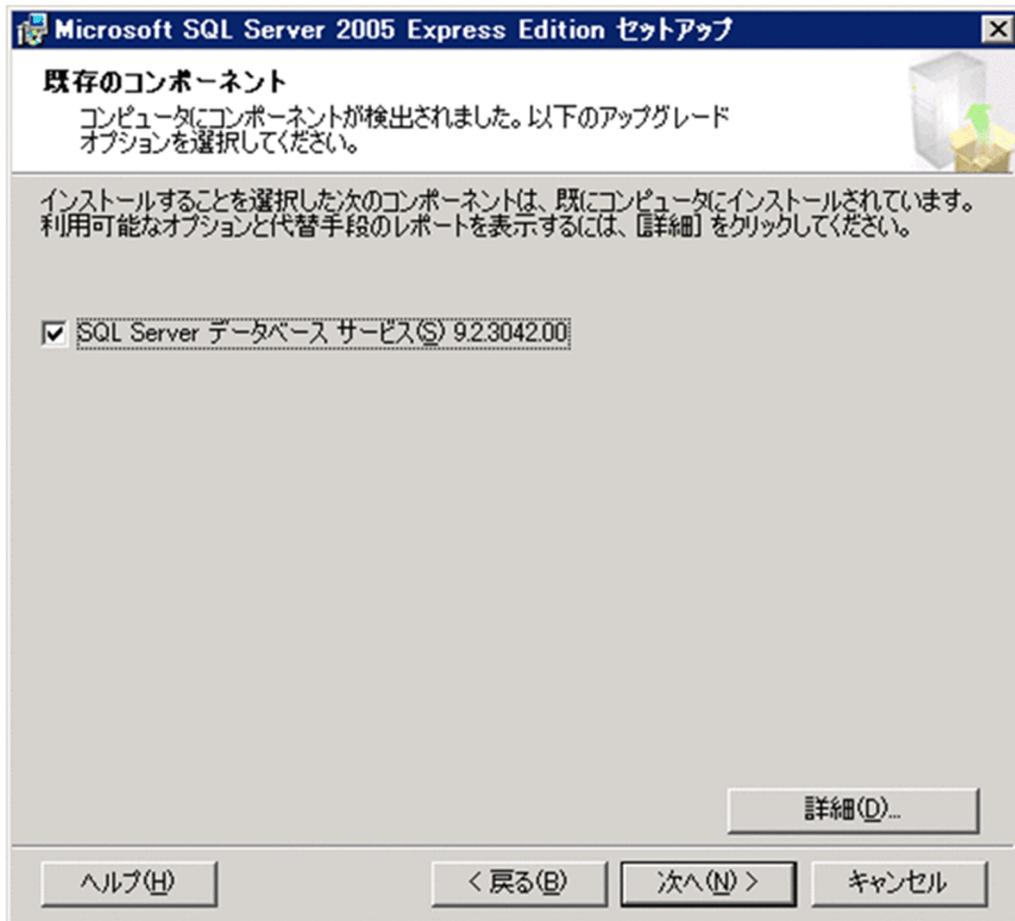
10. 「インストール済みのインスタンス」画面で、「DPMDBI」を選択し、「OK」ボタンをクリックします。



11. 「インスタンス名」画面に戻りますので、「次へ」ボタンをクリックします。



12. 「既存のコンポーネント」画面が表示されますので、「SQL Server データベースサービス 9.2.3042.00」にチェックを入れて「次へ」ボタンをクリックします。



注：

9.2.3042.00」は、DPMDBI インスタンスが利用する SQL Server 2005 Express Editoin の内部バージョンです。

SP ごとのバージョンは次のとおりです。

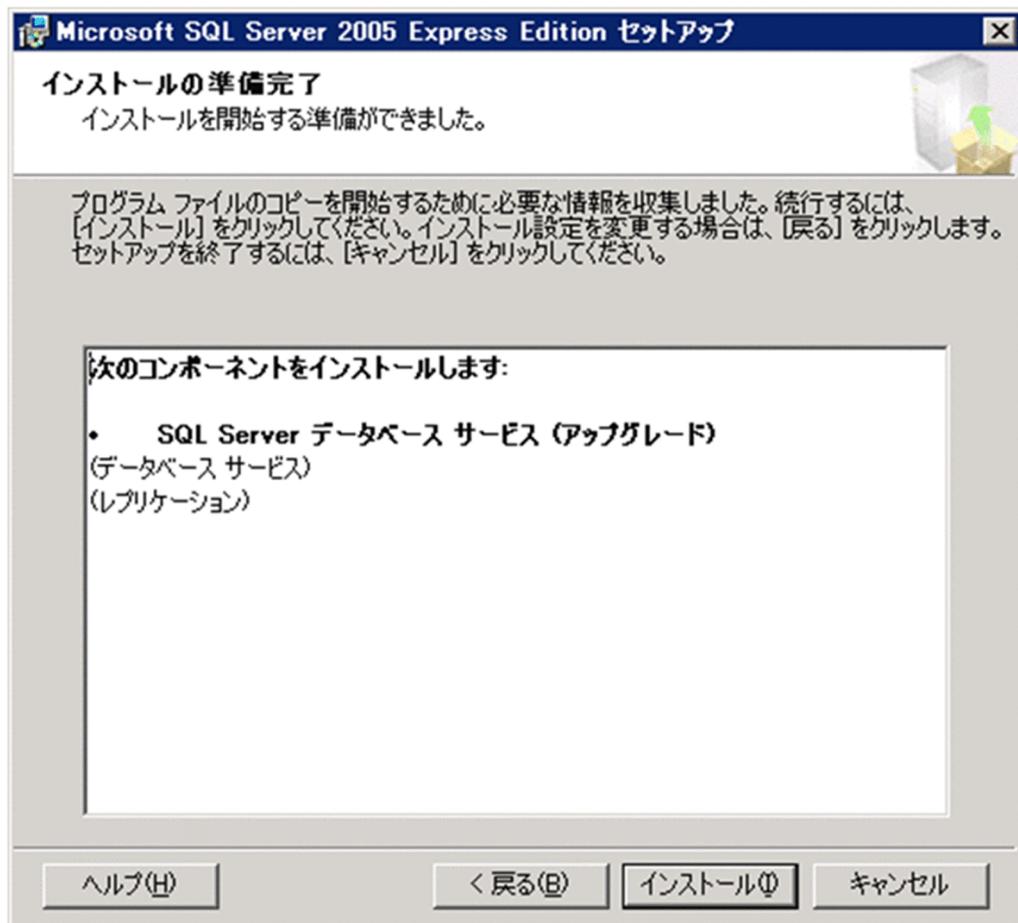
SP2 : 9.2.3042.00

SP3 : 9.3.4035.00

SP4 : 9.4.5000.00

13. 「インストールの準備完了」画面まで、既定値のまま「次へ」ボタンをクリックしてインストールを進めます。

14. 「インストールの準備完了」画面が表示されますので、「インストール」ボタンをクリックします。



注：

・上記画面に以下の【警告】が表示された場合は、引き続き 15.~22.を行ってください。

上記画面に以下の【警告】が表示されなかった場合は、15.~22.は不要ですので、手順 22.を行ってください。

警告：次に示す既存のコンポーネントの Service Pack レベルが、インストールされるコンポーネントの Service Pack レベルと異なっています。

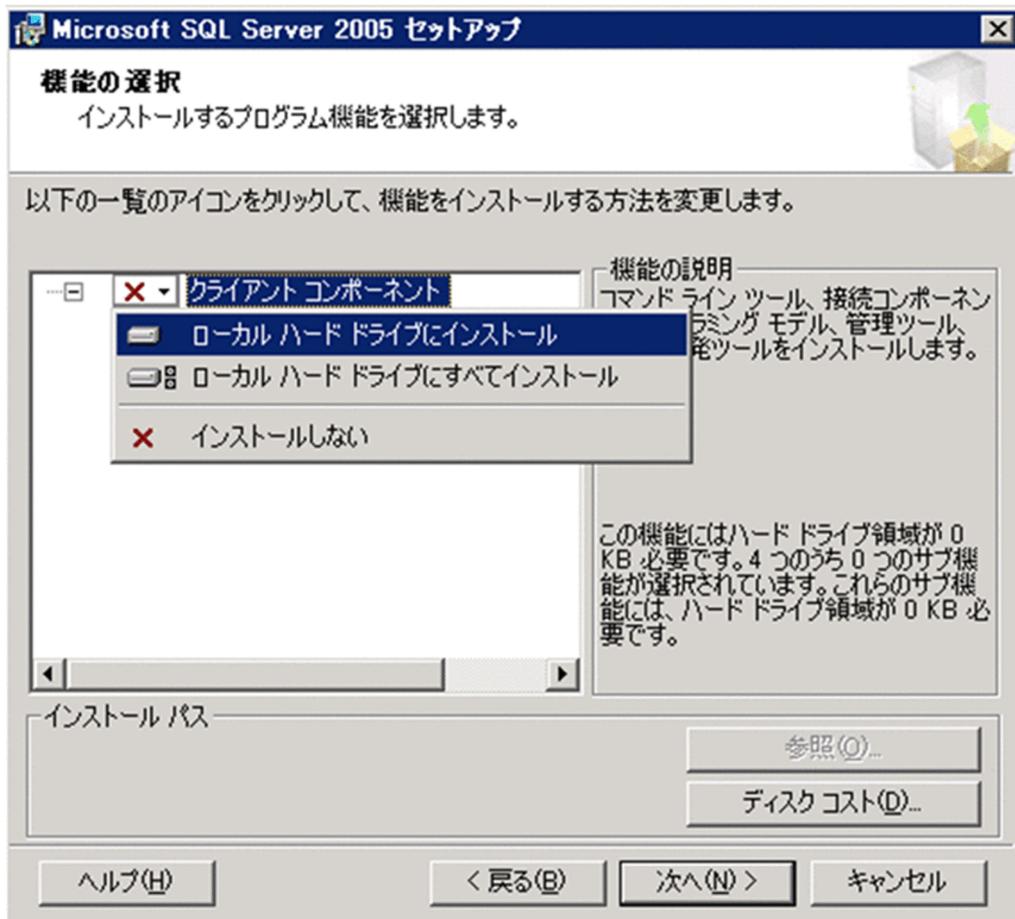
コンポーネント：Microsoft SQL Server 2005 Tools Express Edition

セットアップの完了後、最新の SQL Server 2005 Service Pack をダウンロードしてすべてのコンポーネントに適用する必要があります。

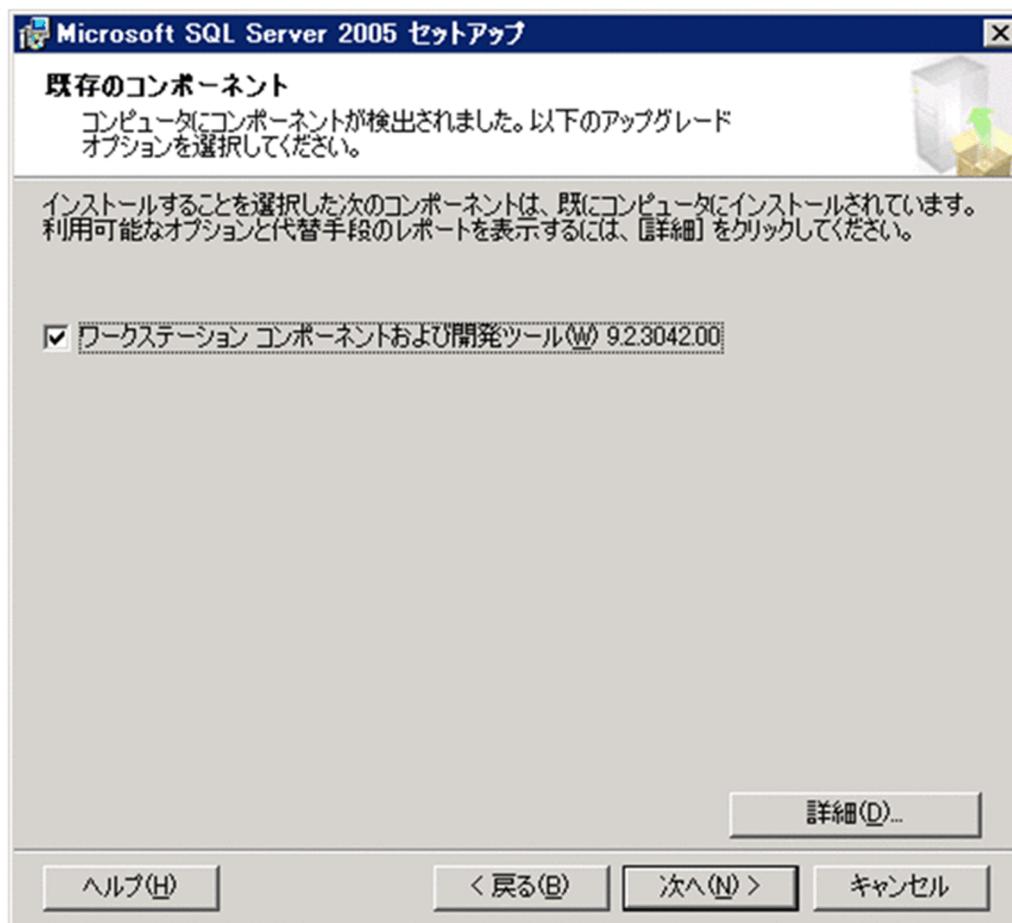
・インストール中に以下の画面が表示された場合は、「SQL Server (DPMDBI)」サービスを停止した後に、以下の画面の「再試行」ボタンをクリックしてください。



15. Microsoft ダウンロードセンターより、Microsoft SQL Server 2005 Express Edition Toolkit SP3/SP4 のインストーラ「SQLEXPRESS_TOOLKIT_JPN.EXE」を取得します。
16. 15.で取得した「SQLEXPRESS_TOOLKIT_JPN.EXE」を実行して、SQL Server 2005 Express Edition Toolkit SP3/SP4 のインストールを開始します。
17. 「使用許諾契約書」画面が表示されますので、内容を確認し「使用許諾契約書に同意する」にチェックを入れて、「次へ」ボタンをクリックします。「機能の選択」画面まで、「次へ」ボタンをクリックしてインストールを進めてください。
18. 「機能の選択」画面で、「クライアント コンポーネント」をクリックし「ローカルハード ドライブにインストール」を選択して、「次へ」ボタンをクリックします。



19. 「既存のコンポーネント」画面が表示されますので、「ワークステーション コンポーネントおよび開発ツール 9.2.3042.00」にチェックを入れて「次へ」ボタンをクリックします。



注：

「9.2.3042.00」は、DPMDBI インスタンスが利用する SQL Server 2005 Express Editoin の内部バージョンです。

SP ごとのバージョンは次のとおりです。

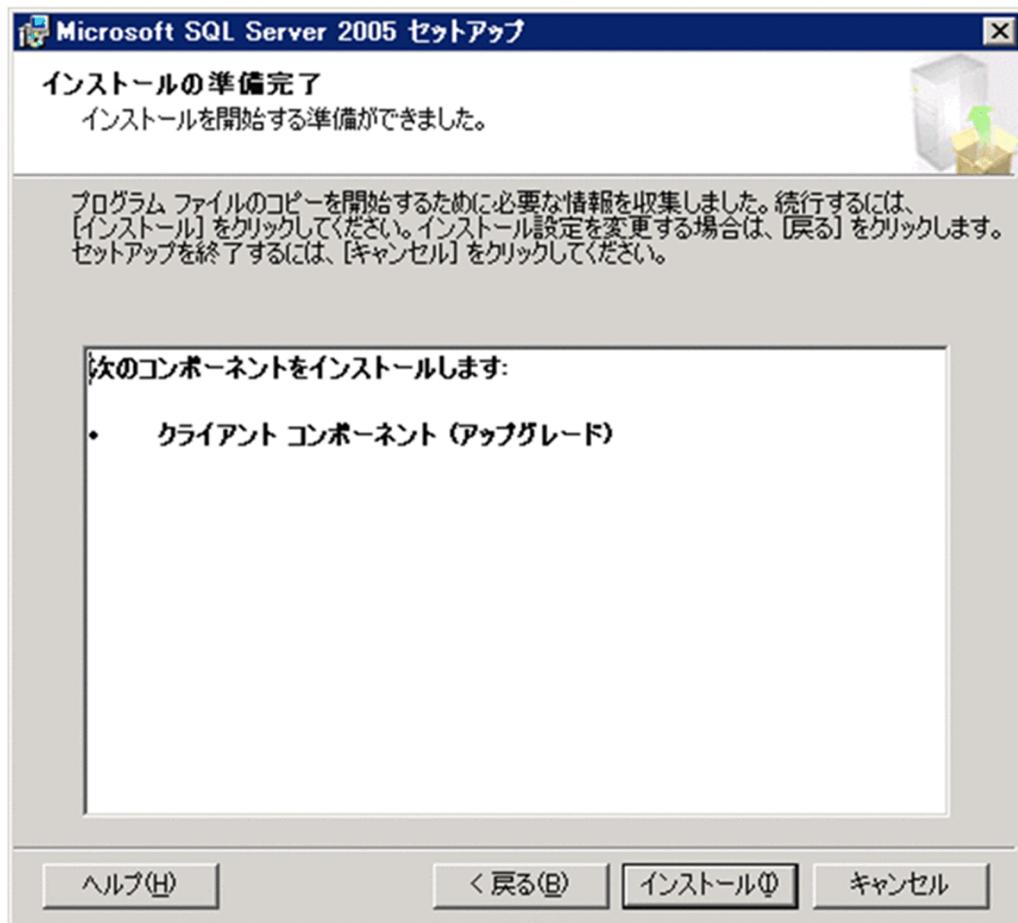
SP2：9.2.3042.00

SP3：9.3.4035.00

SP4：9.4.5000.00

20.「インストールの準備完了」画面まで、「次へ」ボタンをクリックしてインストールを進めてください。

21.「インストールの準備完了」画面が表示されますので、「インストール」ボタンをクリックします。



22.2.で停止したサービスを開始します。

以上で、Microsoft SQL Server 2005 Express Edition SP3/SP4 (x86) への更新は完了です。

付録 D.2 Microsoft SQL Server 2008 R2/2012/2014 Express の SP インストール

DPM09-10~09-54 の新規インストールでは、DPM サーバと共に Microsoft SQL Server 2008 R2 Express SP1 をインストールし、DPM で使用します。この場合、DPM09-55 以降にアップグレードしても、Microsoft SQL Server 2008 R2 Express SP1 を引き続き使用します。

DPM09-55~09-62 の新規インストールでは、DPM サーバと共に Microsoft SQL Server 2012 Express SP なしをインストールし、DPM で使用します。この場合、DPM09-63 以降にアップグレードしても、Microsoft SQL Server 2012 SP なしを引き続き使用します。

DPM09-63~09-64 の新規インストールでは、DPM サーバと共に Microsoft SQL Server 2014 Express SP なしをインストールし、DPM で使用します。

DPM09-65 の新規インストールでは、DPM サーバと共に Microsoft SQL Server 2014 Express SP2 をインストールし、DPM で使用します。

DPM09-70 以降の新規インストールでは、DPM サーバと共に Microsoft SQL Server 2016 Express SP1 をインストールし、DPM で使用します。

ここでは、Microsoft SQL Server 2008 R2/2012/2014/2016 Express の SP を更新する手順を説明します。

注：

SP 更新前に Microsoft 社の Service Pack 更新プログラムのダウンロードサイトを参照して、システム要件、注意事項などを確認しておいてください。

管理サーバへ管理者権限のあるユーザでログインします。

1. 「DeploymentManager」 で始まる次のサービスを停止します。

DeploymentManager API Service
DeploymentManager Backup/Restore Management
DeploymentManager Get Client Information
DeploymentManager PXE Management
DeploymentManager PXE Mtftp
DeploymentManager Remote Update Service
DeploymentManager Schedule Management
DeploymentManager Transfer Management

2. Microsoft のダウンロードセンターより Service Pack 更新プログラムをダウンロードし、適用します。

注：

SQL Server Express の製品のインストーラではなく、Service Pack 更新プログラムをダウンロードして、適用してください。

例) SQL Server 2014 SP1 の場合

SQL Server 2014 SP1 更新プログラム

⇒ SQLServer2014SP1-KB3058865-x64-JPN.exe または SQLServer2014SP1-KB3058865-x86-JPN.exe

SQL Server 2014 SP1 Express のインストーラ

⇒ SQLEXP_x64_JPN.exe または SQLEXP_x86_JPN.exe

3. 1. で停止したサービスを開始します。

以上で、Microsoft SQL Server 2008 R2/2012/2014/2016 Express の SP 更新は完了です。

付録 D.3 Microsoft SQL Server 2014 Express へのアップグレード

DPM08-50~09-03 の新規インストールでは、DPM サーバと共に Microsoft SQL Server 2005 Express Edition SP2 (x86) をインストールし、DPM で使用します。この場合、DPM09-10 以降にアップグレードしても Microsoft SQL Server 2005 Express Edition (x86) を引き続き使用します。

DPM09-10~09-54 の新規インストールでは、DPM サーバと共に Microsoft SQL Server 2008 R2 Express SP1 をインストールし、DPM で使用します。この場合、DPM09-55 以降にアップグレードしても、Microsoft SQL Server 2008 R2 Express SP1 を引き続き使用します。

DPM09-55~09-62 の新規インストールでは、DPM サーバと共に Microsoft SQL Server 2012 Express SP なしをインストールし、DPM で使用します。この場合、DPM09-63 以降にアップグレードしても、Microsoft SQL Server 2012 SP なしを引き続き使用します。

ここでは、DPM で使用する Microsoft SQL Server 2005/2008 R2/2012 Express を Microsoft SQL Server 2014 Express へアップグレードする手順を説明します。

注：

- アップグレード前に Microsoft 社のページ（以下）を参照して、システム要件、注意事項などを確認しておいてください。
- アップグレード前の SQL Server の Service Pack が最新でない場合、SQL Server 2014 へのアップグレードがサポートされていない場合があります。その場合は、Service Pack を適用した上で SQL Server 2014 へアップグレードしてください。

管理サーバへ管理者権限のあるユーザでログインします。

1. 「DeploymentManager」で始まる次のサービスを停止します。

DeploymentManager API Service
DeploymentManager Backup/Restore Management
DeploymentManager Get Client Information
DeploymentManager PXE Management
DeploymentManager PXE Mtftp
DeploymentManager Remote Update Service
DeploymentManager Schedule Management
DeploymentManager Transfer Management

2. Microsoft 社のページ（以下）を参照して、アップグレードを行ってください。

注：

- x64 OS 上で使用している SQL Server の Express (x86) を SQL Server 2014 Express にアップグレードする場合は、Microsoft ダウンロードセンターから SQLEXPRESS_x86 (x86/x64 両方の OS へインストールできるもの) をダウンロードして使用してください。
- 「SQL Server インストールセンター」の設定内容については、以下に注意してください。
「インスタンスの選択」画面：
DPM のインスタンス（デフォルト：DPMDBI）を選択してください。

3. 1. で停止したサービスを開始します。

以上で、Microsoft SQL Server 2014 Express へのアップグレードは完了です。

付録 E 各バージョンの変更内容

各版での変更内容を次に示します。

表 E-1 変更内容 (3020-3-T68-60) JP1/ServerConductor/Deployment Manager 09-63

追加・変更内容
Windows Server 2003 に SQL Server 2008 R2 Express SP1 をインストールする手順を削除した。
IIS 6.0 の設定に対する説明を削除した。
.NET Framework 3.5 SP1 と .NET Framework 4 のインストール手順から Windows Server 2003 を削除した。
DPM サーバをインストールする場合の注意事項を追加した。
DPM クライアントのインストール手順を変更した。
DPM クライアントをインストールする場合の注意事項を変更した。
アップグレードインストール実行前の注意事項を変更した。
DPM サーバのアップグレードインストールの注意事項を追加・変更・削除した。
DPM クライアントの自動アップグレードインストールの注意事項を追加・更新した。
自動アップグレード可能な DPM クライアントバージョンを更新した。
DPM クライアントの手動アップグレードインストールの注意事項を追加・更新した。
DPM サーバのアンインストールの注意事項を追加した。
DPM サーバのアンインストール手順を更新した。 (Microsoft SQL Server 2012 Native Client)
Web コンソールを起動する場合の注意事項を追加・削除した。
Web コンソールにログインする場合の注意事項を変更・削除した。
DPM クライアントをサイレントインストールする場合の注意事項を変更した。
Microsoft SQL Server 2008 R2 SP1 Express x86 へのアップグレードする手順を削除した。

変更内容 (3020-3-T68-50) JP1/ServerConductor/Deployment Manager 09-61

追加・変更内容
DPM サーバインストールに対する注意事項を追加・変更・削除した。
DPM クライアント (Windows) インストールに対する注意事項を追加・変更した。
DPM クライアント (Linux) インストールに対する重要事項を変更, 注意事項を追加した。
イメージビルダ (リモートコンソール) インストールに対する注意事項を追加した。
DPM コマンドラインインストールに対する注意事項を追加した。
アップグレードインストール前の注意に対する説明を変更した。
DPM サーバをアップグレードインストールする場合のターミナルサービスに対する注意事項を削除した。

追加・変更内容

DPM サーバをアップグレードインストールする場合の説明を追加した。

DPM クライアントのバージョンに 09-59～09-60 を追加した。

DPM クライアントの手動アップグレードに対する注意事項を追加した。

アンインストール実行前の注意に対する説明を変更した。

Web コンソール起動に対する重要事項を変更した。

ログインに対する説明を追加した。

サービスおよびプロセス一覧のフォーマットを変更した。

DPM サーバのサービスおよびプロセス一覧に SQLAgent\$インスタンス名を追加した。

管理サーバと管理対象マシンの通信に対する注意事項を変更した。

変更内容 (3020-3-T68-40) JP1/ServerConductor/Deployment Manager 09-59

追加・変更内容

IIS のインストール手順を変更した。

DHCP サーバ構築時の注意事項を追加した。

DPM サーバをインストールする場合の注意事項を追加・変更した。

DPM クライアントをインストールする場合の注意事項を追加・変更した。

DPM サーバをインストールする場合の注意事項を追加・変更した。

DPM コマンドをインストールする場合の注意事項を追加・変更した。

アップグレードインストール実行前の注意事項を追加・変更した。

DPM サーバをアップグレードインストールする場合の注意事項を追加・変更した。

DPM クライアントをアップグレードインストールする場合の注意事項を追加・変更した。

DPM サーバをアンインストールする場合の注意事項を追加・変更した。

DPM クライアントをアンインストールする場合の注意事項を追加・変更した。

Web コンソールを起動する場合の注意事項を追加・変更した。

ライセンスキーを登録する場合の注意事項を変更した。

DPM クライアント (Windows) のインストールフォルダのデフォルトと変更した。

DPM クライアント (Linux) の機能の説明を変更した。

ネットワークポートの一覧表の内容、および注意事項を追加・変更した。

DPM クライアントのサイレントインストールの注意事項を変更した。

変更内容 (3020-3-T68-30) JP1/ServerConductor/Deployment Manager 09-55

追加・変更内容

インストール媒体内のフォルダ構成を変更した。

事前にインストールが必要なソフトウェアを追加・変更した。

Windows Installer の格納先を変更した。

DPM サーバのインストール手順を変更した。

イメージビルダ (リモートコンソール) のインストール手順を変更した。

ポート番号 56050 に関する注意事項を追加した。

DPM 07-56~08-09 からのアップグレードインストールに追加手順が必要となる注意事項を追加した。

DPM09-54 で管理サーバと管理対象マシンのセグメントが異なる環境で、スイッチ (ルータ) にポート番号 4011 のフォワード設定を行っていた場合の注意事項を追加した。

DPM クライアント (Windows) の自動アップグレードの対象バージョンを追加した。

Internet Explorer 10 での Web コンソール表示設定を追加した。

IIS の設定を削除した。

Deploy-OS 設定に関する注意事項を削除した。

管理サーバ検索/ポート検索時に使用するポート番号を変更した。

変更内容 (3020-3-T68-20) JP1/ServerConductor/Deployment Manager 09-54

追加・変更内容

IIS インストール時にデフォルトで選択されている役割サービスのチェックを外さない旨のヒントを追加した。

DHCP サーバインストール時の「DHCPv6 ステートレスモードの構成」の画面での手順を訂正した。

DPM が使用するネットワークポートの既定値変更やポート可変性に伴う注意事項を追加した。

管理対象マシンが多台数の場合の注意事項を削除した。

Windows Server 2012 (Server Core) のインストール/アンインストール手順を追加

DPM クライアント (Windows/Linux) インストール時に管理サーバの IP アドレス指定を必須から任意に変更した。

DPM クライアント (Windows/Linux) による管理サーバの検索機能に関する注意事項を追加した。

DPM クライアント (Linux) をインストールする OS でのポート開放例を訂正した。

DPM クライアント (Linux) で開放するポート番号の参照先を追加した。

DPM クライアント (Linux) で必要なライブラリのインストール確認方法を追加した。

Linux でのインストール媒体のマウント時のコマンド例を変更した。

DPM08-50~09-03 から DPM サーバをアップグレードインストールした場合に、Deploy-OS の設定を引継がない旨の注意事項を削除した。

DPM サーバアップグレード時の IIS リセット確認で「いいえ」をクリックした場合の影響を追加した。

DPM09-54 より前のバージョンからアップグレードした場合に、DPM09-54 より前の Windows ファイアウォール設定を削除する手順を追加した。

追加・変更内容

Windows Server 2003 (IIS6.0) の IIS 設定を追加した。

DPM クライアントの自動アップグレードのサポート内容を、09-54 の内容に更新した。

DPM クライアントの自動アップグレードで、管理対象マシンのマシン再起動が困難な場合の代替手段を追加した。

DPM クライアントのインストール直後やサービス起動直後にアンインストールした場合にアンインストールが失敗する旨の注意事項を追加した。

DPM クライアント (Windows) をコマンドプロンプトからアンインストールする場合のコマンド例を変更した。

Internet Explorer 7/8/9 で別のタブで 2 つ目の Web コンソールを起動した場合の注意事項を追加した。

Web コンソールの起動 URL を追加した。

Web コンソール起動時に、無意味なダイアログが表示する注意事項を削除した。

DPM クライアント (Windows/Linux) で管理サーバ検索用のプロセスを追加した。

DPM クライアント (Linux) のインストールディレクトリを訂正した。

DPM が使用するネットワークポートの既定値を変更した。

DPM クライアント (Windows/Linux) で管理サーバ検索で使用するネットワークポートを追加した。

DPM クライアントが使用するネットワークポートの変更手順を削除し、DPM が使用するネットワークポートの変更手順を追加した。

変更内容 (3020-3-T68-10) JP1/ServerConductor/Deployment Manager 09-50

追加・変更内容

IIS で必要となる役割サービスを追加した。

IIS で必要となる役割サービスを選択する際の【ヒント】を追加した。

.NET Framework インストール時に再起動要求が発生した場合の手順を訂正した。

DPM08-70~08-80 のクライアントサービス for DPM の更新方法を訂正した。

Web コンソールで必要となるインターネットオプションの設定内容を一部削除した。

IIS7.0 でインターネット インフォメーション サービス (IIS) マネージャの起動手順を訂正した。

Internet Explorer 9 の場合に必要となる互換性表示の設定方法に説明を追加した。

Web コンソールのタイムアウト時間の変更手順に説明を追加した。

DPM サーバのサービス開始/停止順序を訂正した。

付録 F このマニュアルの参考情報

このマニュアルを読むに当たっての参考情報を示します。

付録 F.1 関連マニュアル

DPM のマニュアルは、以下のように構成されています。

また、このマニュアル内では、各マニュアルは「このマニュアルでの呼び方」の名称で記載します。

マニュアル名	このマニュアルでの呼び方	各マニュアルの役割
3020-3-T67 JP1/ServerConductor/Deployment Manager 導入・設計ガイド	導入・設計ガイド	DPM を使用するユーザを対象読者とします。 製品概要、各機能の説明、システム設計方法、 動作環境などについて説明します。
3020-3-T68 JP1/ServerConductor/Deployment Manager 構築ガイド	構築ガイド	DPM の導入を行うシステム管理者を対象読者 とします。DPM のインストール、アップグレー ドインストール、およびアンインストールなど について説明します。
3020-3-T69 JP1/ServerConductor/Deployment Manager 運用ガイド	運用ガイド	DPM の運用を行うシステム管理者を対象読者 とします。運用のための環境の設定手順、およ び運用する際の操作手順を実際の流れに則して 説明します。
3020-3-T70 JP1/ServerConductor/Deployment Manager リファレンスガイド	リファレンスガイド	DPM の操作を行うシステム管理者を対象読者 とします。DPM の画面操作、ツールの説明、メ ンテナンス関連情報、およびトラブルシュー ティングについて記載します。「構築ガイド」、 および「運用ガイド」を補完する役割を持ちま す。

DPM マニュアルはインストール媒体内に格納されています。

<インストール媒体>:\Manual

DPM サーバインストール後は、Web ブラウザから表示できます。

<http://<ホスト>/DPM/Manual/index.htm>

注：

ホストには、管理サーバのホスト名または IP アドレスを指定してください。

付録 F.2 このマニュアルでの表記

このマニュアルでは、製品名を次のように表記しています。

表記	製品名
DPM	JP1/ServerConductor/Deployment Manager

付録 F.3 KB (キロバイト) などの単位表記について

1KB (キロバイト), 1MB (メガバイト), 1GB (ギガバイト), 1TB (テラバイト) はそれぞれ $1,024$ バイト, $1,024^2$ バイト, $1,024^3$ バイト, $1,024^4$ バイトです。

索引

記号

「プログラムと機能」からアンインストールする 80

D

DHCP サーバの設定をする 16
DPM 運用前の準備を行う 85, 86
DPM クライアントのサイレントインストール 113
DPM クライアントをアップグレードインストールする 64
DPM クライアントをアンインストールする 80
DPM クライアントをインストールする 39
DPM クライアントを自動アップグレードインストールする 64
DPM クライアントを手動アップグレードインストールする 67
DPM コマンドラインをアップグレードインストールする 72
DPM コマンドラインをアンインストールする 83
DPM コマンドラインをインストールする 48
DPM コンポーネント共通の注意事項 22
DPM サーバをアップグレードインストールする 56
DPM サーバをアンインストールする 77
DPM サーバをインストールする 24
DPM の DVD 構成 2
DPM のインストール操作 1
DPM のネットワークポート変更 111

I

IIS7.5 (Windows Server 2008 R2) の場合 4

J

JRE をインストールする 19

L

Linux (x86/x64) 版をアンインストールする 82
Linux (x86/x64) 版をインストールする 43

M

Microsoft SQL Server 2005 Express Edition
SP3/SP4 のインストール 115
Microsoft SQL Server 2008 R2/2012/2014
Express の SP インストール 127

Microsoft SQL Server 2014 Express へのアップ
グレード 128

W

Web コンソールを起動する 86
Windows (x86/x64) 版をアンインストールする 80
Windows (x86/x64) 版をインストールする 39
Windows Server 2008 R2 の場合 16
Windows Server 2012/Windows Server 2016
に .NET Framework 4.6.2 をインストールする 20

あ

アップグレードインストール実行前の注意 54
アップグレードインストールを実行する 53
アップグレードインストールを始める前に 54
アンインストール実行前の注意 76
アンインストールを実行する 75
アンインストールを始める前に 76

い

インストール媒体による DPM クライアントのアップ
グレード 67
インストールを実行する 23
インストールを始める前に 1, 3
インターネットインフォメーションサービス(IIS)を設
定する 3

か

環境構築 85

こ

コマンドプロンプトからアンインストールする 81

さ

サービスおよびプロセス一覧 94
サービスの開始, 停止方法と順序 98

し

シナリオによる DPM クライアントのアップグレード
インストール 67

て

データベースのアップグレード手順 115

ね

ネットワークポートとプロトコル一覧 100

ら

ライセンスキーを登録する 91

ろ

ログインする 88

ログインユーザの設定を行う 90